

第V章 自然科学の分析・調査

1. 扇田道下遺跡出土鉄滓の分析調査

九州テクノリサーチ・TAC センター

大澤正己・鈴木瑞穂

(1) いきさつ

扇田道下遺跡は秋田県大館市字扇田道下に所在する。発掘調査地区からは10世紀代の集落跡が検出された。このうちの竪穴住居跡2軒（SI 4・36）より鉄滓が少量出土している。また鉄製品も多数共伴しており、鉄滓と鉄器製作との関係が注目される。そこで当遺跡での鉄器製作の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

2-1. 供試材

第2表に示す。出土鉄滓2点の調査を行った。

2-2. 調査項目

1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

2) 顕微鏡組織

鉄滓の鉄物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3% ナイタル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

3) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉄滓中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は200gfで測定した。

4) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化リン (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2)：ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

OOG-1：梔形鍛冶滓（含鉄）

1) 肉眼観察：平面が不整楕円状で非常に大形の梔形鍛冶滓 (1317g) と推測される。側面3面は破面。上面は比較的平坦で、全体に薄く木炭痕が散在する。下面は梔状で、粉炭による微細な凹凸が目立つ。また表面には茶褐色の銹化鉄部が点在する。特殊金属探知器の L (●) で反応もあり、部分的に金属鉄が含まれる。

2) 顕微鏡組織：第127図①～③に示す。滓中には発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル (Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、淡灰色盤状結晶ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が晶出する。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄である。3% ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト (Ferrite: α 鉄) 単相の組織が確認された。

3) ビッカース断面硬度：第126図③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は688Hv、743Hv であった。後者は (Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) としてはやや硬質であり、ヘルシナイト (Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) 成分を含む固溶体の可能性が高い。また淡灰色盤状結晶の硬度値は536Hv、671Hv であった。前者はファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) の文献硬度値600～700Hv より軟質であるが、測定時の亀裂の影響が大きい。ファヤライトと推測される。

4) 化学組成分析：第3表に示す。全鉄分 (TotalFe) 45.48% に対して、金属鉄 (MetallicFe) 0.15%、酸化第1鉄 (FeO) 41.09%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 19.15% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 27.52% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は2.65% を含む。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 特有成分の二酸化チタン (TiO_2) が7.72% と高値で、バナジウム (V) は0.13% であった。また酸化マンガン (MnO) が0.36%、銅 (Cu) は0.01% と低値である。

OOG-2：梔形鍛冶滓（含鉄）

1) 肉眼観察：大形の梔形鍛冶滓の側面破片 (285g) である。上面は平坦気味で、浅い木炭痕が残る。下面はきれいな梔形で灰色の炉床土が付着する。また滓の地の色調は暗灰色であるが、茶褐色の銹化鉄部もみられる。全体に銹化に伴う割れが著しく、特殊金属探知器の M (◎) で反応があり、内部には金属鉄が残存する。

2) 顕微鏡組織：第127図④～⑥に示す。④の周囲の暗灰色部は滓部で、⑤はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。一方、④中央はごく小形の金属鉄で⑥はその拡大である。3% ナイタルで腐食したところ、亜共析組織 ($C < 0.77\%$) が確認できた。この金属組織から炭素含有量は0.4%前後の鋼と推測される。

第2表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	地区・遺構名	遺物No.	遺物名称	推定年代	計 測 値		磁着度	メタル度	調 査 項 目								備 考
						大きさ(mm)	重量(g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
OOG-1	扇田道下	16H SI4	2	椀形鍛冶滓	10 c 前半	138×95×52	1317.0	5	L (●)		○	○			○			
OOG-2		18g ～19c SI36	14	椀形鍛冶滓		69×43×56	285.0	4	M (◎)		○	○			○			

第3表 供試材の化学組成

符号	遺跡名	地区・遺構名	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第 1 鉄 (FeO)	酸化 第 2 鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 珪素 (SiO ₂)	酸化 アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化 カルシウム (CaO)	酸化 マグネシウム (MgO)	酸化 カリウム (K ₂ O)	酸化 ナトリウム (Na ₂ O)	酸化 マンガン (MnO)	二酸化 チタン (TiO ₂)	酸化 クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化磷 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化 ジルコニウム (ZrO ₂)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	注
OOG-1	扇田道下	16H SI4	椀形鍛冶滓	10 c 前半	45.48	0.15	41.09	19.15	18.20	5.43	1.38	1.27	0.55	0.69	0.36	7.72	0.04	0.080	0.27	0.35	0.13	0.01	0.05	27.52	0.605	0.170	
OOG-2		18g ~19c SI36	椀形鍛冶滓		46.20	0.42	47.41	12.77	17.69	5.38	1.80	3.04	0.66	0.49	0.41	8.08	0.01	0.066	0.49	0.13	0.16	0.01	0.01	29.06	0.629	0.175	

第4表 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	地区・遺構名	遺物名称	推定年代	顕 微 鏡 組 織	化 学 組 成 (%)								所 見	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分	Cu		
OOG-1	扇田道下	16H SI4	椀形鍛冶滓	10 c 前半	滓部:U+F、微小金属鉄:フェライト单相	45.48	19.15	2.65	7.72	0.13	0.36	27.52	0.01	製錬滓との分離の悪い鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去で生じた精錬鍛冶滓の可能性があるが、砂鉄製錬滓の可能性も完全には否定できない	
OOG-2		18g ～19c SI36	椀形鍛冶滓		滓部:U+F、微小金属鉄:亜共析組織	46.20	12.77	4.84	8.08	0.16	0.41	29.06	0.01		

U:Ulvöspinel (2FeO・TiO₂)、F:Fayalite (2FeO・SiO₂)

3) ビッカース断面硬度：第127図⑤の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は667Hvで、ウルボスピネルに同定される。また淡灰色柱状結晶は604Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

さらに⑥の金属鉄部の調査を実施した。針状フェライト析出個所の硬度値は142Hv、素地のパーライト組織の硬度値は180Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。

4) 化学組成分析：第3表に示す。全鉄分 (TotalFe) 46.20% に対して、金属鉄 (MetallicFe) 0.42%、酸化第1鉄 (FeO) 47.41%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 12.77% の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 29.06% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) 4.84% と高めである。また製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) が8.08% と高値で、バナジウム (V) は0.16% であった。また酸化マンガン (MnO) が0.41%、銅 (Cu) は0.01% と低値である。

(4) まとめ

扇田道下遺跡の竪穴住居跡から出土した鉄滓2点 (OOG-1、2) は、ウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂)、ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) 組成であった。ともに滓中ウスタイト (Wustite: FeO) の晶出はなく、通常砂鉄製錬滓にみられる鉱物組成である。チタン含有率も高値傾向を示す (TiO₂: 7.72%、8.08%)。

しかし同市内の大館野遺跡から出土した製鉄関連遺物よりも、そのチタン含有率 (TiO₂) は低めである。さらに秋田県下の出土砂鉄・製錬滓と比較しても低値傾向を示す〔第126図〕^(注4)。滓との分離の悪い鍛冶原料 (製錬鉄塊系遺物) の不純物除去作業で生じた精錬鍛冶滓の可能性も高いと考えられる。さらに周辺地域の分析調査例の蓄積が待たれるところであり、製錬滓の可能性も完全に否定はできない。

また滓中の微細な金属鉄部は、炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織 (OOG-1) と亜共析組織の鋼 (C: 0.4%程度) であった。鉄は炭素含有率が高いほど融点が下がるため、吸炭の進んだ鉄は製錬時に溶解して、比較的きれいに滓と分離すると推察される。一方、炭素量の低い軟鉄 (低炭素鋼) は固相で成長するので、滓との分離が悪くなる。

扇田道下遺跡またはその周辺には、製錬滓との分離が悪い状態の鍛冶原料が搬入されており、更なる除滓作業 (精錬鍛冶) が必要であったと推察される。

(注)

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450~500Hv、マグネタイトは500~600Hv、ファヤライトは600~700Hvの範囲が提示されている。またウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

(2) 黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物〔第2版〕』共立出版株式会社 1983

第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル類 (Spinel Group) の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式は XY_2O_4 と表記できる。X は2価の金属イオン、Y は3価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。(略)

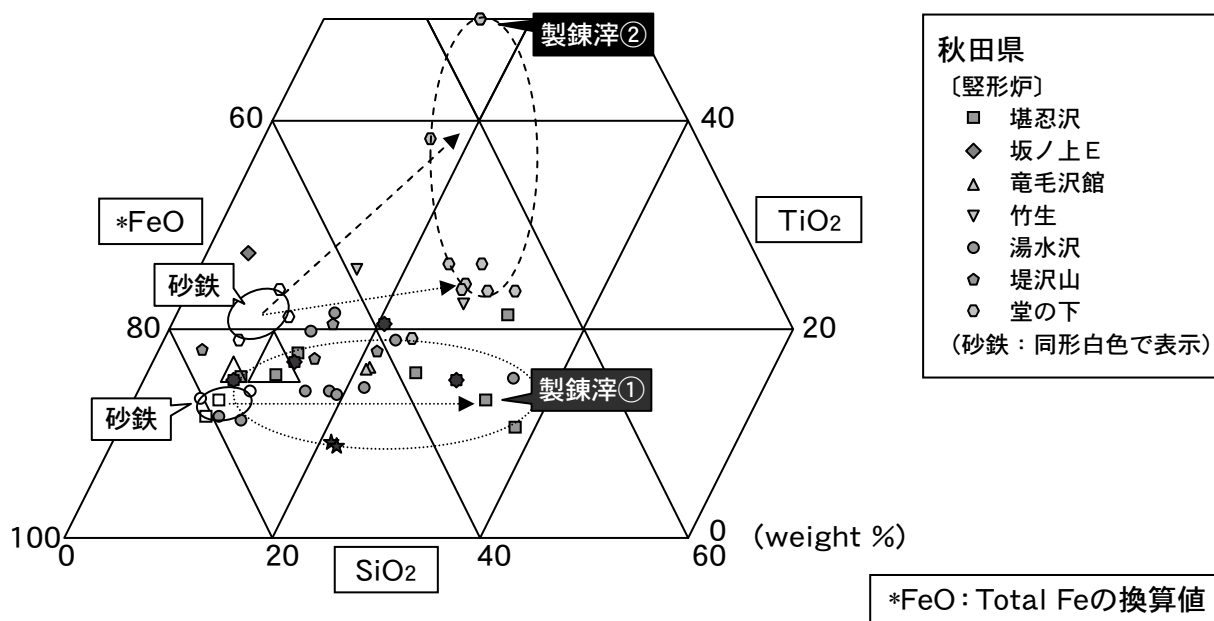
(3) 木下亀城・小川留太郎『岩石鉱物』保育社 1995

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略) チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。

チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略) このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。

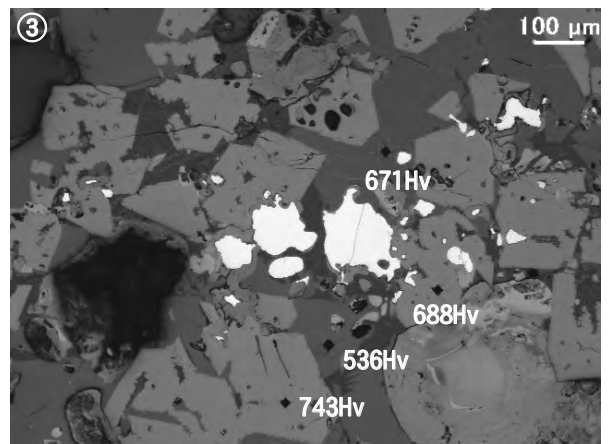
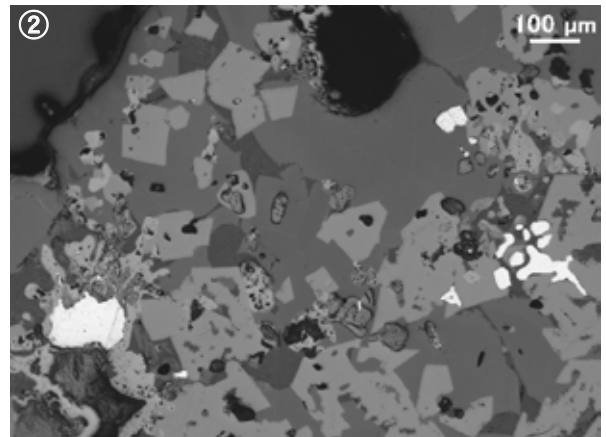
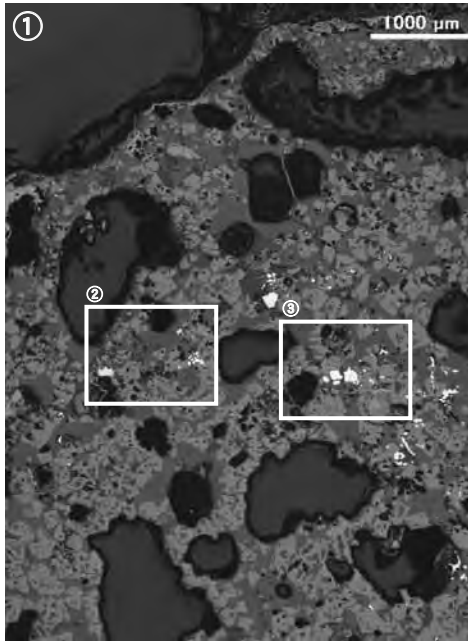
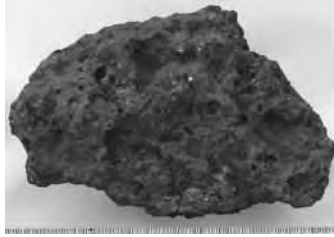
(4) 鈴木瑞穂「分析からみた古代の鉄生産技術について」『第14回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と鉄』奈良文化財研究所 2011 図4をもとに加筆

- ★ 扇田道下遺跡出土鉄滓
- 大館野遺跡出土製錬滓

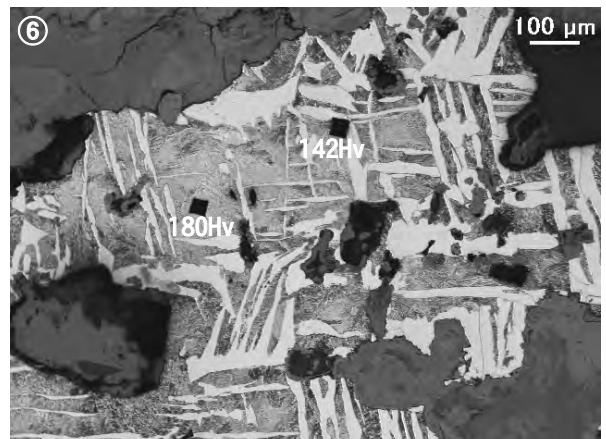
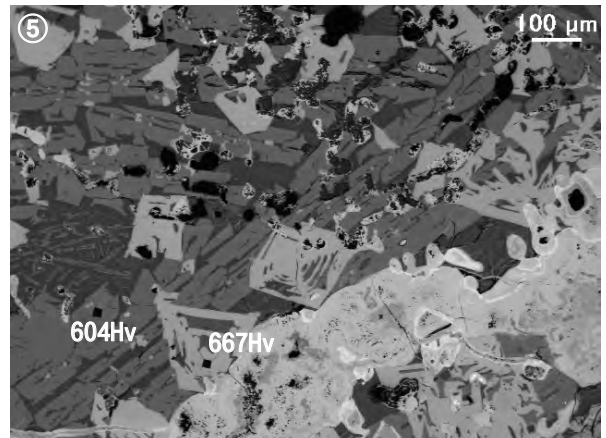
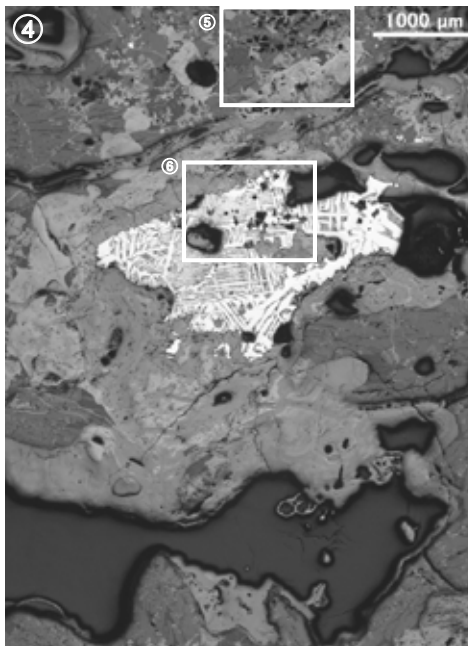


第126図 秋田県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成

OOG-1
梔形鍛冶滓(含鉄)
 ①～③滓部:ウルボスピネル・
 ファヤライト、硬度:200gf、
 微小金属鉄粒:ナイトルetch
 フェライト単相



OOG-2
梔形鍛冶滓(含鉄)
 ④滓部:ウルボスピネル・ファヤ
 ライト、金属鉄部:ナイトル
 etch 亜共析組織
 ⑤滓部拡大、⑥金属鉄
 部拡大、硬度:200gf



第127図 梔形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

2. 扇田道下遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

扇田道下遺跡（秋田県大館市字扇田道下地内）は、柄沢川右岸の河岸段丘上に立地する。本遺跡は、十和田カルデラが形成した火砕流台地に接しており、遺跡の南側を流れる柄沢川が形成した扇状地の西方縁辺部に位置している。本遺跡では、発掘調査の結果、縄文時代中期及び平安時代の竪穴住居跡が確認されており、平安時代の住居跡には焼失家屋、住居構築材と考えられる炭化材や炭化米等の炭化物集中を伴うという検出状況が確認されている。

本報告では、平安時代の竪穴住居跡の構築年代、住居構築材や炭化種実等の種類及び植物利用の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、住居跡床面から出土した炭化物2点（試料No.1、No.2）である。試料No.1は、SI30の床面から出土した炭化材であり、長さ約3.5cm、幅2.0cm、厚さ約4cmの柃目板状を呈する。試料No.2は、SI54の床面から出土した炭化物であり、長さ約7cm、幅約4cm、厚さ約3cmの平板状を呈し、集合・癒着した多量の炭化種実を基質とし、その上部と下部の平坦面には炭化材や木材痕跡が観察される。

測定には、試料No.1が観察範囲内の最外年輪を含む部位より採取した炭化材、試料No.2が基質を為す炭化種実塊の一部を、それぞれ供した。

2. 分析方法

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とし

た年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期5,730 ± 40年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表するのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 $\sigma \cdot 2\sigma$ (σ は統計的に真の値が68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比は、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果及び考察

出土炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果 (補正年代) は、SI30床面炭化材 (試料No.1) が $1,270 \pm 20$ yrBP、SI54床面炭化種実 (試料No.2) が $1,180 \pm 20$ yrBP である。また、暦年較正結果 (測定誤差 σ) は、SI30床面炭化材 (試料No.1) が calAD688-calAD770、SI54床面炭化種実 (試料No.2) が calAD782-calAD887を示す。

上記した暦年較正結果を参考とすると、SI30は7世紀後半～8世紀後半、SI54は8世紀後半～9世紀後半頃の遺構と推定される。調査所見によれば、本遺跡より検出された竪穴住居跡群は、十和田火山の噴火に伴う大湯浮石 (軽石) が覆土中に2次堆積として確認できる遺構と、大湯浮石降下後に構築された遺構とに分類されている。大湯浮石は、十和田a テフラの下部を構成する軽石層である (Hayakawa, 1985) から、その噴出年代は To-a の噴出年代である AD915年になる (早川・小山, 1998)。測定の対象とされた2軒の竪穴住居跡は、暦年較正結果から時期差のあることが想定されるが、いずれも大湯浮石降下以前に構築された遺構と考えられる。

第5表 放射性炭素年代測定結果及び暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果				相対比	Code.No.
試料No.1 SI30 床面 (炭化材; ニレ属)	$1,270 \pm 20$	-25.04 ± 0.27	$1,271 \pm 23$	σ	cal AD 688 - cal AD 723	cal BP 1,262 - 1,227		0.555	IAAA-123210
					cal AD 740 - cal AD 770	cal BP 1,210 - 1,180		0.445	
				2σ	cal AD 672 - cal AD 777	cal BP 1,278 - 1,173		1.000	
試料No.2 SI54 床面 (炭化種実; イネ)	$1,180 \pm 20$	-22.73 ± 0.41	$1,180 \pm 23$	σ	cal AD 782 - cal AD 789	cal BP 1,168 - 1,161		0.089	IAAA-123211
					cal AD 810 - cal AD 847	cal BP 1,140 - 1,103		0.467	
					cal AD 855 - cal AD 887	cal BP 1,095 - 1,063		0.444	
				2σ	cal AD 776 - cal AD 895	cal BP 1,174 - 1,055		0.969	
					cal AD 925 - cal AD 937	cal BP 1,025 - 1,013		0.031	

II. 種実遺体分析・炭化材（樹種）同定

1. 試料

試料は、I. 放射性炭素年代測定に供した SI30床面から出土した炭化材（試料No.1）と SI54床面から出土した炭化種実塊（試料No.2）、さらに SI30床面から出土した炭化種実塊（試料No.3）の、計3点である。SI30の炭化種実塊（試料No.3）は、外観は多量の粒状を呈する炭化物が集合した球状を呈し、径2～3cmを測る。

2. 分析方法

(1) 種実遺体分析

ルーペや実体顕微鏡等を用いて表面を観察し、形態的特長から種類を同定する。外観及び特長的な形状を示す部分に関しては写真撮影を行い、図版に示した。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

(1) 種実遺体分析

1) SI54床面（試料No.2）

試料No.2は、炭化種実塊の上部と下部の平坦面に炭化材が付着する（第128図1-2a,2e）。炭化材は板状を呈し、厚さ約2～3mmを測るほか、木材組織の印象も確認できる（第128図1-2b）。炭化種実塊は、全体的にあばた状を呈し、火熱による発泡や変形、癒着が著しく、断面をみても個々の粒が認識できない（第128図1-2f,2g）。粒の形状の保存が比較的良好な箇所では、大きさ6mm、幅4mm、厚み2mm程度の楕円形の粒状が確認できることから、イネ（*Oryza sativa* L.）と考えられる。ただし、イネの胚乳（いわゆる玄米）にみられる隆起条線がみられず、穎娃も確認できない。なお、観察は試料表面に留めているため、全ての粒がイネであると断定することは難しいが、観察範囲内では他の種類はみられなかった。

2) SI30床面（試料No.3）

SI30床面（試料No.3）は、上記した試料No.2に比べて保存状態がよく、粒の状態が明瞭である。試料表面の観察では、いずれもイネに同定され、胚乳の表面にみられる隆起条線も確認できる。なお、イネには穎の付着は認められず、イネ以外の種類は確認できない。粒の大きさや重量（1.2g）を参考とすると、少なくとも100粒程度が集合し、癒着していると推定される。

(2) 樹種同定

SI30床面（試料No.1）の炭化材は落葉広葉樹のニレ属、SI54床面（試料No.2）の炭化種実塊に付着した炭化材は針葉樹のスギに同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

試料は種実遺体塊に薄く板状に付着している状態で、保存状態が悪く、観察範囲は晩材部の一部分のみである。軸方向組織は、観察した範囲では仮道管のみが認められる。晩材部の幅は少なくとも6細胞幅以上あり、比較的広い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。観察範囲が狭いが、晩材部が比較的広いと考えられること、分野壁孔が比較的大きいスギ型となることから、スギに同定される。

・ニレ属 (*Ulmus*) ニレ科

環孔材で、孔圈部は1列、道管は孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-6細胞幅、1-50細胞高。木材組織の特徴から、ハルニレまたはオヒョウと考えられる。

3. 考察

扇田道下遺跡から出土した炭化種実塊は、SI30床面試料（試料No.3）が概ね球体を呈し、SI54床面試料（試料No.2）が平板状を呈する。また、SI54床面試料には上部と下部の平坦面に炭化材や木材の痕跡（印象）も認められた。これらの炭化種実塊は、いずれもイネも主体としており、穎が付着する個体が認められなかったことから、玄米の状態で火熱を受けたと考えられる。また、炭化種実塊を構成する種実の保存や癒着状況が異なっていたことから、燃焼時の条件が異なっていたと想定される。

一方、出土炭化材は、SI30床面試料（試料No.1）がニレ属に同定された。ニレ属には、ハルニレ、アキニレ、オヒョウの3種があるが、木材組織の特徴からハルニレまたはオヒョウと考えられる。ハルニレやオヒョウは、平野部や山麓の比較的水分が多く肥沃な土地に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。おそらく強度を必要とする部材等に利用された可能性がある。また、SI54床面試料（試料No.2）に認められた炭化材は、薄い板状を呈し、種実遺体塊に接する状況が確認された。炭化材は、針葉樹のスギに同定された。スギは、扇状地扇端部等の水分の豊富な土地に生育する常緑高木であり、木材は木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。本試料は、調査所見によれば住居構築材の可能性が示唆されているが、炭化種実塊に板状の炭化材が付着する状況や板組物の板や刳物容器等にスギが多く認められている（伊東・山田,2012）ことから、容器の痕跡である可能性もある。この点については、出土状況等と合わせた検討が期待される。

引用文献

- Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo,vol.60 ,507-592.
- 早川由紀夫・小山真人,1998,日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-.火山,43,403-407.

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

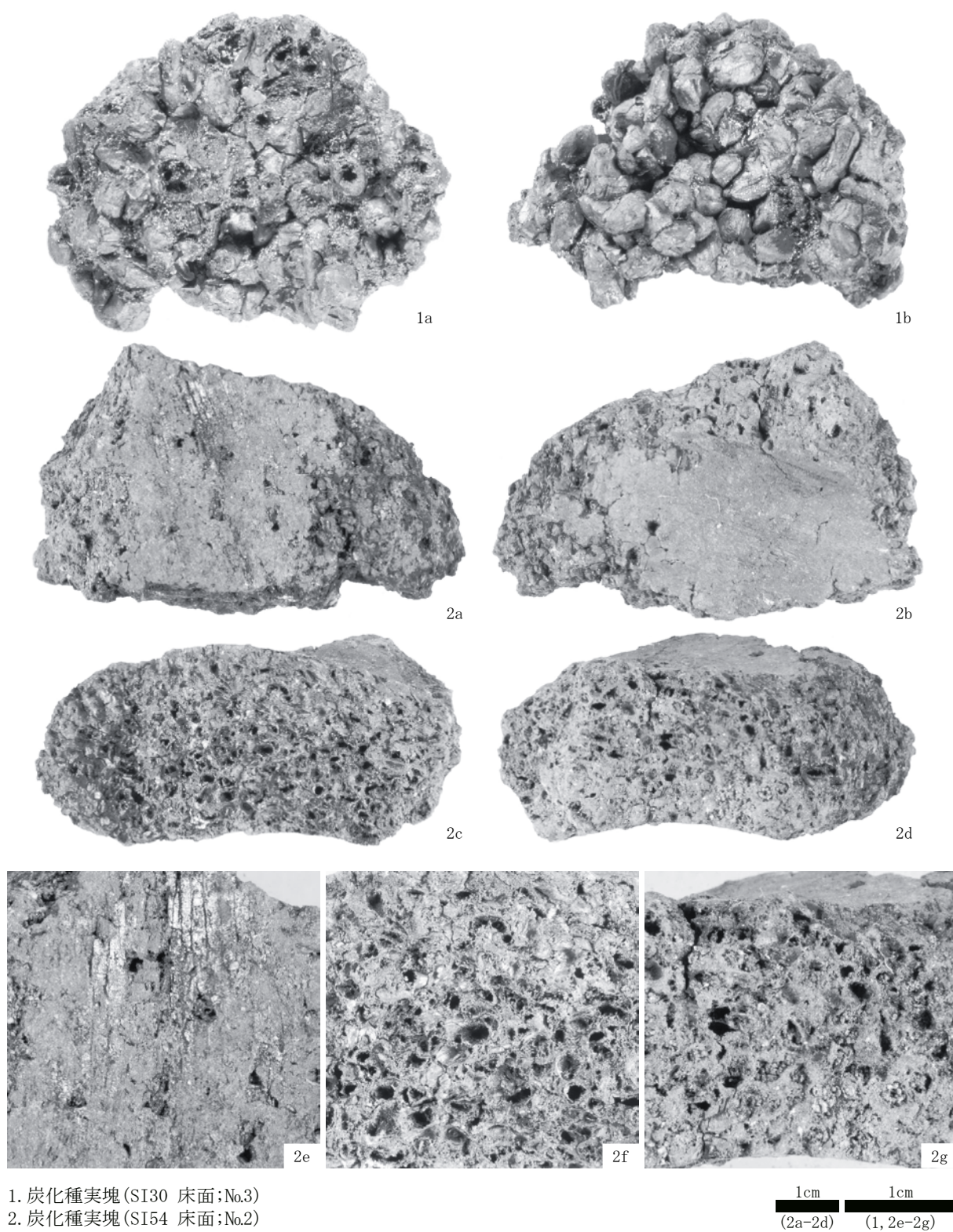
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.

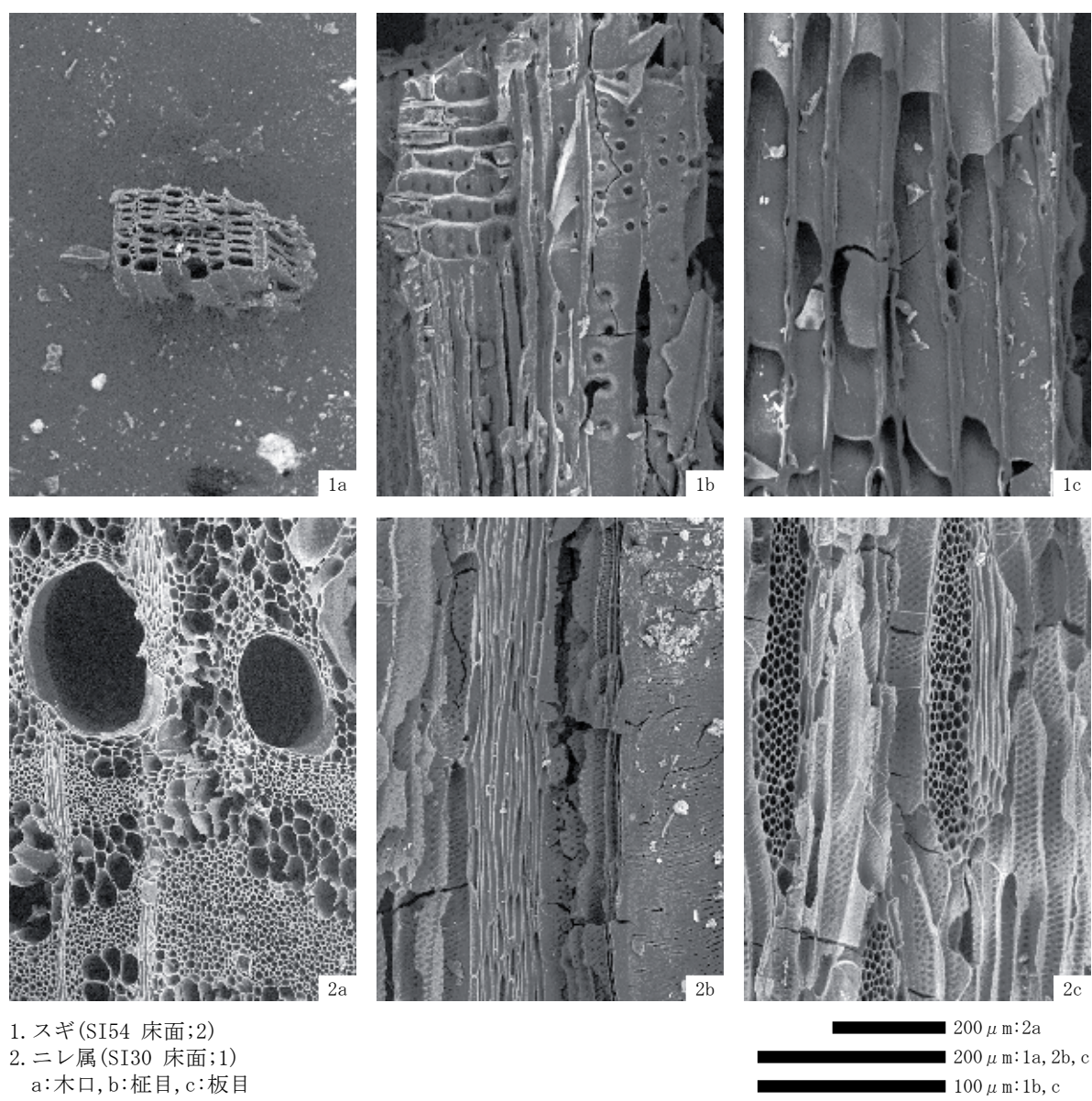
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



第128図 種実遺体



第129図 炭化材

第Ⅵ章 ま と め

1. 縄文時代の遺構と遺物

調査の結果、縄文時代の遺構と遺物は、竪穴住居および土器・石器が検出された。以下、これらの結果について簡単に記し、縄文時代における本遺跡の内容を解明する上での一助としたい。

竪穴住居は1軒検出された。これは、遺跡南部の柄沢川に面する段丘先端に位置している。住居の時期は、縄文中期末葉に位置づけられ、大木10式に並行するものとみなされる。

出土した遺物は、土器片約90点、石器類7点にすぎない。これらの遺物は縄文時代前期から晩期にかけての広範な時期に渡っている。このうち、9割は包含層から得られたもので、主体は中期末葉である。他の時期は散見される程度出土量である。石器類は、頁岩を主とする剥片類が多い。礫・礫片の出土量は、市内の他の遺跡に比べ、非常に少ない。定型的な石器は石匙1点のみである。

2. 平安時代中期の土器

(1) はじめに

扇田道下遺跡の出土土器の主体をなすのは平安時代（9世紀第4四半期～10世紀前半）の土器であり、約60軒の竪穴住居を中心にある程度まとまって出土した。大館盆地の当該期の土器については、池内遺跡や山王台遺跡の資料（秋田県埋蔵文化財センター1999、大館市教育委員会1990）など数多くある。また、釈迦内中台Ⅰ遺跡の資料により土器編年が示されており（新海2008）、大館野遺跡の資料をもとにおおよその時期変遷を示した（嶋影2012）。しかし、山王台遺跡の資料や釈迦内中台Ⅰ遺跡03-ST185以外に10世紀前葉以前の一括土器はなく、これ以前の土器様相は明確ではなかった。したがって、ここで検出された資料は貴重であり、これをもとに当該期の土器について検討する。

(2) 変遷の画期

土器の年代は周辺地域の資料と対比してみても、9世紀第4四半期～10世紀前半にほぼ相当する。住居出土土器のあり方は一様ではなく、時期により変化していることがわかる。それは器種構成や土師器の製作技法、須恵器・土師器の胎土などの変化にあらわれている。土器の、①器種分類、②製作技法、③胎土・生産地、については前述した（第Ⅳ章3（3））が、あらためて②と③について簡単にまとめると以下のとおりである。

土師器の製作技法

- ・ A系（非ロクロ）
- ・ B系（ロクロ）

須恵器の胎土・産地

- ・ A 群 (B 群以外) : 主体は秋田県北部と考えられ、それ以外も含む。
- ・ B 群 (五所川原窯跡群) : 主体は持子沢・前田野目窯。

土師器の胎土

- ・ 非ロクロ系 : 非ロクロ土師器に特有なもの。
- ・ 須恵器系 : ロクロ土師器のうちの一部の古いもの。
- ・ 非須恵器系 : ロクロ土師器の大半。

これら、技法・胎土に加えて器種構成の変化に注目すると、次の2つの段階に分けることができる。

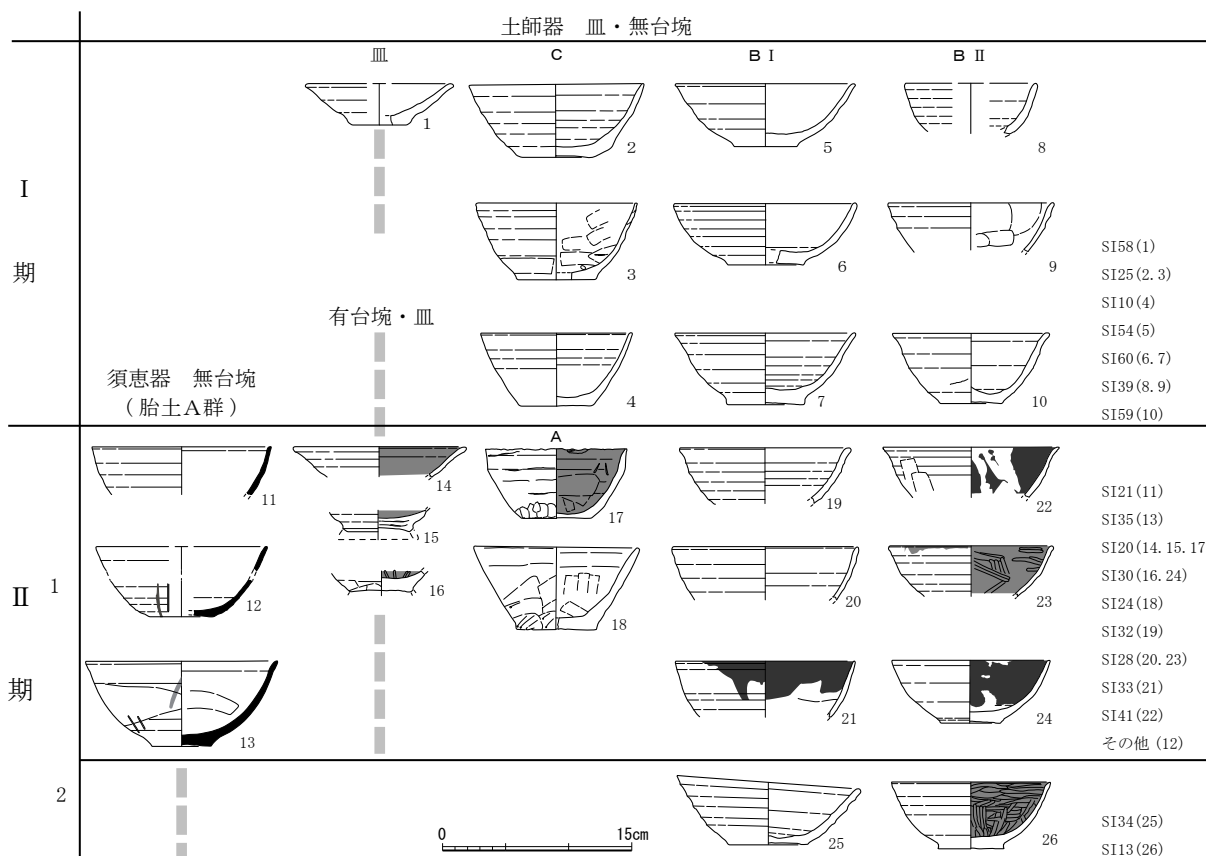
第Ⅰ期：土師器は非ロクロA系とロクロ土師器のB系があり、須恵器の数量が相対的に少ない段階。

第Ⅱ期：土師器煮炊具にロクロがほとんどなくなり、非ロクロ土師器のA系が主体を占め、須恵器の数量が若干増加する段階。

第Ⅰ期

土師器は非ロクロA系とロクロ土師器B系があり、須恵器の出土が若干みられる段階である。SI10・SI25・SI54・SI55・SI58・SI60を標識とする。

土師器 煮炊具 (長甕・小甕・鍋など) のうち、SI60では非ロクロのA系がすべて占め、SI58ではロクロ土師器のみである。器種別にみると、大型である長甕は小甕に比して、非ロクロの割合が高いようである。非ロクロ土師器の底部は不調整と木葉痕が多く、砂痕は少ない。煮炊具の胎土は精良なものがいくつか含まれる。



第130図 平安時代中期の土器の変遷 (1)

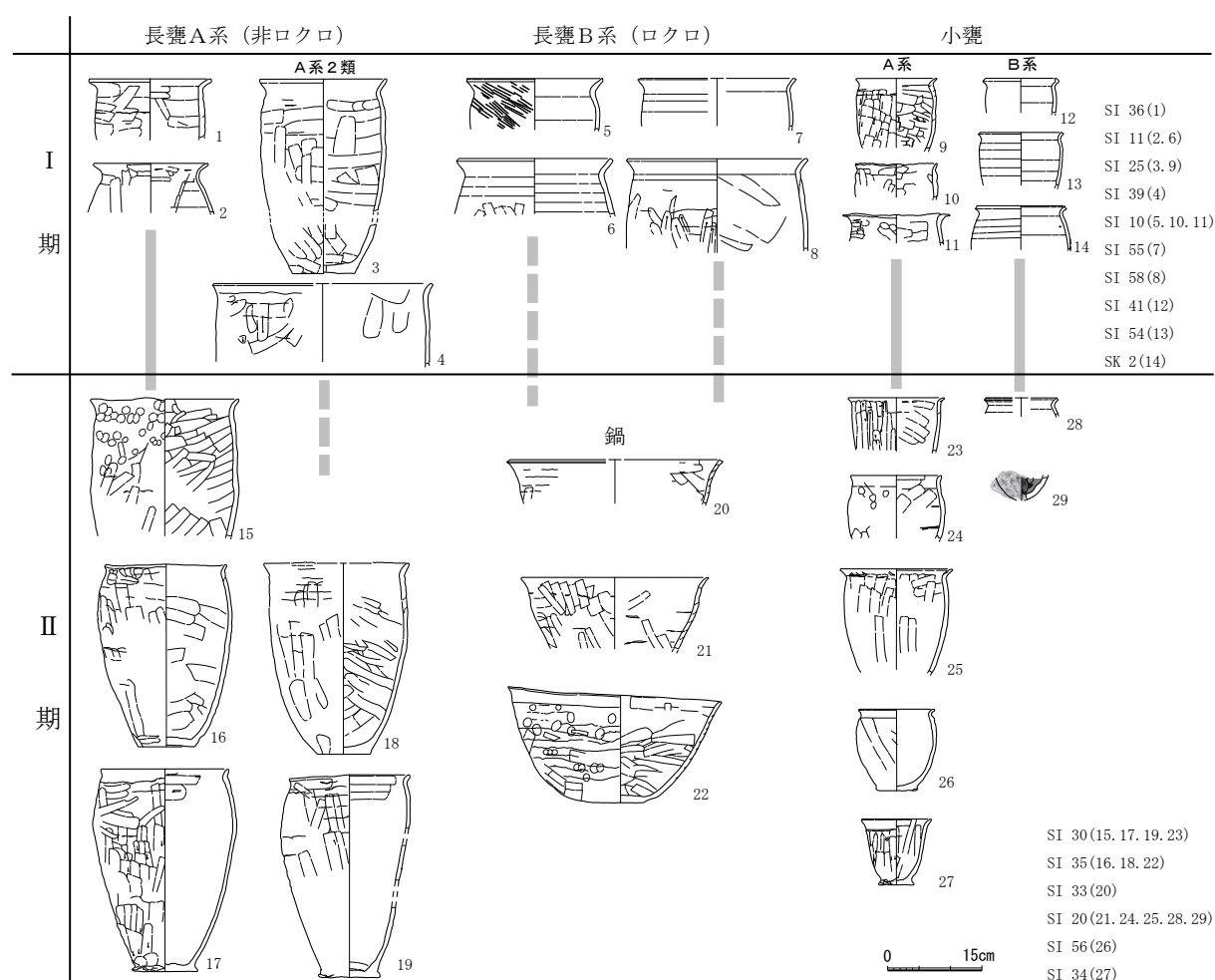
須恵器 食膳具・貯蔵具が主体であるが、土師器に比し、数量はきわめて少ない。SI10・SI55・SI58はまったく須恵器がなく、SI60は個体数で全体の1%、SI54は全体の約3%、SI25は全体の約10%に過ぎない。前述のとおり全時期を通じて食膳具の大半は土師器であるが、須恵器の食膳具が少量ながら含まれる。しかし、これらの出土量は少なく、土師器の食膳具を補っていたとは考えられない。須恵器の胎土は第2段階に比してB群の占める割合は少ない。

第Ⅱ期

土師器煮炊具はロクロのB系がほとんどなくなる段階である。前後2時期に区別される。Ⅱ₁期は土師器埴類が出土する時期であり、Ⅱ₂期は土師器埴類が減少する時期である。Ⅱ₁期はSI20・SI21・SI30・SI35、Ⅱ₂期はSI13を標識とする。

土師器 煮炊具の技法はA系が占め、B系はごく少ない。Ⅱ₂期にはB系は姿を消す。甕類は体部が張る形態が主体となり、煮炊具の胎土はⅠ期に比べ、相対的に粗いものが多くなる。底面は砂痕の比率が増加する。

須恵器 数量は少ないものの、埴と貯蔵具が少量出土する。無台埴は底部が平底で、弧状に内湾して立ち上がる。身がやや深い。口径は14cm前後である。



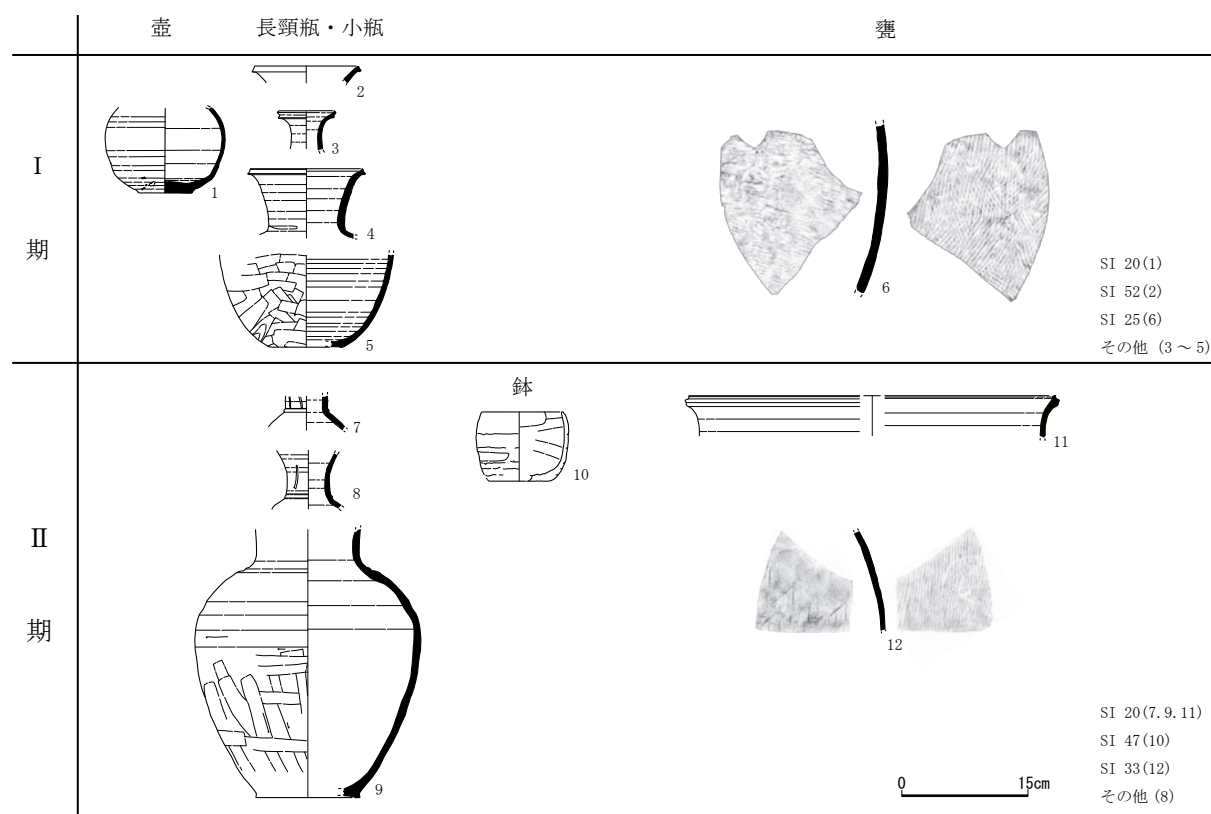
第131図 平安時代中期の土器の変遷 (2)

(3) 須恵器窯との関係

本遺跡に供給された須恵器の大半は、秋田県北部地方、青森県五所川原須恵器窯の製品と考えられる。このうち、前者の調査はあまり進んでいない面もあって、不明な点が多い。報告されているものは、秋田県北部地方では能代市十二林遺跡SN223窯跡（秋田県埋蔵文化財センター1989）、三種町保竜館遺跡（山本町教育委員会2002）、五所川原須恵器窯では高野1号窯跡（五所川原市教育委員会2005）・原子3号窯跡（五所川原市教育委員会2003）、前田野目窯跡（坂詰1968、犬走須恵器窯跡発掘調査団・五所川原市教育委員会編1998、五所川原市教育委員会2003）、持子沢窯跡（五所川原市教育委員会2002・2003）である。ここでは調査されている窯跡資料のうち、本遺跡の土器と関係があるものについて概観する。

I 期に比定されるものは、現在のところ不明である。いくつかの窯跡が想定されるが、多くは秋田県北部に存在する可能性がある。

II 期に比定されるものは、十二林遺跡SN223窯跡と持子沢窯跡、前田野目7号窯跡である。前二者はともに瓶類底面に菊花状文がある。両者を比較すると、十二林遺跡SN223窯跡が古いとされる（東北古代土器研究会2008）。すなわち、前者は長頸瓶の最大径が体部上半部にあり、高台が高い。これに対し、後者は最大径が体部下半部にある。SI30例（第132図9）は最大径が体部上半部にあり、十二林遺跡SN223に類似する。なお、持子沢窯跡や前田野目7号窯跡の坏類は体部から口縁部が丸味をもつ碗形で、口縁端部が尖り気味になり、胎土B群の特徴をよく示している。



第132図 平安時代中期の土器の変遷 (3)

(4) 年代の比定

現在のところ県北部における9世紀の比較資料は少ない。10世紀全般の様相がおおよそ知られるのは大館市釈迦内中台Ⅰ遺跡の「釈迦内中台編年」(新海2008)があるものの、県北部では明確な年代はできていない。そのため、次にあげる3点からおおよその年代を求めておきたい。

第1点として十和田a火山灰がある。これが自然堆積層として検出されたのは扇田道下第Ⅰ期のSI25とSI58の2軒である。十和田a火山灰は915年降下が有力であるから、これらのカマドから出土した土師器(第130図1・2、第131図8)は9世紀第4四半期に比定される。詳細にみれば、埴(第130図2)は底部ロクロ回転糸切り後、底縁に部分的にケズリによる再調整を行うもので、9世紀第4四半期に比定しうる高野1号(KY1)窯跡出土土器(五所川原市教育委員会2005)と同様の様相をもつ。したがって、これをひとまずKY1期に比定しておく。扇田道下Ⅰ期をKY1期に比定してよければ、Ⅱ期はこれに後続する持子沢(MZ)期以降に位置づけられると考えられる。

第2点として、五所川原窯須恵器の大量流通の時期である。当遺跡のⅡ期では、須恵器の大半は五所川原窯の製品とみられる。五所川原窯須恵器はこの遺跡ばかりではなく、秋田県北部に大量に流通しており、他地域との併行関係を検討できる。釈迦内中台編年の第3段階は五所川原窯須恵器が主体である。扇田道下第Ⅱ期より新しい様相を示す。釈迦内中台第3段階の様相は大館野遺跡Ⅱ期(嶋影2012)にもみられ、両者に伴っている五所川原窯須恵器の型式も前田野目段階で共通しており、ほぼ同じ時期のものと考えられる。したがって、扇田道下第Ⅱ期は前田野目段階を多く伴わない点で釈迦内中台第3段階より古い。釈迦内中台第3段階および大館野Ⅱ期は10世紀中葉に比定されるが、これが正しいとすれば扇田道下Ⅱ期は10世紀前葉に比定しうる。このことはⅡ期の須恵器甕が前田野目7号窯跡出土品に類似し、これが10世紀第2四半期に比定できることから妥当と考えられる。

第3点として、放射性炭素年代測定の結果(第Ⅴ章2)がある。今回の分析は、SI30とSI54床面出土炭化物の2点を試料とした。分析の結果、SI30出土炭化材が $1,270 \pm 20\text{yrBP}$ 、SI54出土炭化種実が $1,180 \pm 20\text{yrBP}$ と土器からの推定よりも古い年代が出ている。前者については、心材部分のため年代が古く出た可能性がある。後者は暦年更正で8世紀後半～9世紀後半とされており、おおむね妥当と考えられる。

以上の点から扇田道下第Ⅰ期の3点は9世紀第4四半期を含む。第Ⅱ期に10世紀前葉を含む。これより、それぞれの時期をおおよそ推定すると第Ⅰ期は9世紀第4四半期から10世紀初頭にかけて、第Ⅱ期は10世紀第1四半期から第2四半期にかけて、それぞれ比定できる。

3. 出土鉄製品および鉄関連遺物について

(1) はじめに

扇田道下遺跡出土遺物のなかで出土量は少ないが、集落の生活形態を知るうえで手がかりとなるであろう鉄製品と、鉄製品製造に伴う遺物である鉄関連遺物について述べたい。調査所見では、大量の鉄滓が出土したとあったため、大館野遺跡から回収した製鉄関連遺物(大館郷土博物館2012)とあわ

せて、平成24年8月に穴澤義功氏（たたら研究会委員）に委託し、整理指導をしていただいた。鉄製品と鉄関連遺物はほぼ全点、実見していただき、図化対象遺物の選定および構成図の作成、分析資料の選定をしていただいた。代表遺物の観察内容については巻末に詳細観察表として掲げた（第8表）ので、そちらを参照されたい。

（2）鉄製品

過去の調査で当遺跡から出土した鉄製品は総数23点である。鉄製品は全体に錆が激しく、形態を判別できないものも多いが、斧、手鎌、鍋、鍬、刀子、鏃、釘などが出土した。主要な鉄製品および関連遺物は構成図として掲載した（第133図）。おもな鉄製品と鉄関連遺物を器種別に出土遺構を記載すると、**斧** 遺構外 1点。**手鎌** SI30 1点。**鍬** SI1 1点。**刀子** 総数4点。SI20、SI30、SI44、SI54 各1点。**鏃** 遺構外 1点。**釘** 総数2点。SI20、SI33 各1点。**鍋** SI64 1点。**帯金具** 遺構外 1点である。

釘は錆が激しいため判別が難しく、不明棒状としたもののなかにも多数含まれていると思われる。刀子としたものも完形品はほとんどなく、部分的に形態を残すのみである。

（3）鉄滓

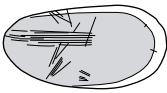
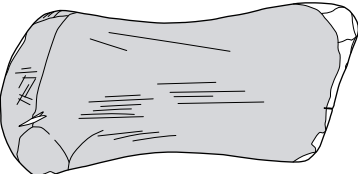
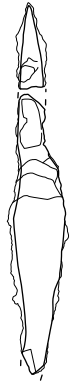
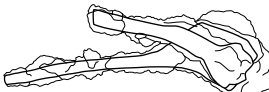
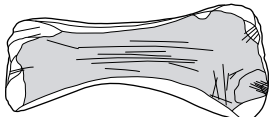
当遺跡から回収された鉄滓の多くについては、穴澤氏の観察の結果、自然に生成されたいわゆる「オニイタ」であることが判明した。鉄関連遺物の量は、椀形鍛冶滓1,932g、フイゴ羽口2点（計64g）である。鍛造剥片や台石は検出されておらず、調査区内で鍛冶は行われていた痕跡は確認されていない。出土した鉄滓および関連品はすべて廃棄によるものと推定する。廃棄鉄滓の出土した遺構はSI4とSI36のみで、1,000g以上の鉄滓が検出された遺構はSI4のみである。このうち、整理の上、金属学的な分析を行った椀形鍛冶滓2点は、精錬鍛冶工程の比較的初期段階に伴う滓の可能性が極めて高く、近辺の製鉄炉で生産された滓混じりの製錬鉄塊を素材にして、鍛冶炉を用いて二次的な製錬鍛冶を行った過程で排出された資料と考えられる。

（4）小結

扇田道下遺跡の鉄製品、鉄滓について述べたが、今回の調査区内では製鉄遺構は確認されなかった。Ⅰ期はSI54から刀子が1点出土しているのみであるが、Ⅱ期の竪穴住居を中心に羽口や椀形鍛冶滓が出土した。したがって、当遺跡でも後半期には製鉄が行われていたとみられる。

前述の大館野遺跡や釈迦内中台Ⅰ遺跡から複数の製鉄炉跡が発見されているため、現在のところ大館盆地内における大規模な鉄生産は10世紀中葉以降になってから開始したものと考えられる。

今回、扇田道下遺跡と大館野遺跡出土鉄関連遺物を自然科学分析業務として委託した。扇田道下遺跡の結果については第Ⅴ章1に掲載したが、大館野遺跡分については今後改めて公表する予定である。

SI11	SI20	SI30	SI35	SI47	遺構外
鉄製品（鍛造品）（鉞先）	鉄製品（鍛造品）（刀子）	鉄製品（鍛造品）（刀子）	砥石	鉄製品（鍛造品）（棒状不明）	羽口（鍛冶、先端）
1 	5 	9 	13 	17 	21 
		砥石			
		SI4 梔形鍛冶滓（特大、含鉄）	SI36 梔形鍛冶滓（大、含鉄） M(◎)		
2 	6 	10 	14 	18 	22 
		SI6 鉄製品（鍛造品）（棒状不明）	SI64 鉄製品（鍛造品）（帶金具、刀装部）		
3 	7 	SI33 鉄製品（鍛造品）（釘）	15 	19 	23 
		SI13 鉄製品（鍛造品）（棒状不明）	遺構外		
4 	8 	12 	SI44 鉄製品（鍛造品）（刀子）	鉄製品（鍛造品）（鉞）	24 
		鉄製品（鍛造品）（手鎌、目釘付き）	鉄製品（鍛造品）（刀子）	20 	
			16 		

第133図 鉄関連遺物構成図

4. 平安時代中期の遺構と遺跡

(1) 竪穴住居と掘立柱建物

平安時代中期の遺構は竪穴住居約60軒、掘立柱建物13棟、土坑3基、ピット多数である。これらは9世紀第4四半期から10世紀前半までの間に営まれたものである。

1) 竪穴住居の構造

最も多い遺構である竪穴住居の基本構造は、四角形の平面形で、地表面を数10cm掘り込んだものである。これに付属する施設にカマド・貯蔵穴などがある。本来、入り口があるはずであるが、調査では明らかにできなかった。60軒のうち、約40軒はほぼ全体形状が把握できた。

平面形 平面形は正方形ないし長方形である。正確に正方形を呈するものが多い(第134・136図)。長軸は住居のカマドのある辺の場合が多い。カマドは南東辺、あるいは東辺に多く、長軸方向は南北方向、あるいは北西-南東方向のものが多い。この時代の住居は直線的で、角も直角に近い。

規模 面積は最小5㎡から最大91㎡までの差がある。一辺の長さは約2mから約10mと差がある。5㎡は4畳にも満たないが、91㎡は50畳を超える広さである。最も多いのは10~25㎡未満のもので、22軒(約50%)を数える(第135図)。これに30㎡未満のものを加えると、全体の約60%に達する。

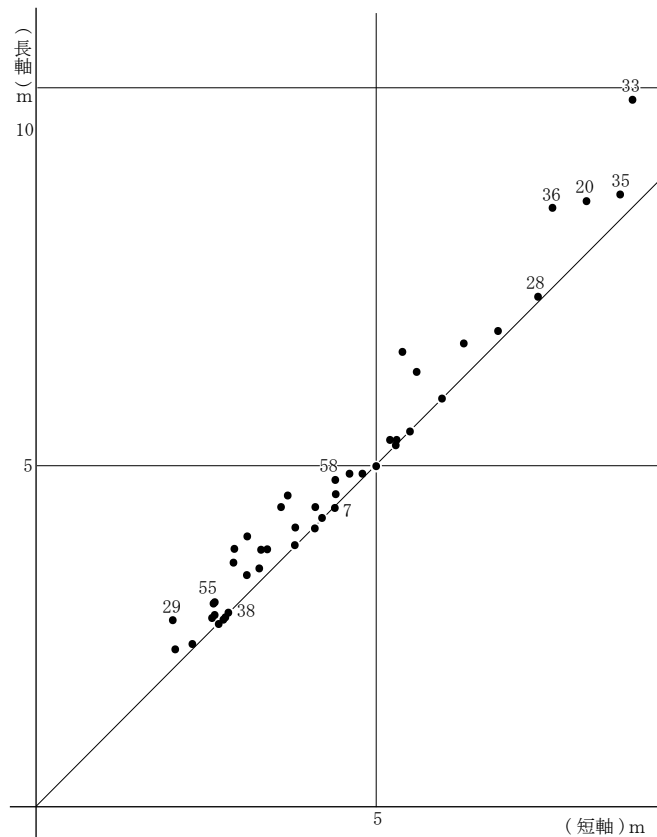
時期的な違いとしては、Ⅰ期では25㎡以上が1軒であるのに対し、Ⅱ期では13軒と大型の竪穴が増えることが挙げられる。一方、これとは反対に15㎡以下の小型の竪穴はⅠ期が10軒なのに対し、Ⅱ期は4軒と減少している。このことは、集落が連続して営まれたとすれば、1軒あたりの人口が増加していることを反映しているといえる。

カマド カマドは1軒の竪穴住居につき1基存在する。全体形状が明確な竪穴住居でカマドをもたないものは、SI5・SI29・SI48など少ない。これらはいずれも15㎡以下のものである。しかし、約7㎡のSI9にはカマドがあり、小型のものは一様にカマドをもたないわけではない。カマドの位置はすべて住居壁面の南側から東側である。竪穴住居にカマドが伴う平安時代の市内の集落例もカマドの位置は住居の南側から東側である(第141図)。こうした規則性についての解釈は、風向きの問題や方位に関して一定の規則性のもとでしつらえられていると考えられる。

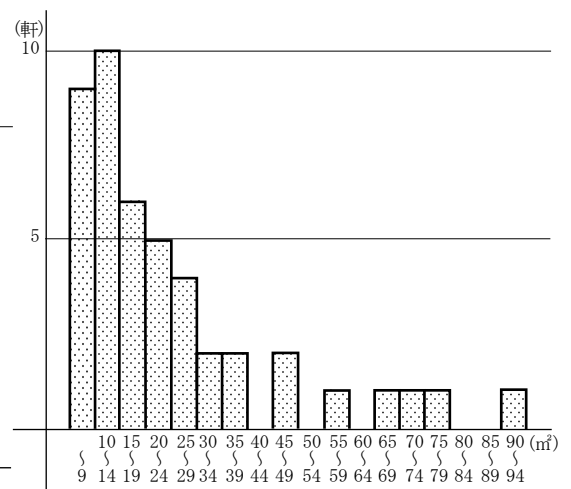
カマドは住居壁面の中央に位置することはほとんどなく、どちらかに寄っているか、コーナーに位置する。

カマドは土に粘土をまぜて土で構築されており、その存在は調査時によく確認できた。しかし、具体的な構造となると、よくわからない部分が多い。そうしたなかで、SI38のカマドはきわめて遺存状況がよく、その構造をよく示していた(第82図)。両袖にはカマドの芯材として川原石を立てた状態で入れていた。また、支脚と考えられる土師器の埴が逆位に置かれた状況で検出された例がいくつかある。

カマド袖部の芯材として川原石が用いられている例は市内でも池内遺跡(秋田県埋蔵文化財センター1997)や餌釣館跡(旧山王台遺跡)(大館市教育委員会1990)など多くみられるが、当遺跡では使用済みの土器を再利用したものもある。支脚については土師器甕底部や埴を使用しているものが多い。土製や石の支脚はみられない。床面には粘土まじりの貼り床は造られず、そのまま使用している。



第134図 平安時代竪穴住居軸長分布図



第135図 平安時代竪穴住居面積分布図



第136図 竪穴住居一覧図

※竪穴・掘立柱併用建物は竪穴部のみ

カマドで最もわからなかった部分は甕をかけるカマド「受口」と煙道である。調査によってこれらが確認できた例はほとんどない。煙道についてはSI55で唯一割り貫き式の煙道が確認されたのみである。また、SI7やSI39のようにカマドが住居の外側に明瞭にのびているものがあり、これが煙を住居外に導く煙道の可能性がある。こうした外側への張り出しがないものはすべて上部の削平によって煙道が破壊された可能性もあるが、本来煙道をもたないカマドもあったのではないかと推定される。時期的にはSI7やSI39のようにⅠ期～Ⅱ期の古いものにかけて煙道と考えられる張り出しがあることは、古い段階には伝統的なカマドの構造をもっていた可能性も示唆する。それは後述する住居構造の変化ともかかわっているように思われる。

柱穴 柱穴はすべての竪穴住居にみられるものではない。15㎡以下の小型の竪穴では、柱穴が確認できないものも多い(第136図)。面積40㎡以上の大型のものにはすべて柱穴が伴っている。これには床面中央に4本の主柱穴をもつものともたないものがある。SI6・SI24・SI28などは主柱穴をもつが、例は少ない。これらはⅡ期の新しい時期にみられることが注目される。このほかには、竪穴の四隅およびその間に設けられる。主柱穴以外には壁の近くにある壁柱穴と、床面上にある小さな柱穴がある。

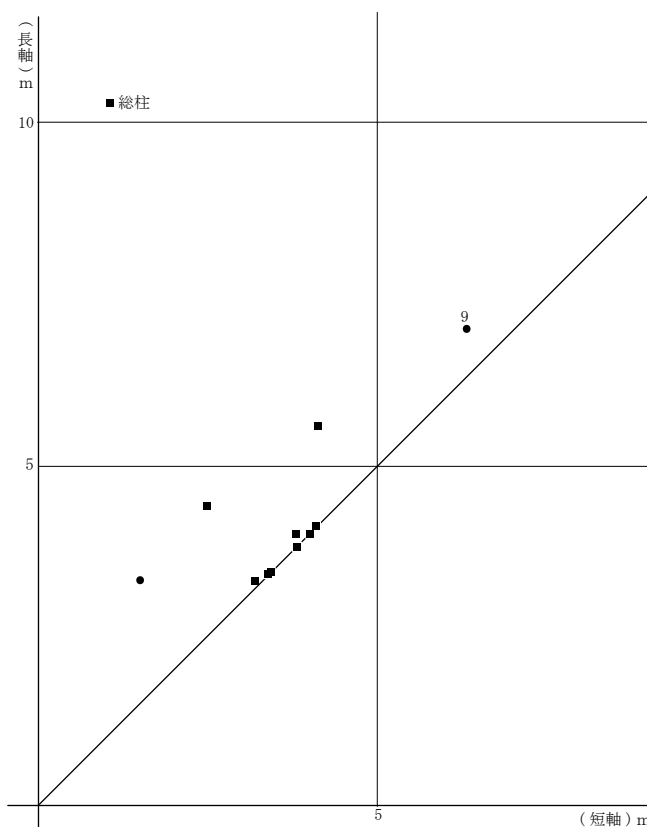
壁溝 壁溝も柱穴と同様にすべての住居にみられるものではない。また、壁溝の有無は柱穴と同様、規模や時期などとの明確な関連をよみとれない。その機能については、SI34では壁溝の部分に板材が存在していたことが判明し、壁板材を埋めた可能性が高い。

建物 竪穴住居には掘立柱建物がセットになっている「竪穴・掘立柱併用建物」が多くみられる。青森県ではこれに外周溝が伴い、「三点セット」と呼ばれるものであるが、当遺跡では明確に外周溝が伴うものはSI6など一部にすぎない。この竪穴・掘立柱併用建物は、平安時代の竪穴住居59軒のうち、19軒確認されており、全体の約3割を占める。Ⅰ期ではSI39のみで、主体はⅡ期であり、新しい時期にみられることが注目される。この建物は住居のカマド(南)側に設けられている。柱穴は小型のものが多い。

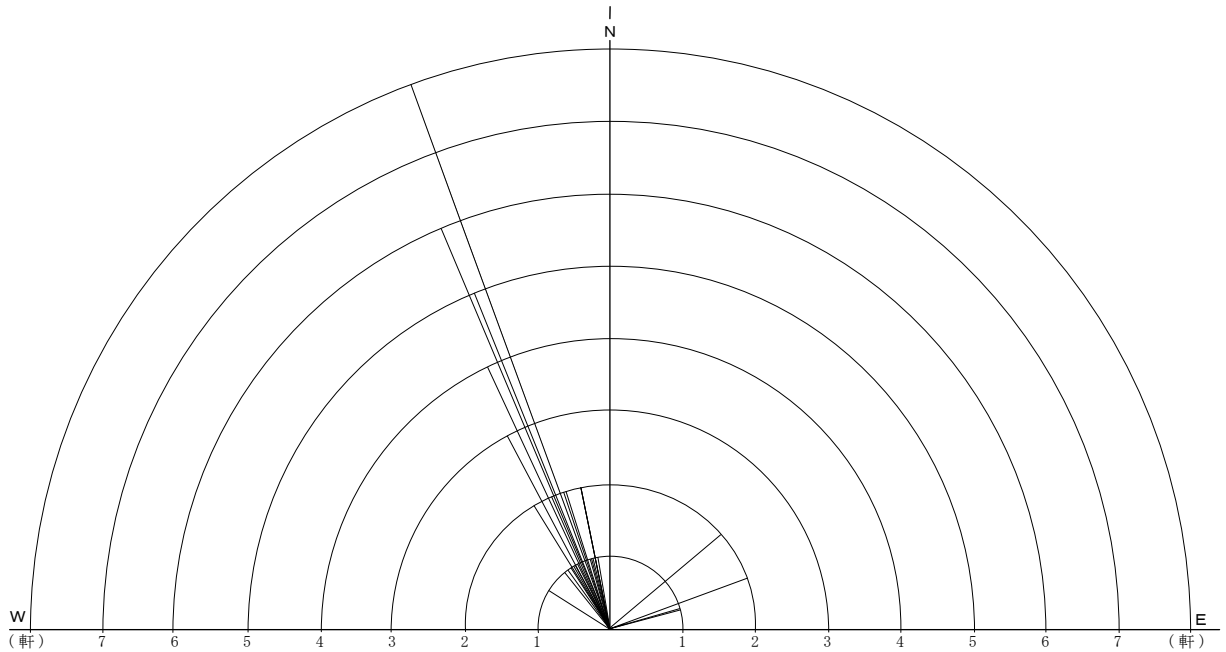
2) 掘立柱建物と土坑

掘立柱建物 掘立柱建物は13棟ある。掘立柱には総柱建物側柱建物がある。前者は床張りの高床式と考えられ、11棟ある。これらは2間×3間のものが2棟みられるほかは、いずれも2間×2間の小規模なもので、面積は15㎡のものが多数を占める。この大きさと高床式の構造からみて、これらの総柱建物は居住用の建物ではなく、倉庫と考えられる。

他方、側柱建物のうち、SB9は梁間2間、桁行3間で、面積は44㎡である。これについては居住用の建物と考えてもよいであろう。



第137図 平安時代掘立柱建物軸長分布図



第138図 竪穴住居主軸方向分布図

う。掘立柱建物の時期は出土遺物の多い竪穴住居とちがい明確でないものが多い。時期は不明で、ほとんど確認できない。しかしながら、倉庫については、大館野遺跡でも検出例があり、ほとんどは平安時代に属するものが多いと推定される。

土坑の性格 今回の調査で検出された土坑は3基と少ない。平面形は不整円形・長楕円形・円形と様々で、直径1.4～3.2m、深さ数10cmから70cmほどで、断面形はすり鉢状や逆台形状のものである（第125図）。SK1・2の時期は出土土器からみて、平安時代のものである。土坑の性格と機能についてはよくわからない。特に何かを埋納した状況ではなく、SK1はSD3と、SK2はSI36の掘立柱建物に係る遺構と推測される。SK3については、餌釣館跡（旧 山王岱遺跡）や川口十三森遺跡に類例があり、近代の肥溜のような施設と考えられる。

(2) 遺跡の変遷（第139図）

竪穴住居と掘立柱建物は調査区のほぼ全域に分布するが、分布の粗密がみられる。竪穴住居は段丘の上部調査区の北東側に少なく、中央部に最も集中し、川側に落ち込む南西側もまた少なくなる。中央部の密集部分は重複が多い。調査区内だけの分布から見れば、南側と北側にさらに遺構の分布範囲がのびるものと推定される。竪穴住居の主軸方向は第138図のような分布を示す。これを見ると、北から20° 前後西にふれた方向が多いことがわかる。

掘立柱建物のうち、総柱の倉庫は竪穴住居が密集する調査区中央北部と中央南側縁辺部にそれぞれ群をなす。北側にはSB1・SB2・SB3・SB4・SB5・SB6・SB7の7棟があり、中央南側縁辺部にはSB10・SB11・SB12・SB8の4棟がある。集落全体に散在するのではなく、その縁辺部に集中的に分布することは、集落構造を考える場合特に重要なことである。掘立柱建物の方位は竪穴住居と

ほぼ同一であり、一定の規則性が看取できる。長方形の平面形を呈する掘立柱建物の場合、長軸となる桁行の方向はおおむね北東－南西方向である。このことは長方形を呈する竪穴・掘立柱併用建物の方向と一致することが留意される。

さて、個々の遺構の時期であるが、前述の検討から遺構の構成は「竪穴住居（小型）＋倉庫」から「竪穴住居（大型）＋竪穴・掘立柱併用建物＋倉庫」に変化することが推測された。第139図は竪穴住居を主にしたⅠ～Ⅱ期の変遷である。時期の比定は出土土器などによったが、竪穴住居が使用された時期を明確にすることは容易ではない。まして同時に存在したものを抽出することは難しい。ここでは大まかな時期比定により、遺構の変遷をたどることにしたい。

Ⅰ期 約15軒の竪穴住居がある。十和田 a 火山灰の自然堆積層が検出された SI25と SI58が最古期である。これを含めて、A～Eの5群に分けられる。B群は1軒であるが調査区以外に近接して同時期のものが存在すると推定される。軒数はA・E群が5軒で多いが、これらにⅠ期でも新しい傾向を示す住居がいくつか含まれており、同時に存在したものは3～4軒と考えられる。

Ⅱ期 35～40軒の竪穴住居がある。Ⅰ期で形成された5群のうち、B～E群の4群が地形に沿って北東－南西方向に広がり、F～H群があらたにでき、広い範囲に分布する。A群はⅠ期の5軒から3軒になる。C群とE群が合体してできたF群は数が多く14軒を数える。またF群はさらに東側と西側の2つに細分できる可能性もある。Ⅱ期で問題なのは相対的に新しいⅡ₂期の遺構が少ないことである。SI13・SI46はこの時期と考えているが、これら以外は明確ではなく、Ⅱ₁期に比べ数が減ったことがうかがえる。

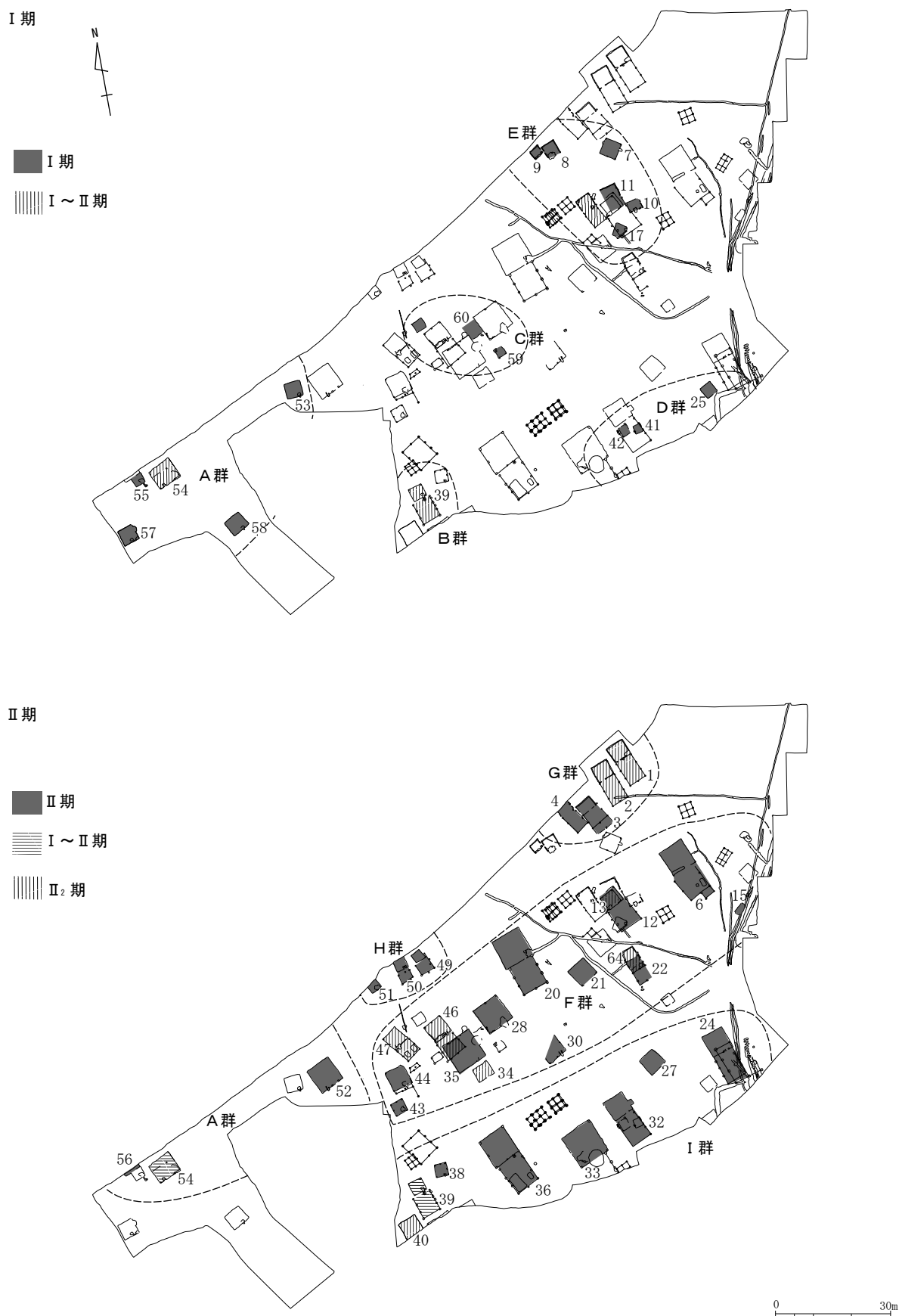
以上、Ⅰ～Ⅱ期の区分にしたがって、遺構の変遷を概観したが、Ⅱ期に整然と並ぶ多数の住居が存在することが判明した。しかし、それぞれの時期は数十年の時期幅があり、さらに細分可能なものである。竪穴住居の使用年数は20～25年程度に見積もられることから、同じ時期であっても、同時に存在したかどうかはわからない。だが、それを考慮してもなお、竪穴住居と掘立柱建物はいくつかのまとまりをなし、整然と並ぶ。また50㎡以上の大型の住居は、これを中心にいくつかのまとまりが存在する傾向もみられる。

掘立柱建物のうち、倉庫とみる総柱建物の時期はほとんど明確でない。そのため、これが竪穴住居のグループとどういった関係にあるのかよくわからない。倉庫は竪穴住居が集中する範囲の縁辺に分布し、特定の竪穴住居グループに伴うかははっきりとしない。数軒の竪穴住居のグループごとに所有された施設といえよう。仮に倉庫が住居グループと重複しないとすれば、F群・G群と近接する5棟はⅡ期に存在したと考えることもできる。

5. 古代集落としての扇田道下遺跡

(1) 成立と背景

扇田道下遺跡は段丘上に営まれた平安時代を中心とする集落跡である。今回調査したのは8,500㎡であるが、集落跡全体からみればその一部にすぎない。そのため、この集落についてさまざまな分析をするのは難しい。しかし、今回の調査をまとめ、若干の考察を述べておきたい。



第139図 平安時代遺構変遷図

1. 遺跡は9世紀第4四半期に成立し、10世紀前半に衰退する。この間の数十年間、ほぼ連続して集落が営まれる。9世紀第4四半期に集落が成立する前は約2,000年間無住の地であり、10世紀後半以降も近世まで無住の地であった。
2. 遺跡はおもに竪穴住居と掘立柱建物から構成される。掘立柱建物は小規模な高床式倉庫が多い。9世紀代までは住居はすべて竪穴住居からなり、10世紀以降、大型の竪穴住居に加わって竪穴・掘立柱併用建物が出現する。高床式倉庫はおもに後半期に存在すると推定される。井戸はまったく存在しない。
3. 炭化米と鉄製農耕具（鋤先・手鎌など）、鉄滓の出土から、稲作および鉄製品の生産を行っていたと考えられる。

性格 以上の点から、遺跡の性格は農民の集落と位置づけられる。このことは同じ秋田県北部地方にある北秋田市胡桃館遺跡（第140図）との比較から、明確に導くことができる。胡桃館遺跡は米代川河岸の沖積地上に立地した平安時代の官衙関連遺跡と考えられている（秋田県教育委員会1970）。この遺跡は出土木材の年輪年代と遺跡の埋没年代から、10世紀初頭に成立し、10世紀第1四半期に廃絶する。時期的にまさに本遺跡と重なる。立地条件も異なるが、遺構・出土遺物のあり方もかなり異なっている。まず、遺構は掘立柱建物と土台建物を主体とし、竪穴住居は1軒も検出されていない。また、埋没家屋という性質上、きわめて豊富な木材がある。土居・扉・梯子などである。遺物には墨書土器が4点あり、意味・内容がある程度判明するものも含まれている。なかでも「寺」は注目される。これらの点から胡桃館遺跡は一般集落ではなく、官衙あるいは寺院に関連した性格と規定することができる。そして、木材は別にしても、両者の遺構・遺物の内容を比較すれば、扇田道下遺跡は、官衙に関連したものではなく、農耕集落ということが出来る。本遺跡では9世紀代の住居はすべて竪穴であり、10世紀においても住居の大半は竪穴である。墨書土器は1点もない。

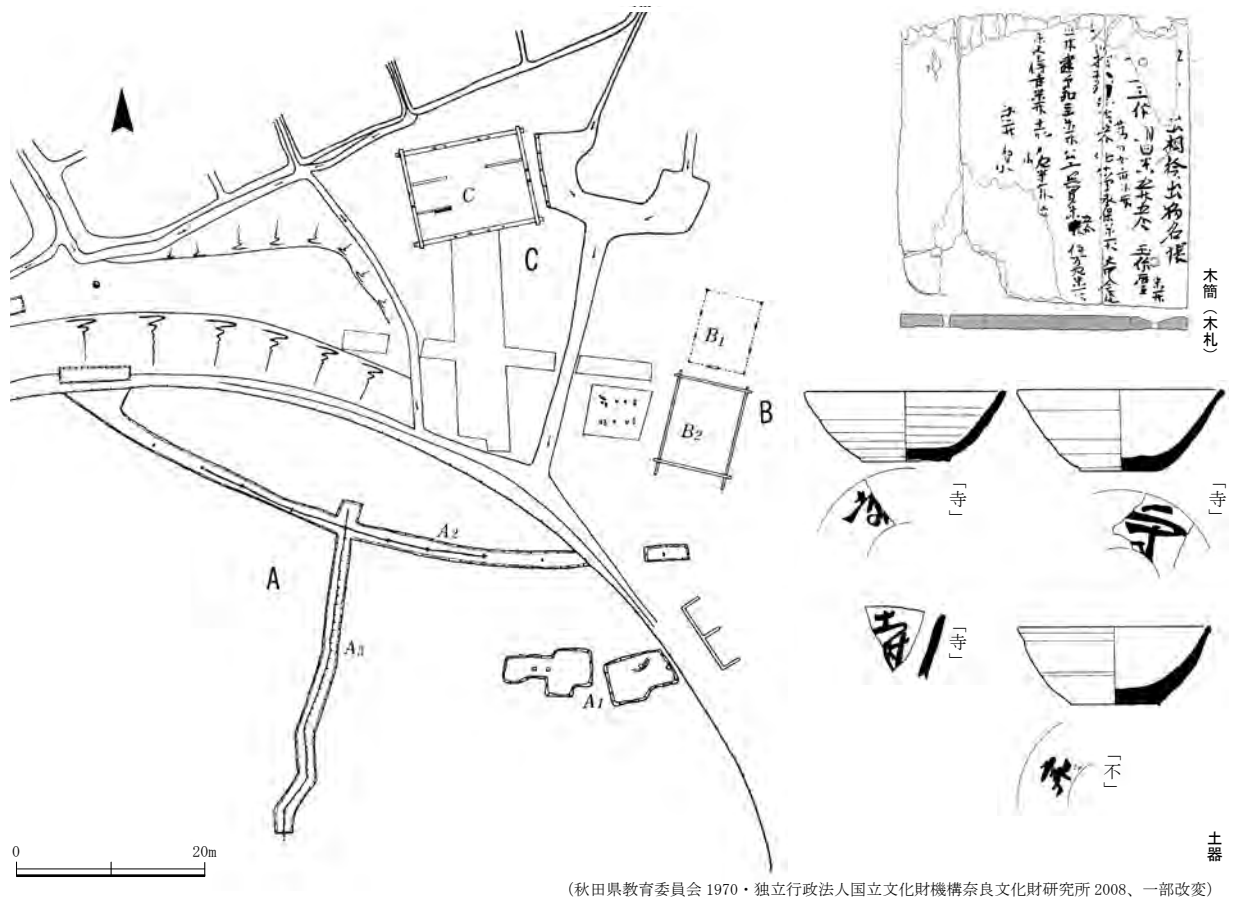
成立背景 それでは9世紀第4四半期に集落が成立する要因は何であろうか。この問題について考えるためには、集落の存在する①地域的条件、集落が成立する②時期的条件、そして集落の③立地条件を明確にする必要がある。

①この集落は古代において、出羽国の範囲には含まれなかった。秋田県北部地方は律令国家とのかかわりが相対的に薄く、八郎潟東岸までの地域と明確に一線を画す地域であった。秋田県北部地方は中央政府にとっては辺境であり、「蝦夷」の住む地として位置づけられていたのである。

②9世紀後半の時期は、この地域が律令体制の影響を受けた時期である。8世紀末～9世紀初頭には秋田郡・河辺郡・山本郡が設置され、9世紀後半には野代営が置かれたとされ（熊田2008）、徐々に国家の支配域が拡大する。元慶2年（878）には秋田城下の米代川流域および八郎潟沿岸の上津野・火内・相瀬・野代・河北・腋本・方口・大河・堤・方上・姉刀・焼岡の十二村が政府に反乱し、秋田城が焼かれる事件が起こる（元慶の乱）。元慶の乱は1年で平定されたが、これ以降の詳細な出来事は文献史料には残されていない。本遺跡が成立するのはまさにこの時期なのである。

③古代の集落が存在した時点での周辺の土地の状況であるが、遺跡が立地する段丘の東側は扇状地が広がっており、水田として利用できる土地と考えられる。ちなみに、現在もこの地は水田地帯である。

以上の諸条件を勘案するとき、農業生産を基盤に考えた場合、この土地の生活条件は適している。



第140図 胡桃館遺跡の遺構・遺物

しかし、9世紀第4四半期の無住の地に集落が成立するその背景に、農民の自律的な要因だけでなく何らかの外的要因が考えられる。その時期と地域性を重視すれば、元慶の乱との関連性が想定されるのである。

本遺跡の後半期における竪穴数の急激な増加については、この集落は「柵戸」のような性格であり、その構成員は他地域の人々の移住によるもの¹⁾と考えることもできよう。このようにみてゆくと、何者かがこの集落を編成した目的は、地域の生産力を高めるための開発に主眼を置いたものであったと考えられる。周辺の段丘上には本遺跡ばかりでなく、かなり多くの集落遺跡が存在している。そして、これらの遺跡の多くが、本遺跡とほぼ同じ時期に成立していることから、9世紀末から10世紀前半の時期に、この周辺の地域の集落が一円的に編成されたものと考えられる。9世紀末に出現するこれらの集落は、その成立背景からみて、当然元慶の乱後の政治勢力と何らかのかかわりがあるだろう。

1) 他地域からの移住については、出土遺物や遺構のなかに、地域を特定できるようなものは特にみられない。遺構・遺物に地域的な特徴を見出すことはかなり難しいことと思われる。しかしながら、この集落の構成員は何らかの政治勢力のもとに、他の土地からこの地に移住したものであろう。

(2) 扇田道下遺跡と市内の古代集落遺跡

律令体制崩壊期の集落 本遺跡は元慶の乱後の政治勢力との関連のもとで生まれた集落と考えられるが、このような集落は秋田県北部の古代集落のなかで、どのように位置づけられるであろうか。秋田県北部という地域的特性により、これを特殊な集落とみることができるであろうか。以下、市内の古代集落遺跡の事例を検討することにした。

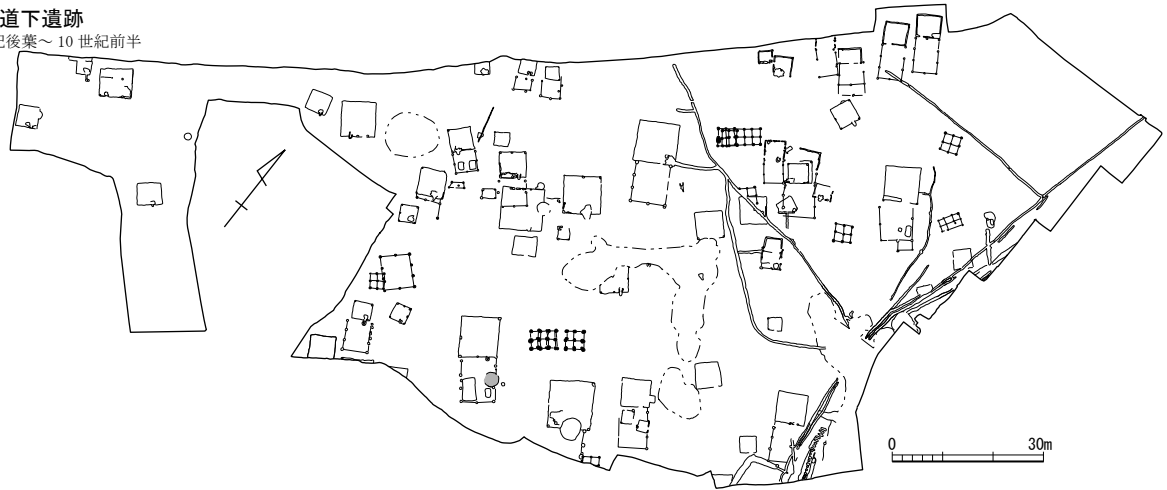
市内の古代遺跡の調査は近年数多く行われており、竪穴住居を主体にした遺跡は多数ある。代表的な例は餌釣館山王台遺跡、池内遺跡などがある（第141図）。いずれも平安時代を主体とする遺跡である。本遺跡と同様に、両遺跡は9世紀後葉には成立し、10世紀中葉には廃絶する。竪穴住居を主体にし、数十年は継続して営まれている。ここで注目されることは、本遺跡とほぼ同じ9世紀後葉に同じような竪穴住居を主体とする集落が形成されていることである。大館地方においてはこの時期が集落形成のひとつの画期であることが考えられる（大館市史編さん委員会1992）。そして、10世紀にはこのような集落が増加してゆくという傾向も同様にうかがうことができる。10世紀以降にはこのような竪穴住居が群をなす比較的規模の大きい集落が市内各地で成立する。したがって、これらの集落について、9世紀後葉という成立時期に着目するならば、前述の扇田道下遺跡と同様に元慶の乱との関連でとらえることが可能であろう。それは律令体制が崩壊するとされる9世紀末から10世紀初頭と時期的に重なることも表裏一体といえる。このことは律令体制と一体ともいえる官衙遺跡も9世紀後半以降衰退してゆく動向とも関連し考慮されることである。以上の点から、扇田道下Ⅰ期のように小型の竪穴住居を主体とした集落は大館地方における9世紀後半から10世紀初頭の律令体制崩壊期集落の典型といえる。

律令期以後の集落 扇田道下遺跡が衰退・廃絶する10世紀中葉以降の集落遺跡はどのように展開するのであろうか。まず注目されることはこの時期の遺跡のあり方である。それは八郎湯東岸以南では10世紀中葉以降の遺跡数が急減するのに対し、県北部では数多く存在することである（神田2005・宇田川2005）。これまでに調査された遺跡例もこの時期のものは多い（奥山・富樫1973大館市史編さん委員会1973b・大館市教育委員会1974）。このような傾向はおそらく扇田道下遺跡で想定されるような大規模な人の移動と密接にかかわるであろう。

次に、10世紀中葉以降の集落遺跡の構造であるが、代表例として大館野遺跡をあげることができる（第142図）。大館野遺跡は少なくとも10世紀前葉から後葉まで営まれたと考えられ、大きく3期（Ⅰ～Ⅲ期）に区分できる（嶋影2012）。このうち、Ⅱ期が10世紀中葉とみられる。遺構は竪穴住居・掘立柱建物・製鉄炉・土坑・溝（垣根・道路）などである。これらの分布をみると、大小の竪穴住居と掘立柱建物がまとまりをもつことがわかる。掘立柱建物には住居の可能性のあるものと倉庫（総柱建物）がある。この遺跡にみられる集落構造は数軒の住居を基本単位とし、これに倉庫が伴うものであり、それぞれの遺構単位が自立した単位であり、それぞれが一定の区画からなる「宅地」を所有していたことを示している。扇田道下Ⅰ期の集落においては竪穴住居がグループを形成していたとしても、散在している状況を示す。これに対し、扇田道下Ⅱ期の集落は大館野遺跡でみられるような建物のまとまりをもつ。両者の集落構造のきわだった違いは、集落構成員そのものの変化を感じさせる。10世紀の釈迦内中台Ⅰ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター2008）なども同じ遺跡のあり方をしており、大館

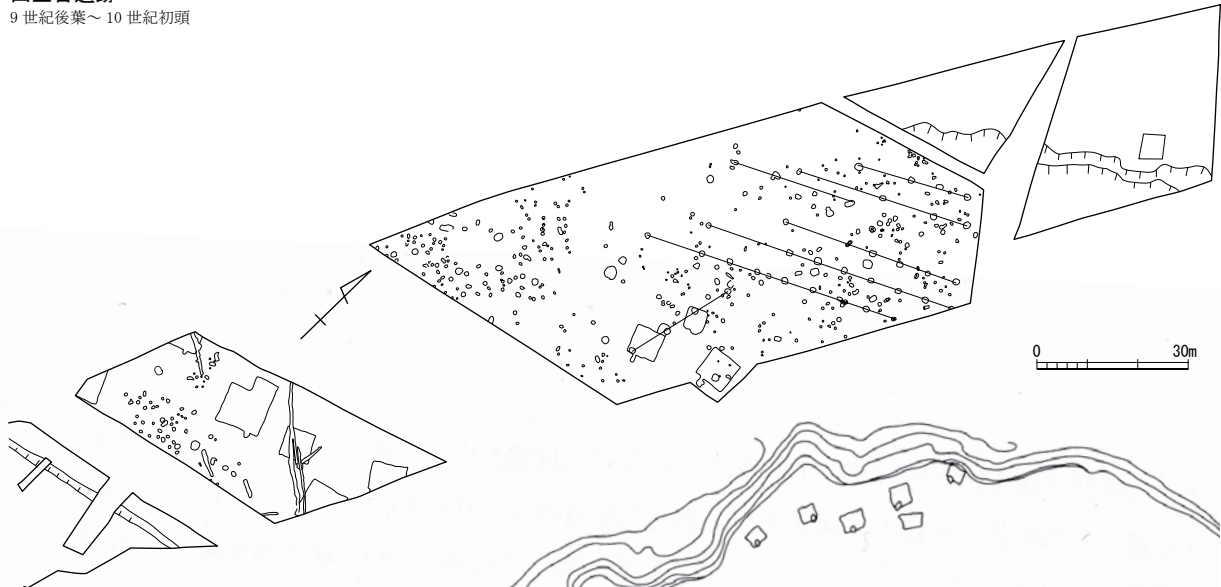
扇田道下遺跡

9世紀後半～10世紀前半



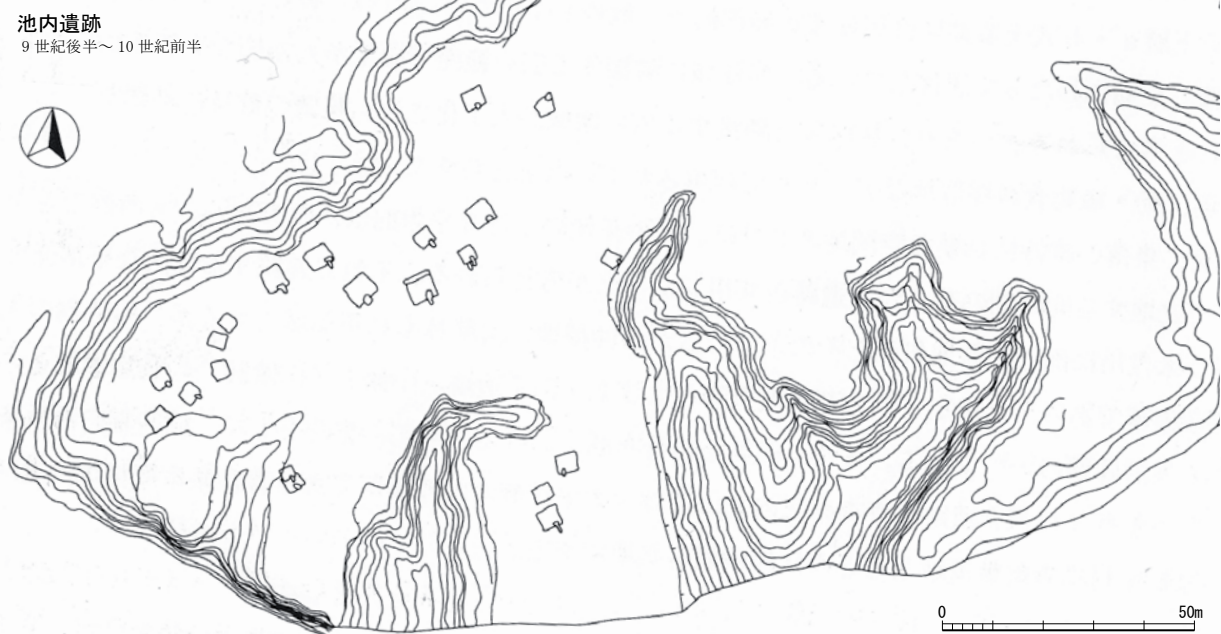
山王台遺跡

9世紀後半～10世紀初頭



池内遺跡

9世紀後半～10世紀前半

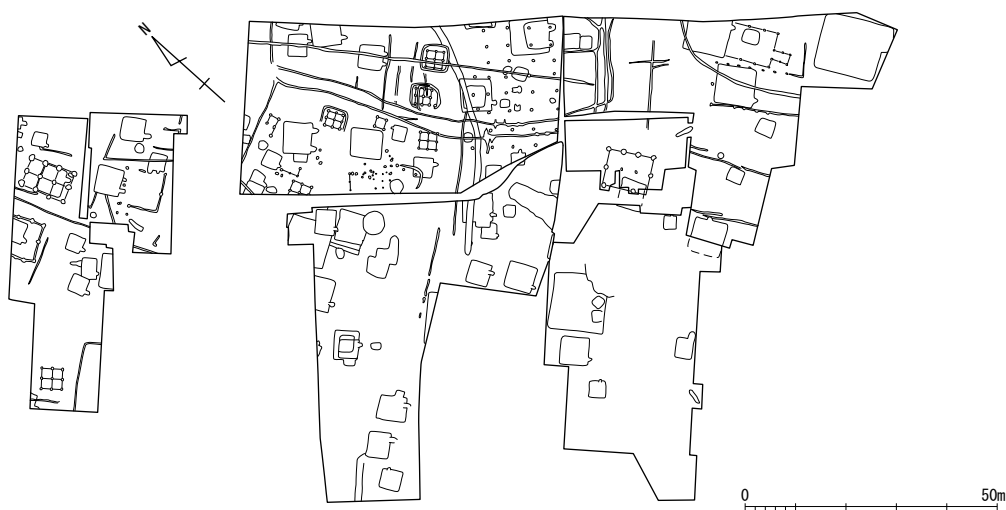


第141図 市内の集落遺跡

(同一スケール、各報告原図、一部改変)

地方における地域的な偏差はないものと考えられる。これらの遺跡には、一定の有力者が存在し、宅地を所有したといえる。

大館野遺跡に代表できるような集落は律令期以後成立するのであり、社会体制とのかかわりであれば、王朝国家期（前期）の集落とすることができる。したがって、扇田道下遺跡と大館野遺跡を古代村落史のなかに位置づければ、両者の構造は大館地方における「律令(型)村落」から「王朝国家(型)村落」への歴史的変化を典型的にあらわしているといえる。そして、この「王朝国家(型)村落」はやがて、古代末期には東北北部に数多く分布する環濠集落（防御性集落）へと移り変わる。それらはまさに社会体制と無関係ではありえない古代集落の実態を反映しているといえよう。



第142図 大館野遺跡の遺構分布模式図 (大館郷土博物館2012より作成)

(3) 結 語

これまで今回の調査によって得られた成果について述べてきた。発掘面積8,500㎡の調査の資料は実にぼう大であった。発掘調査から年数が経過し、また、報告者が調査に関わっていないこともあり、約60軒の竪穴住居と13棟の掘立柱建物という多くの遺構が検出された遺跡の報告としては、本書はあまりにも不備が多い。しかし、この調査によりはじめて明らかにできたことも多い。古代集落の一部分の調査ではあったが、文献資料だけではわからないこの地域の歴史の一端は把握できたと考える。扇田道下という土地にかつて営まれたひとつの古代集落の跡にも、歴史の一断面があざやかに投影されている。これが調査・報告を通じて得られた結論である。残された課題は多いが、この成果をもとにこの地域の古代史を解明してゆくことを期し、この報告を終えたい。

引用・参考文献

- 青森市教育委員会 2001 『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ 平安時代遺物編. 分析. 総論編』 青森市埋蔵文化財調査報告書第54集－5
- 秋田県 1964 『秋田県史 第二巻 近世編上』
- 秋田県教育委員会 1970 『胡桃館埋没建物遺跡第3次発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第22集
- 秋田県教育委員会 2006 『秋田県遺跡地図（北秋田地区版）』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1989 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第178集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター 1992 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－山王岱遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第221集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター 1997 『池内遺跡 遺構篇－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅷ－』 秋田県文化財調査報告書第268集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター 1999 『池内遺跡 遺物・資料篇－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅸ－』 秋田県文化財調査報告書第282集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター 2004 『堂の下遺跡Ⅱ 中世編－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ－』 秋田県文化財調査報告書第377集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター 2008 『釈迦内中台Ⅰ遺跡－一般国道7号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』 秋田県文化財調査報告書第426集 秋田県教育委員会
- 秋田市 2001 『秋田市史 第七巻 古代 資料編』
- 秋田市 2004 『秋田市史 第一巻 先史・古代通史編』
- 荒木志伸 2010 「城輪柵政庁に関する一考察」『日本古代学』第2号
- 伊藤武士 2006 『秋田城跡 最北の古代城柵』 日本の遺跡12 同成社
- 犬走須恵器窯跡発掘調査団・五所川原市教育委員会 1998 『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』
- 宇田川浩一 2005 「元慶の乱前後の集落と生業－米代川流域と旧八郎湖東北岸の違い－」『第31回古代城柵官衛遺跡検討会資料集』 古代城柵官衛遺跡検討会
- 大館郷土博物館 2012 『大館野遺跡発掘調査報告書』 大館市文化財調査報告書第5集 大館市教育委員会
- 大館市教育委員会 1974 『大館市粕田遺跡発掘調査報告書』
- 大館市教育委員会 1990 『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』
- 大館市教育委員会 2003 『大館市の文化財』
- 大館市史編さん委員会 1973 a 『大館市片山「館コ」発掘調査報告書』 大館市史編さん調査資料第5集
- 大館市史編さん委員会 1973 b 『秋田県北秋田郡比内町谷地中「館」 中野円墳状遺構』 大館市編さん調査資料第6集
- 大館市史編さん委員会 1992 『大館の歴史』 大館市教育委員会
- 奥山潤・富樫泰時 1973 『真館緊急調査報告書』 比内町教育委員会
- 神田和彦 2005 「秋田平野周辺における集落の様相」『第3回古代城柵官衛遺跡検討会資料集』 古代城柵官衛遺跡検討会

- 熊田亮介 2008 「第二編 古代国家と能代」『能代市史 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』 能代市
- 五所川原市教育委員会 2002 『M Z 6 号窯跡』 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第23集
- 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須恵器窯跡群』 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 五所川原市教育委員会 2005 『K Y 1 号窯跡』 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第26集
- 後藤忠志 1998 「大館盆地の地形発達」『大館市及びその周辺地域の風土、文化等調査研究報告書』 大館市
- 小松正夫 2001 「第三節 出土遺物 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史 第7巻 古代 資料編』 秋田市
- 坂井秀弥 1988 「古代のごはんは蒸した『飯』であったー古代の米調理法復原メモー」『新潟県考古学談話会会報』 2
新潟県考古学談話会
- 坂井秀弥 1989 「第5章出土遺物 3 奈良・平安時代 A土器の概観」『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ
遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新潟県教育委員会 建設省新潟国道工事事務所
- 坂詰秀一 1968 『津軽・前田野目窯跡』 五所川原市教育委員会
- 嶋影壮憲 2012 「Ⅵ 2 大館野遺跡における平安時代の土器」『大館野遺跡発掘調査報告書』 大館市文化財調査報告書
第5集 大館市教育委員会
- 新海和広 2008 「第6章まとめ」『釈迦内中台Ⅰ遺跡 ー一般国道7号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告
書Ⅴー』 秋田県文化財調査報告書第426集 秋田県教育委員会
- 田村 栄 1979 「第一章 大館市の風土」『大館市史 第一巻』 大館市
- 東北古代土器研究会 2008 『東北古代土器集成ー須恵器・窯跡編ー〈出羽〉』
- 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 2008 『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』 北秋田市教育委
員会
- 浪岡町教育委員会 2003 『青森県浪岡町野尻（4）遺跡』 浪岡町埋蔵文化財緊急調査報告書第10集
- 新潟県教育委員会 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集
新潟県教育委員会 建設省新潟国道工事事務所
- 能代市史編さん委員会 1995 『能代市史 資料編 考古』 能代市
- 能代市史編さん委員会 1998 『能代市史 資料編 古代・中世Ⅰ』 能代市
- 藤原弘明 2007 「五所川原産須恵器の編年と年代観」『五所川原産須恵器の年代と流通の実態』 第2回「北日本須恵
器生産・流通研究会」資料集
- 文化庁文化財部記念物課 2010a 『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編ー』
- 文化庁文化財部記念物課 2010b 『発掘調査のてびきー整理・報告書編ー』
- 山本町教育委員会 2002 『秋田県山本町保竜館ほか遺跡範囲確認調査報告書』 山本町埋蔵文化財調査報告書第4号
- 横手市 2008 『横手市史 通史編 原始・古代・中世』

第6表 主要遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	挿図 番号	位 置	切り合い (新>旧)	竪穴規模 (長軸×短軸)	面積 (㎡)	掘立部規模 (長軸×短軸)	面積 (㎡)	方位	カ マ ド	柱 穴	壁 溝	掘 立	時期	備 考
SI 1	31図	11・12・13-D・ E・F・G		4.9×4.6	22.5	3(7.7)×2(4.9)	38.0	N-25°-W	○	○	○	○	II	
SI 2	32図	12・13・14-E・ F・G・H		4.9×4.8	23.5	3(7.5)×2(5.0)	37.5	N-22°-W	○	○	○	○	II	
SI 3	33図	13・14・15-G・ H・I・J		4.0×3.1	12.4	2(5.4)×2(4.5)	24.3	N-31°-W	○	○	○	○	II	
SI 4	34図	15・16-H・I・J		—	—	2($\frac{4.6}{5.7}$)×2(4.0)	20.6	N-31°-W		○	○	○	II	
SI 5	36図	4・5-L・M		3.8×3.8	14.4	—	—	N-36°-W		○	○			
SI 6	37図	6・7・8・9-J・ K・L・M・N		6.8×6.8	46.2	2(6.8)×2(6.6)	44.8	N-23°-W	○	○	○		II	
SI 7	38図	12・13・14-J・ K		4.4×4.4	19.3	—	—	N-58°-W	○	○	○		II	
SI 8	39図	16・17・18-J・ K		3.9×3.8	14.8	—	—	N-20°-W	○	○	○		I	
SI 9	41図	18-J・K		2.8×2.6	7.3	—	—	N-33°-W	○	○	○		I	
SI 10	42図	11・12-N		3.8×2.9	11.0	—	—	N-14°-W	○	○	○		I	
SI 11	43図	13・14-N	SI11<SI12	4.4×3.6	15.8	—	—	N-15°-W		○	○		I	
SI 12	43図	12・13-M・N	SI12>SI11 SI12<SI13	—	—	4(9.8)×1(6.7)	52.8	N-27°-W		○		○	II-1	
SI 13	43図	13・14-M・N・ O	SI13>SI12	3.8×4.1	15.6	—	—	N-28°-W	○	○	○	○	II-2	
SI 14	46図	13・14・15-M・ N・O		4.1×4.1	16.8	3(4.6)×1(4.1)	18.4	N-28°-W	○	○	○	○	II	
SI 15	49図	4・5-N・O		—	—	—	—			○		○	II	
SI 17	50図	12・13-O・P	SI17<SD27	3.4×3.1	10.5	—	—	N-30°-W	○				I	
SI 18	51図	13・14・15-P・ Q・R		5.4×5.3	28.6	—	—	N-22°-W	○	○	○		II-2	
SI 19	52図	17-R		—	—	—	—		○				II	カマド のみ
SI 20	53図	18・19・20・21 -P・Q・R・S・ T		8.9×8.1	72.0	3(8.3)×2(7.5)	62.2	N-68°-E	○	○			II	
SI 21	55図	14・15・16-R・ S・T		5.5×5.5	30.2	—	—	N-12°-W	○	○	○		II-2	
SI 22	57図	11・12-R・S・T		—	—	—	—			○	○	○	II-1	
SI 23	58図	9・10-T・U		2.8×2.6	7.2	—	—	N-20°-W	○	○				
SI 24	59図	5・6・7-V・ W・X		6.0×6.0	36.0	—	—	N-20°-W	○	○		○	II	
SI 25	61図	6・7-Z・a		3.3×3.3	10.8	—	—	N-23°-W	○				I	
SI 26	63図	6・7-b・c		—	—	—	—			○				
SI 27	64図	10・11-X・Y		5.0×5.0	25.0	—	—	N-39°-W	○	○	○		II	
SI 28	65図	20・21・22-T・ U・V・W		7.5×7.4	55.5	—	—	N-23°-W	○	○	○		II	
SI 29	67図	24・25-X・Y		2.8×2.0	5.6	—	—	N-50°-E		○				
SI 30	68図	16・17-W・X・ Y		—	—	—	—	N-24°-W	○	○	○		II	
SI 31	71図	16-V		—	—	—	—		○					カマド のみ
SI 32	72図	11・12・13・14 -a・b・c・d		6.7×5.7	32.0	—	—	N-25°-W	○	○	○	○	II	

第Ⅵ章 ま と め

遺構名	挿図 番号	位 置	切り合い (新>旧)	竪穴規模 (長軸×短軸)	面積 (㎡)	掘立部規模 (長軸×短軸)	面積 (㎡)	方位	カ マ ド	柱 穴	壁 溝	掘 立	時期	備 考
SI 33	74図	13・14・15・16 -b・c・d・ e・f		10.4×8.8	91.5	-	-	N-23°-W		○			Ⅱ	
SI 34	76図	21・22-Y・Z	SI34<SD35	4.6×3.7	17.0	-	-	N-70°-E	○	○	○		Ⅱ	
SI 35	77図	21・22・23・24 -V・W・X・Y	SI35<SI46	9.0×8.6	77.4	-	-	N-22°-W	○	○	○		Ⅱ	
SI 36	79図	18・19・20・ 21・22-c・d・ e・f・g	SI36>SI65	8.8×7.6	66.8	-	-	N-24°-W	○	○	○		Ⅱ-1	
SI 37	81図	22・23-h		-	-	-	-			○	○			
SI 38	82図	24・25-e・f		3.3×3.3	10.9	-	-	N-18°-W	○	○			Ⅱ	
SI 39	83図	24・25・26- f・g・h・i		3.8×3.4	12.9	3(6.2)×1(5.3)	33.0	N-20°-W	○	○	○	○	I~ Ⅱ-1	
SI 40	85図	25・26・27-i・ j		-	-	-	-	N-19°-W		○	○		Ⅱ	
SI 41	87図	11・12-b・c		2.4×2.3	5.5	-	-	N-75°-W	○	○	○		I	
SI 42	88図	12・13-b・c		2.6×2.3	6.0	-	-	N-74°-W	○	○			I	
SI 43	89図	26・27・28-a・ b		3.3×3.5	11.5	-	-	N-19°-W	○	○			Ⅱ	
SI 44	90図	26・27・28-Y・ Z・a		5.3×5.3	28.0	3(4.9)×1(3.3)	-	N-16°-W	○	○	○	○	Ⅱ	
SI 46	92図	24・25-V・W		5.4×5.2	28.0	2(5.3)×2(5.2)	28.0	N-29°-W	○	○	○	○	Ⅱ	
SI 47	95図	26・27・28-V・ W・X・Y		4.6×4.4	20.0	2(4.7)×2(4.2)	19.7	N-27°-W	○	○	○	○	Ⅱ	
SI 48	97図	25・26-U・V		3.0×2.6	7.8	-	-	N-70°-E						
SI 49	98図	25・26-Q・R・S		2.7×2.7	7.0	2(4.9)×2(4.3)	21.0	N-20°-W		○		○		
SI 50	99図	26・27-R・S・T		-	-	1(4.5)×1(3.0)	13.5	N-20°-W	○	○		○		
SI 51	100図	28・29-S・T		-	-	-	-	N-18°-W	○					
SI 52	101図	31・32・33-X・ Y・Z・a		7.0×6.8	47.6	-	-	N-25°-W	○	○	○		Ⅱ	
SI 53	102図	33・34・35-Y・ Z・a		4.4×4.1	18.0	-	-	N-12°-W	○	○	○		I	
SI 54	103図	41・42・43-e・ f・g		6.4×5.6	35.8	-	-	N-23°-W	○	○	○		I	
SI 55	105図	44・45-f		3.0×2.6	7.8	-	-	N-22°-W	○				I	
SI 56	105図	44・45-e・f		-	-	-	-	N-25°-W	○	○			Ⅱ	
SI 57	106図	44・45-i・j		4.3×4.2	18.0	-	-	N-20°-W	○	○	○		I	
SI 58	107図	37・38-h・i・ j		4.8×4.4	21.0	-	-	N-22°-W	○	○	○		I	
SI 59	108図	20・21-W・X		2.6×2.4	6.2	-	-	N-28°-W		○			I	
SI 60	109図	22-v・w	SI60<SI28 SI60<SI35	-	-	-	-	N-25°-W	○				I	
SI 61	110図	14-u		-	-	-	-		○					カマド のみ
SI 63	110図	24・25-h・i		-	-	-	-	N-23°-W		○	○			
SI 64	57図	11・12-Q・R		3.6×2.9	10.4	3(4.2)×2(4.2)	17.6	N-20°-W	○	○	○	○	Ⅱ-2	
SI 65	26図	18・19-e・f	SI36>SI65	2.9×2.8	9.1	-	-	-	-	-	-	-	縄文 中期	

掘立柱建物

遺構名	挿図 番号	位 置	切り合い (新>旧)	規模 (長軸 × 短軸)	面積 (㎡)	方位	備 考
SB1	112 図	8・9-H・I		2 (3.8) × 2 (3.8)	14.4	N-14°-W	総 柱
SB2	112 図	5・6-K・L		3 (4.4) × 2 (2.5)	11.0	N-50°-W	
SB3	113 図	9・10-N・O・P		2 (4.0) × 2 (3.8)	15.0	N-21°-W	総 柱
SB4	113 図	14・15-P・Q		—	—	N-29°-W	総 柱
SB5	114 図	16・17-M・N・O		2 (3.4) × 2 (3.4)	11.5	N-27°-W	総 柱
SB6	114 図	16・17・18-N・O	SB6 > SB7	2 (3.4) × 2 (3.4)	11.5	N-35°-W	総 柱
SB7	114 図	17・18・19-N・O	SB7 < SB6	2 (4.0) × 2 (4.0)	13.3	N-27°-W	総 柱
SB8	115 図	25・26・27-c・d・e		2 (3.3) × 2 (3.2)	10.2	N-23°-W	総 柱
SB9	116 図	25・26・27-c・d・e		3 (7.0) × 2 (6.3)	44.1	N-33°-W	
SB10	117 図	16・17-a・b		2 (4.1) × 2 (4.1)	16.8	N-64°-E	総 柱
SB11	118 図	17・18・19-b・c		3 (5.6) × 2 (4.1)	22.9	N-64°-E	総 柱
SB12	119 図	12・13-e・f		—	—	N-68°-E	総 柱
SB13	119 図	26-Y		2 (3.3) × 1 (1.5)	4.1	N-70°-E	

第7表 平安時代土器観察表

凡例

1. 胎土の項目は主に胎土中に含まれる鉱物・岩石について記述した。なお、胎土中に含まれる鉱物・岩石については下記のように略した。
石英→英 長石→長 雲母→雲 海面骨針→海針
小礫：3mm以上（石英、長石を除く） 粗砂：1～3mm（石英、長石を除く） 細砂：1mm以下（石英、長石を除く）
2. 土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所監修「新版 標準色帳」の名称を用いた。
3. 遺存で示した数値は、図示した部分における残存状況を表す。
4. 手法の欄の土器の部位については下記のように略した。
口縁部→口 体部→体 底部→底

S11（本文47頁、第35図）

番号	地 点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
1		土師	小甕A	底 6.6	長、小礫、鉄滓	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	1/3	非ロクロ 底外木葉痕	
2		土師	小甕A	底 7.2	長、粗砂	(内) 7.5Y2/1 黒 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	堅	底部 全存	非ロクロ1類、底外砂痕	内面全体炭化物。二次焼成を受ける

S12（本文47頁、第35図）

4	カマド	土師	無台埴B	底 5.4	長、雲（細）小礫	(内) 25Y2/1 黒 (外) 10YR7/6 明黄褐	堅	1/3	ロクロ、内面ヘラミガキ、底外回転糸切り、内面黒色処理	
5	カマド	土師	小甕A	底 7.4	長、小礫	(内) 10YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR5/2 灰黄褐	堅	5/6	非ロクロ、底外平滑、砂底を再調整か	外面全体スス
6	カマド	土師	長甕A	口 22.6	長小礫（多）	(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	2/9	非ロクロ1類	口縁内面薄くスス。カマドの芯に使用した可能性がある
7	カマド	土師	長甕A	底 9.6	長、小礫	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐	普通	底部 全存	非ロクロ 底外木葉痕	外面全体スス。内面は黒斑

S13（本文50頁、第35図）

8	床面	土師	長甕A	底 6.0	英、長小礫（多）粗砂	(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR5/6 明褐	堅	底部 全存	非ロクロ、底外ヘラナデ	底部外面に黒斑
9	カマド	土師	長甕A	底 8.4	長、小礫、鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 5YR7/4 にぶい橙	普通	底一部 欠	非ロクロ 底外砂痕	

S14（本文50頁、第35図）

10		土師	無台埴B	底 4.6	長	(内) 5Y2/1 黒 (外) 7.5Y5/6 明褐	堅	底部 全存	ロクロ、内面ヘラミガキ、底外回転糸切り、内面黒色処理	胎土精良
----	--	----	------	-------	---	-------------------------------	---	----------	----------------------------	------

S17（本文55頁、第38図）

1	床面 カマド	土師	長甕A	口底高 25.6 9.8 27.4	長、小礫、鉄滓	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	堅	2/3	非ロクロ2類	
2	カマド	土師	小甕A	底 5.8	英、長小礫粗砂	(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR7/4 にぶい橙	普通	1/2		底部外面灰？
3	カマド	土師	長甕A	口底 21.0 8.6	長小礫（多）、鉄滓	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	5/6	非ロクロ2類	
4	カマド	土師	長甕A	底 9.4	英、長小礫（多）	(内) 10YR7/6 明黄褐 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/3	非ロクロ 底外木葉痕	内面薄くスス

S18（本文58頁、第39・40図）

1	カマド 周囲	須恵	甕		A	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR3/1 黒褐	堅	(体) 破片		二次焼成を受ける。内外面炭化物。カマドの芯の可能性
2	カマド 周囲	須恵	甕		A	(内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) 2.5Y4/1 黄灰	堅	(体) 破片		二次焼成を受ける。カマドの芯の可能性。1と同一個体か？
3	カマド	土師	埴B	口14.4	長、粗砂	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	2/9	ロクロ	
4	カマド	土師	埴B	口14.4	長、細砂	(内) 5YR7/6 橙 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	1/6	ロクロ	胎土精良

番号	地 点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
5	カマド	土師	小甕A	口 16.5 底 8.2	英、長 小礫 粗砂	(内) 2.5Y8/3 浅黄 (外) 2.5YR7/3 浅黄	堅	1/9	非ロクロ 底外木葉痕と砂痕	内面一部スス、体部外面 に黒斑、スス
6	カマド	土師	長甕A	口 16.4	長、小礫 粗砂	(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR8/4 浅黄橙	普通	1/10	非ロクロ1類	
7		土師	長甕A	口 29.0 底 10.4 高 31.6	長 小礫(多) 鉄滓	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	底部 全存	非ロクロ1類、底外砂 痕	体部内面一部黒い付着 物。体部外面下部一部黒 斑
8	カマド	土師	長甕A	底 8.0	英、長 小礫 粗砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR7/5 橙	普通	底部 全存	非ロクロ、底外不調整	
9	カマド	土師	長甕A	底 9.4	英、長 小礫 粗・細砂	(内) 10YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/6 橙	堅	4/9	体下端ヘラケズリ 底外ナデ	
10	カマド	土師	鍋A	底 12.8	英、長 小礫 粗砂	(内) 10YR7/6 明黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	7/9	非ロクロ1類 底外砂痕	外面体部と底部につな がる黒斑

SI9 (本文58頁、第41図)

1	カマド	土師	小甕A	口 10.4 底 7.2 高 8.7	長	10YR8/3 浅黄橙	普通	底部全 存	非ロクロ、底外不調整	外面体部下半一部スス
2	カマド	土師	小甕A	底 6.6	英、長 小礫	(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR8/4 浅黄橙	堅	1/3	非ロクロ、底外ナデ	外面全体にスス
3		土師	長甕A	口 21.4 底 9.2 高 29.0	英、長 小礫 粗砂	(内) 10YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	普通	底部 全存	非ロクロ2類 底外不調整	体部外面大きな黒斑2つ 外面炭化物

SI10 (本文58頁、第42図)

1	カマド	土師	無台埴 C	口 12.0 底 5.6 高 5.8	英、長 粗砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 5YR7/6 橙	普通	1/6	底外ナデ	胎土精良
2		土師	無台埴 B	口 14.8 底 6.0	長、粗砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR8/6 浅黄橙	普通	2/9	底外回転糸切り	胎土精良
3	カマド	土師	小甕A	口 13.0	小礫(多)、 鉄滓	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/3	非ロクロ	
4	カマド	土師	小甕A	口 17.0	英、長、 雲、鉄滓	10YR6/3 にぶい黄橙	普通	1/4	非ロクロ	
5		土師	小甕A	口 15.4	英、長 粗砂	7.5YR7/6 橙	堅	2/9	非ロクロ	口縁内面炭化物、体部外 面薄くスス
6		土師	小甕B	底 8.0	英、長 小礫 粗・細砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	堅	1/2	ロクロ 底外回転糸切り	胎土精良
7		土師	小甕A	底 8.2	長、小礫 粗砂	2.5Y7/2 灰黄	普通	底部全 存	底外ヘラナデの下に木 葉痕	
8	カマド	土師	甕A	底 10.0	英、長 粗砂(多)	5YR5/6 明赤褐	普通	底部全 存	非ロクロ 底外木葉痕	
9	カマド	土師	長甕B	口 21.6	長 小礫(多)、 鉄滓	10YR7/4 にぶい黄橙	堅	1/4	ロクロ、ナデの下にタ タキ目	口縁内面一部スス

SI11 (本文62頁、第44図)

1	カマド	土師	埴B	口13.0	細砂	7.5YR8/4 浅黄橙	堅	1/9	ロクロ	胎土精良
2		土師	埴B	口14.8	細砂	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	1/12	内面黒色処理、ヘラミ ガキ	胎土精良
3		土師	小甕A	底 7.6	長、礫	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	堅	1/3	底外ヘラナデ	
4		土師	長甕A	底11.0	英、長、礫	(内) 7.5YR7/4 にぶい褐 (外) 10YR5/4 にぶい黄褐	普通	1/2	底外不調整	外面全体に薄くスス
5		土師	長甕A	口18.0	長、小礫、 鉄滓	(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	5/18	非ロクロ1類	外面体部に黒斑、口縁部 外面にスス
6	カマド	土師	長甕A	口23.4	英、小礫、 細砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/3	非ロクロ	口縁部外面に黒斑
7		土師	長甕B	口24.0	英、長 小礫	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙	堅	1/12	ロクロ	胎土精良

第Ⅵ章 ま と め

S113 (本文65頁、第45図)

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
1		須恵	甕		B	(内) 7.5YR4/1 褐灰 (外) 10YR4/1 褐灰 (断面) 7.5YR5/3 にぶい褐	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	内面転用硯
2		土師	埴B	口 12.6 底 5.2 高 5.3	小礫 粗砂	(内) 10YR7/1 黒 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/2	内面ミガキ、黒色処理、 口縁外面ヘラミガキ	
3	カマド	土師	小甕A	底 6.6	英、長 小礫	7.5YR7/6 橙	堅	2/3	非ロクロ	
4	カマド	土師	小甕A	底 7.6	長、小礫 粗砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	5/12		
5	カマド	土師	長甕A	底 10.4	長、小礫 粗砂	(内) 7YR7/8 橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	堅	2/9	非ロクロ 底外不調整	
6	カマド	土師	長甕A	底 9.0	英、小礫 粗砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/9	非ロクロ 底外木葉痕	
7	カマド	土師	長甕A	口 19.6	長 小礫 (多)、 鉄滓	10YR7/6 明黄褐	普通	1/2	非ロクロ 1 類	
8		土師	長甕A	口 23.0	英、長 小礫 粗砂	10YR7/4 にぶい黄橙	堅	1/6	非ロクロ	体部外面に黒斑、 一部スス

S114 (本文66頁、第47・48図)

1	カマド	土師	小甕A	口11.6	小礫 (多)	(内) 7.5YR8/6 浅黄橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい黄橙	堅	5/18	非ロクロ	内外面全体にスス
2		土師	小甕A	口12.0 底 7.0	長 小礫 (多) 粗砂	(内) 2.5Y8/3 淡黄 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	堅	1/3	非ロクロ、砂底	口縁内面炭化物、外面全 体に薄くスス
3		土師	小甕A	底 6.8	長、小礫 粗砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR5/2 灰黄橙	堅	3/5	底外木葉痕	
4		土師	長甕A	口17.9	長、小礫	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙	普通	2/9		
5		土師	長甕A	底11.3	小礫 (多)	(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 橙	普通	1/3	砂底	内外面に黒斑
6		土師	長甕A	口17.9	英、長 小礫 粗砂、 鉄滓	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/3	非ロクロ 1 類	体部外面に黒斑、外面全 体スス
7	カマド	土師	長甕A	口24.3 底10.3 高28.7	長 小礫 (多) 鉄滓	10YR7/3 にぶい黄橙	普通	(口) 1/5 (底) 3/4	非ロクロ 1 類	内面体部と底部につなが る黒斑、体部外面にスス
8	カマド	土師	長甕A	口19.9	長、小礫	(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 7.5YR8/6 浅黄橙	普通	5/18	非ロクロ 1 類	体部外面黒斑
9	カマド	土師	長甕A	口28.5	英、長 小礫 (多) 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ 1 類	口縁内面黒斑、体部外面 スス
10	カマド	土師	鍋A	口35.7 底11.2 高12.3	長、小礫 粗砂	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	(口) 5/36 (底) 5/9	非ロクロ 底外砂痕	体部下部外面に灰

S115 (本文71頁、第49図)

1	カマド	須恵	甕		B	(内) 10YR4/1 灰 (外) 10YR5/3 黄褐	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	
2		須恵	甕		B	10YR4/1 灰	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	

S117 (本文71頁、第50図)

1	カマド	須恵	甕		A	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 2.5Y6/2 灰黄	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	
2	13-Q	土師	埴B	口18.4	英、長 小礫	5YR6/6 橙	堅	1/12	ロクロ	胎土やや精良

SI18 (本文73頁、第50図)

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
1		土師	埴B	口 15.4	粗砂	(外) 5YR7/6 橙 (内) 5YR7/4 にぶい橙	堅	1/12	ロクロ	胎土精良
2	カマド	土師	小甕A	底 7.4	英、長 小礫 (多)	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	堅	5/9	非ロクロ 底外木葉痕	
3		土師	小甕A	底 7.4	小礫 (多)	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	堅	5/6	非ロクロ 底外木葉痕	体部外面と底部につながる 黒斑
4		土師	甕A	底 9.8	英、長 小礫 (多) 粗砂	(内) 7.5YR6/3 にぶい褐 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	4/9	底外砂痕	

SI19 (本文73頁、第52図)

1	カマド	須恵	甕	底 6.8	B	10YR5/1 褐灰	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	
2	カマド	土師	小甕A	底 6.8	英、長 小礫 (多) 粗砂 (多) 細砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 2.5Y7/3 浅黄	普通	8/9	非ロクロ、底外不調整	
3	カマド	土師	長甕A	口 25.0	長 小礫 (多)	(内) 5YR6/6 橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	1/18	非ロクロ1類	全体に薄い作り。口縁 「く」の字に屈曲外反
4	18-R	土師	長甕A	底 13.4	長 小礫 (多)	(内) 2.5Y8/3 淡黄 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	底部 全存	非ロクロ、底外砂痕	体部外面に黒斑、スス、 灰

SI20 (本文78頁、第54図)

1	カマド 付近 上位	須恵	短頸壺	底 6.4	A	(内) 7.5Y6/1 灰 (外) 7.5YR5/1 褐灰	堅	底部 全存	底外回転糸切り	胎土に石英を含まず精 良。
2		土師	埴A	口 11.2 底 5.5 高 5.5	英、長 粗・細砂	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR5/1 褐灰	普通	1/2	非ロクロ 内面黒色処理	口縁意図的に打ち欠く
3		土師	埴B	底 5.8	英、長、 雲、 小礫	(内) 7.5YR2/1 黒 (外) 7.5YR7/6 橙	堅	底部 全存	内面ヘラミガキ、底外 回転糸切り 内面黒色処理	胎土精良。底部外面に小 さな黒斑
4	カマド	土師	皿	口 13.6	小礫 粗・細砂	(内) 7.5Y6/1 褐灰 (外) 7.5YR8/6 浅黄橙	堅	2/9	内面ヘラミガキ、内面 黒色処理	胎土精良
5		土師	有台埴 (皿)	底 5.2	英、長 小礫 粗砂	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 5YR7/6 橙	堅	底部 全存	底外回転糸切り 内面黒色処理	胎土精良
6	カマド	土師	小甕B ?	口 11.2	長 粗・細砂	(内) 5YR7/6 橙 (外) 7.5YR7/6 橙	堅	1/18	ロクロ	
7		土師	小甕		細砂	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 10YR 8/3 浅黄橙	堅	1/6	外面タタキ目 内面黒色処理	胎土精良
8	カマド	土師	小甕A	口 15.0	英、長 粗・細砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	堅	5/18	非ロクロ	口縁内面炭化物
9	カマド	土師	小甕A	口 14.4	長、小礫 粗砂、 鉄滓	(内) 7.5YR8/6 浅黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	軟	1/4	非ロクロ	口縁内面炭化物
10		土師	長甕A	口 16.8	英、長 雲、小礫 (多) 鉄滓	10YR7/6 明黄褐	堅	5/18	非ロクロ	口縁外面スス
11	カマド	土師	長甕A	口 17.7	英、長 小礫 粗砂 (多)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	2/9	非ロクロ1類	
12	南東隅	土師	小甕A	底 5.2	長 小礫 (多)	(内) 7.5YR8/6 浅黄橙 (外) 10YR8/6 にぶい黄橙	普通	4/9	底外不調整	
13		土師	小甕A	底 6.4	英、長 小礫 (多) 粗砂	(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR4/1 褐灰	堅	底部 全存	非ロクロ1類、底外木 葉痕	
14	カマド	土師	小甕A	底 7.0	英、長 粗砂	7.5YR6/3 にぶい褐	堅	1/3	非ロクロ 底外不調整	
15	南東隅	土師	甕	底 6.8	長、小礫 粗・細砂	(内) 5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	普通	底部 全存	非ロクロ、底外砂痕	
16		土師	小甕B	底 6.0	英、長 小礫 粗・細砂	(内) 7.5YR8/6 浅黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	堅	2/9	ロクロ、底外回転糸切 り	
17	カマド	土師	鍋A	口 29.9	長、小礫 粗砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	堅	1/9	非ロクロ	

SI21 (本文79頁、第56図)

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
1		須恵	埴	口 14.2	B	(内) 5Y5/1 灰 (外) 5Y6/1 灰	堅	1/9		
2		土師	埴	口 13.0	細砂	(内) 7.5Y2/1 黒 (外) 10YR8/4 浅黄橙	堅	1/6	内面黒色処理	胎土精良
3		土師	手づくね土器	口 5.0	細砂	10YR7/4 にぶい黄橙	堅	4/5		
4	カマド	土師	小甕A	口 12.2	英、長 粗砂、雲	(内) 10YR4/1 褐灰 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ	
5		土師	小甕A	底 5.6	英、長 小礫 (多)	(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y6/2 灰黄	堅	底一部欠	非ロクロ 底外ケズリの下に砂痕	底部内面黒斑
6	カマド	土師	小甕A	底 6.8	長、小礫 粗・細砂	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	堅	3/5		
7	床面	土師	長甕A?	口 16.0	英、長 小礫 粗砂 (多)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	2/5	非ロクロ1類	
8	カマド	土師	長甕A	口 18.8	英、長 小礫 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ1類	
9		土師	長甕A	口 25.8	長、小礫 粗砂	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/9	非ロクロ1類	体部外面黒斑
10	床面	土師	長甕A	底 7.6	長 小礫 (多)	(内) 2.5Y7/3 淡黄 (外) 2.5Y8/4 淡黄	普通	底部全存	非ロクロ	
11		土師	長甕A	底 10.0	小礫 (多)	(内) 7.5YR5/2 灰褐 (外) 7.5YR7/6 橙	堅	2/9		
12	カマド	土師	長甕A	底 9.4	長、小礫 粗砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 5YR6/6 橙	普通	一部欠	底外砂底	
13		土師	長甕A	底10.4	英、長 小礫 鉄滓	(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/3	底外砂底	体部外面黒斑
14	カマド	土師	長甕A	底 11.0	英、長 雲 (細) 小礫	(内) 10YR8/1 灰白 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	普通	1/2	非ロクロ 底外ケズリの下に砂痕	

SI22 (本文80頁、第57図)

1	カマド	土師	埴	口 13.8	英、粗砂、 細砂	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR7/6 明黄褐	堅	1/12	内面黒色処理、ヘラミ ガキ	
---	-----	----	---	--------	-------------	-----------------------------------	---	------	------------------	--

SI24 (本文83頁、第60図)

1	中央貯蔵穴	土師	埴A	口 13.0 底 6.2 高 6.6	英粗砂 (非常に多)	(内) 10YR7/6 明黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	口1/9 底1/3	非ロクロ	口縁内面炭化物。埴であるが二次焼成を受ける
2	中央貯蔵穴	土師	鉢	口 16.8	長 小礫 (多)	(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	普通	1/18	非ロクロ	
3	カマド	土師	長甕A	口 21.6	英、長、 小礫、 粗砂	(内) 7.5Y4/6 にぶい橙 (外) 7.5Y6/6 橙	堅	5/36	非ロクロ1類	

SI25 (本文85頁、第61・62図)

1	浮	須恵	甕		A	(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 2.5Y6/2 灰黄	堅	(体)破片	外面平行タタキ	
2		土師	無台埴B	口 12.2 底 6.1 高 6.1	英、長 細砂 (多)	(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	堅	1/9	底外糸切り後ケズリ	底部外面に粉痕?
3	カマド支脚	土師	無台埴B	口 14.0 底 6.3 高 5.7	英 (細)、 雲 (細) 小礫、 粗砂 (多)	10YR8/4 浅黄橙	普通	一部欠	底外糸切り後、一部ケズリ	
4	カマド右袖	土師	小甕A	口 12.8	英、長 小礫 (多)	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/6 明黄褐	普通	5/36	非ロクロ	
5	カマド支脚	土師	長甕A	底 9.0	長、礫 (多)	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	2/3	非ロクロ 底外木葉痕	
6	床面	土師	長甕A	口 20.1 底 9.8 高 30.9	長 小礫 (多)	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	軟	(口) 2/9 (底) 1/3	非ロクロ2類	体部内外面全体スス

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
7	カマド 支脚	土師	長甕A	底 6.5	長、小礫、 粗砂	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	普通	底部 全存	非ロクロ 底外砂痕	

S127 (本文88頁、第64図)

1		土師	埴B	底 5.8	粗砂	7.5Y7/6 橙	堅	3/5	底外回転糸切り	
2	カマド	土師	小甕A	口 9.4	英 粗砂 (多)	(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 7.5YR4/1 褐灰	普通	1/5	非ロクロ	体部外面スス
3	床面	土師	長甕A	口 24.0	長、礫 (多) 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	1/10	非ロクロ	口縁～体部外面薄くスス
4	カマド	土師	長甕A	口 19.0	長、礫 (多) 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	普通	1/5	非ロクロ	体部外面薄くスス
5	カマド	土師	長甕A	口 19.0	長 小礫 (多) 鉄滓	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/9	非ロクロ1類	体部下半内外面薄くスス。カマドの芯として使用

S128 (本文90頁、第66図)

1	カマド	須恵	甕		B	(内) 5Y1/5 灰 (外) 10YR5/3 にぶい黄褐	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	
2	カマド	土師	埴B	口 12.8	長粗・細砂	(内) 7.5YR1/3 黒褐 (外) 7.5YR8/6 浅黄橙	堅	1/9	内面黒色処理、ヘラミガキ	
3	カマド	土師	埴B	口 12.0	英、長、 細砂	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 2.5Y6/3 にぶい黄	堅	2/15	ロクロ	
4	カマド	土師	埴B	口 14.6	英、長 小礫 粗砂 (多)	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	1/12	ロクロ	
5	カマド	土師	小甕A	口 10.2	長、小礫	(内) 10YR4/2 灰黄褐 (外) 7.5YR5/4 にぶい褐	堅	1/6		口縁内面炭化物、体部外面一部スス
6	カマド	土師	小甕A	底 5.5	長 小礫 (多)	(内) 2.5YR6/6 橙 (外) 10YR4/2 灰黄褐	普通	1/3	非ロクロ	体部と底部につながる黒斑状のシミ、体部外面スス
7	カマド	土師	小甕A	底 7.1	長 小礫 (多) 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐	堅	1/2		底縁外面スス
8	カマド	土師	長甕A	口 21.1	長、英 小礫 (多)	7.5YR7/6 橙	普通	1/6	非ロクロ1類	口縁内面小さな黒斑
9	カマド	土師	甕A	底 9.4	長、小礫 粗砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	堅	1/4	非ロクロ	体部外面全体にスス
10	カマド	土師	長甕A	底 10.0	長 小礫 (多)	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	2/9	底外砂痕	体部外面スス、底部内面に黒斑状のシミ

S129 (本文90頁、第67図)

1	24-X	土師	小甕	底 7.0	長 小礫 (多) 鉄滓	(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y6/2 灰黄	堅	底部全 存	非ロクロ 底外ケズリ	
---	------	----	----	-------	-------------------	----------------------------------	---	----------	---------------	--

S130 (本文93頁、第68・69・70図)

1		須恵	小瓶		A	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 2.5Y3/1 黒褐	堅	1/4		頸部外面ヘラ記号「Ⅱ」二次焼成を受ける
2		須恵	広口壺	底 12.8	B	(内) 10Y5/1 灰 (外) 7.5Y6/1 灰	堅	一部欠	底外菊花状文	胎土に石英を含み、やや粗い。二次焼成を受ける
3		須恵	甕	口 (43.8)	B	(内) 10YR5/1 褐灰 (外) 10YR3/1 黒褐	堅	1/24		
4		土師	埴B	口 12.4 底 4.8 高 5.0	長、雲 (細) 粗砂	(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 5YR6/6 橙	普通	2/9	底外回転糸切り	灯明皿。内面にタール
5		土師	埴B	底 5.8	英、長 粗砂	10YR7/4 にぶい黄橙	堅	底部全 存	ロクロ、 底外回転糸切り	
6		土師	埴B	底 6.0	長、粗砂	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	5/12	内面黒色処理、ヘラミガキ	胎土精良
7		土師	有台埴	底 5.2	英、粗砂	(内) 2.5Y3/1 黒褐 (外) 7.5YR7/6 橙	堅	底部全 存	内面黒色処理、ヘラミガキ	胎土精良
8		土師	小甕A	口 13.1	長、小礫	(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	1/6	非ロクロ1類	体外薄くスス

第Ⅵ章 ま と め

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
9		土師	小甕A	口 13.9	長 小礫 (多) 粗砂	(内) 7.5YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/3	非ロクロ1類	口縁内面炭化物、内外面スス。二次焼成を受ける
10		土師	小甕A	口 15.2		(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR5/2 灰褐	普通	1/4	非ロクロ1類	
11		土師	小甕B	底 5.6	長、雲 (細) 粗砂	(内) 2.5Y8/3 淡黄 (外) 10YR8/2 灰白	堅	1/2	ロクロ 底外回転糸切り	
12		土師	小甕A	底 8.0	長 小礫 (多)	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 2.5Y6/3 にぶい黄	堅	4/5	非ロクロ 底外ケズリ?の下に砂痕	
13		土師	小甕A	底 7.2	長 小礫 (多) 粗砂	(内) 7.5YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	底部 全存		内面半分黒斑状のシミ、底面外周スス。二次焼成を受ける
14		土師	小甕A	底 6.5	長 小礫 (多) 粗砂	(外) 5YR6/3 にぶい黄橙 (内) 10YR3/1 黒褐	普通	底部 全存	非ロクロ、 内面黒色処理 底外木葉痕	外面被熱赤化。底縁スス
15		土師	長甕A	口 20.1	長 小礫 (多)	(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 5Y4/1 灰	堅	1/6	非ロクロ1類	内外面黒斑状のシミ、二次焼成を受ける
16		土師	長甕A	口 19.0	英、長 小礫 (多)	(内) 10YR6/6 明黄褐 (外) 7.5YR6/6 橙	普通	4/9	非ロクロ1類	体部外面スス。二次焼成を受ける
17		土師	長甕A	口 23.4	英、長 小礫 (多)	(内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰	普通	5/36	非ロクロ1類	体内外スス付着
18		土師	長甕A	底 8.2	長 小礫 (多)	(内) 2.5YR6/8 橙 (外) 2.5Y5/2 暗灰黄	堅	2/5	非ロクロ	外面スス
19	床面	土師	長甕A	底 11.8	長 小礫 (多)	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい黄橙	普通	5/18	底外不調整	体部内外面スス
20		土師	長甕A	口 20.2 底 10.4 高 32.3	長、 小礫 (多) 粗砂、 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	(口) 1/4 (底) 2/3	非ロクロ1類 底外砂痕	体部内面炭化物、体部外面一部スス
21		土師	長甕A	口 19.0 底 9.2 高 32.1	英、長、 小礫 (多) 粗砂、 鉄滓	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR6/6 明黄褐	軟	2/3	非ロクロ1類 底外砂痕	体部内面黒斑状のシミ

SI31 (本文97頁、第71図)

1	カマド	土師	長甕A	口 14.0	小礫、 粗砂、 鉄滓	(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ1類	外面薄くスス
2		土師	甕A	底 9.0	小礫、 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐	普通	底部 全存	非ロクロ、砂底	体部内面炭化物、底面外周にスス
3	カマド	土師	長甕A	口 18.6	長 小礫 (多) 粗砂	(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ1類	

SI32 (本文99頁、第73図)

1	14a pit 中	土師	埴B	口 13.4	英、長 粗砂 (多)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR8/4 浅黄橙	堅	1/6	ロクロ	
2	床面	土師	埴B	底 6.0		(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR7/6 橙	堅	1/4	ロクロ、底外回転糸切り	胎土精良
3	カマド	土師	小甕A	底 8.0	英、長 小礫 粗砂	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/9	非ロクロ 底外砂痕	
4	カマド	土師	長甕A	口 25.6	長、小礫 粗砂 (多)	(内) 10YR8/6 黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙		1/3	非ロクロ	体部外面スス。カマド芯材
5	カマド	土師	長甕A	底 10.0	長、小礫 粗砂	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/9	非ロクロ 底外砂痕	

SI33 (本文100頁、第75図)

1		須恵	無台埴	底 5.8	A	2.5Y6/2 灰黄 (断面) 7.5YR5/6 明褐	堅	1/4	底外回転糸切り	体部外面火だすき
2		須恵	甕		A	(内) 2.5Y5/2 暗灰黄 (外) 10YR5/1 灰	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	
3		須恵	甕		A	(内) 5Y5/1 灰 (外) 5Y6/2 灰オリーブ	堅	(体) 破片	外面平行タタキ、内面矢羽根状あて具痕	
4		土師	埴B	口 14.2	細砂	7.5YR8/6 浅黄橙	堅	1/5	ロクロ	胎土精良。口縁内外面タール

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
5		土師	埴B	底 5.4	英、細砂	5YR7/6 橙	堅	1/3	ロクロ、底外回転糸切り	有台埴を再調整？
6		土師	埴	底 7.2	長、粗砂	(内) 7.5YR2/1 黒 (外) 10YR6/6 明黄褐 10YR4/1 褐灰	普通	4/5	内面ミガキ、黒色処理 底外ヘラケズリ	体部と底部につながる黒斑
7		土師	小甕A	口 16.0	長、粗砂	10YR5/3 にぶい黄橙	堅	1/10	非ロクロ	口縁～体内炭化物 体外スス
8		土師	鍋	口 34.8	粗・細砂	10YR7/4 にぶい黄橙	堅	1/18	非ロクロ2類	

SI34 (本文100頁、第76図)

1		土師	埴B	口 14.4 底 6.3 高 5.5	小礫	5YR7/8 橙	普通	全存	ロクロ 底外回転糸切り	胎土精良。口縁歪みは比較的大
2	床面	土師	埴B	底 5.0	長粗・細砂	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	堅	底部全存	内面ミガキ、黒色処理 底外回転糸切り	外面スス。二次焼成を受ける
3	北西隅	土師	埴B	底 5.6	長、粗砂	10YR7/4 にぶい黄橙	堅		底外回転糸切り	胎土精良
4	北西	土師	小甕A	口 11.0 底 5.5 高 10.5	英、長小礫 細砂	(内) 10YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	普通	1/4	非ロクロ 底外ケズリ	体外スス
5	北西	土師	小甕A	底 5.1	粗砂	(内) 10YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	堅	1/2	底外砂痕	
6	北西 カマド	土師	小甕A	底 6.3	英、長小礫 粗・細砂	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	5/9	非ロクロ 底外ナデ	
7	北西	土師	小甕A	口 18.0	英、長小礫 粗砂	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 5YR6/4 にぶい橙	堅	1/6	非ロクロ	
8	北西隅	土師	長甕A	口 18.5	小礫粗砂	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	1/4	非ロクロ1類	口縁～体内面全体に黒斑状のシミ。二次焼成を受ける
9	床面	土師	長甕A	底 10.0	長小礫 (多)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 5YR6/4 にぶい橙	堅	一部欠	非ロクロ 底外ナデ	体部外面スス

SI35 (本文104頁、第77・78図)

1	カマド 床面	須恵	無台埴	口 13.8 底 4.2 高 6.1	B	(内) 2.5Y5/3 黄褐 (外) 5Y5/1 灰 (断面) 2.5Y5/3 黄褐	普通	(口) 4/9 (底) 3/5	底外静止糸切り	口縁～体部外面火だすき。胎土に石英を含みや粗い
2		土師	埴B	口 19.0	小礫粗・細砂	(内) 5Y4/1 灰 (外) 7.5YR5/3 にぶい褐	堅	1/10	ロクロ目	
3		土師	長甕A	口 17.2	英、長、粗砂 鉄滓	(内) 7.5Y6/6 橙 (外) 7.5YR5/6 明褐	普通	2/9	非ロクロ1類	外面スス
4		土師	小甕	底 9.0	長、小礫 粗砂 (多)	(内) 2.5Y5/2 暗灰黄 (外) 2.5Y5/1 黄灰	普通	1/3	ロクロ？	外面一部スス
5		土師	甕A	底 9.4	長小礫 (多)	10YR6/4 にぶい黄橙	堅	7/10	非ロクロ 底外木葉痕	内面一部、底面全面スス
6	床面	土師	長甕A	口 20.0	長、小礫 粗・細砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR8/6 浅黄橙	堅	1/9	非ロクロ	胎土精良
7	カマド	土師	長甕A	口 19.6 底 9.0	長小礫 (多)	(内) 5YR7/8 橙 (外) 7.5YR6/6 橙	普通	(口) 1/2 底部全存	非ロクロ1類、底外砂痕	二次焼成を受ける。内面スス、外面黒斑。カマドの芯
8	カマド	土師	長甕A	口 21.8	英、長小礫 鉄滓	(内) 10YR3/2 灰黄褐 (外) 2.5Y6/3 にぶい黄	普通	1/5	非ロクロ	内面スス付着
9		土師	長甕A	口 23.4 底 8.4	長、小礫 粗砂 (多)	(内) 2.5Y6/3 にぶい黄 (外) 2.5Y7/3 淡黄	堅	(口) 1/2 底部全存	非ロクロ1類、底外砂痕	外面スス、内面体～底部薄くスス。表面が剥離しており、二次焼成を受けたものとみられる
10	床面	土師	鍋A	口 34.0 底 7.0 高 18.5	長、小礫 粗砂	(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	軟	一部欠(体)	非ロクロ、底外砂痕	体部外面スス、口縁内面一部スス。二次焼成を受ける

SI36 (本文107頁、第80図)

1		須恵	甕		B	N4/0 灰 (断面) 5YR3/3 暗赤褐	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	
---	--	----	---	--	---	---------------------------	---	--------	---------	--

第Ⅵ章 ま と め

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
2		土師	埴B	底 5.6	細砂	(内) 7.5Y7/3 浅黄 (外) 2.5Y7/2 灰黄	堅	底全存	底外回転糸切り	胎土精良
3		土師	小甕B	口12.4	細砂	(内) 2.5Y4/2 暗灰黄 (外) 2.5Y3/2 黒褐	堅	1/4	ロクロ	胎土精良
4		土師	小甕A	底 5.8	英、長粗・細砂	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR5/3 にぶい黄褐	堅	底全存	非ロクロ 底外ナデ	
5	床面	土師	小甕A	底 8.2	英、長小礫	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	堅	1/3	非ロクロ	
6	床面	土師	長甕A	口19.3	英、長小礫(多)	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR6/6 明黄褐	普通	1/9	非ロクロ	
7	カマド	土師	長甕A	口20.8	英、雲小礫	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/6	非ロクロ	胎土精良
8		土師	長甕A	底 8.1	英、長粗砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR5/3 にぶい黄褐	堅	1/4	非ロクロ 底外木葉痕	外面薄くスス
9	床面・カマド	土師	長甕A	底10.5		7.5YR7/6 橙	普通	4/9	底外砂痕	
10	カマド	土師	長甕A	底13.0	英、長小礫(多)	(外) 10YR6/4 にぶい黄橙 (内) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	5/18	底外砂痕	
11	床面	土師	長甕A	底11.0	長小礫(多)	(内) 10YR5/3 にぶい黄褐 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	1/2	非ロクロ	
14	SK2	土師	小甕B	口14.0	英、長小礫 細砂、海針	10YR4/2 灰黄褐	堅	1/6	ロクロ	胎土精良。二次焼成を受ける

SI38 (本文110頁、第82図)

1		須恵	甕		A	(内) 10YR7/4 にぶい黄褐 (外) 2.5Y7/2 浅黄	堅	(体)破片	外面平行タタキ	内面転用硯、内面赤色の付着物
2		須恵	甕		B	5Y5/1 灰	堅	(体)破片	外面平行タタキ、内面矢羽根状あて具痕	
3	カマド	土師	長甕A	口19.2	長、礫(多)	(内) 10YR5/4 にぶい黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/2	非ロクロ	口縁部は歪む

SI39 (本文113頁、第84図)

1		土師	埴B	口10.4	長、細砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙	堅	1/18	ロクロ	胎土精良
2		土師	埴B	口13.0	長、小礫粗砂	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 7.5YR6/6 橙	普通	1/5	内面黒色処理、ナデ	
3	カマド	土師	長甕B	口21.0	英、長小礫(多)	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/6 橙	普通	1/9	ロクロ	胎土精良
4	カマド	土師	長甕B	口29.4	英、長小礫	(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/9	ロクロ	
5	カマド	土師	長甕A	口34.6	長、小礫粗砂(多)	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	1/12	非ロクロ2類	胎土精良

SI40 (本文114頁、第85・86図)

1		土師	長甕A	口 21.9	長、小礫粗砂	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR4/1 褐灰	堅	1/5	非ロクロ1類	内外面スス。二次焼成を受ける
2	カマド	土師	長甕A	口 19.7	長、小礫	(内) 10YR8/6 黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/3	非ロクロ1類	内外対応する位置に黒斑。カマドの芯に再利用
3		土師	長甕A	底 10.1	長、小礫粗砂	(内) 10YR5/3 にぶい黄橙 (外) 10YR5/4 にぶい黄橙	堅	1/2	非ロクロ、底外木葉痕	内外面スス。二次焼成を受ける
4	カマド床面	土師	長甕A	底 8.8	英、長粗砂	(内) 7.5YR5/4 にぶい褐 (外) 7.5YR6/6 橙	普通	1/2	底外砂痕	
5		土師	長甕A	口 22.5		(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/6 橙	普通	1/9	非ロクロ1類	体部外面薄くスス
6		土師	長甕A	口 20.6	長、小礫	(内) 10YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	普通	1/6	非ロクロ1類	
7		土師	長甕A	口 24.4	長、礫(多)	(内) 10YR4/2 灰黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	2/9	非ロクロ	口縁～体部外面一部スス
8		土師	鍋?	底 9.0	長、小礫	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	3/4	非ロクロ1類 底外木葉痕	甕の可能性あり。内外面スス

SI41 (本文114頁、第87図)

1	12・13a	土師	埴B	口13.8	細砂	(内) 7.5YR2/1 黒 (外) 5YR7/6 橙	堅	1/6	内面黒色処理、ナデ	胎土精良、内面タール。灯明皿
---	--------	----	----	-------	----	--------------------------------	---	-----	-----------	----------------

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
2	12・13a	土師	小甕B	口 11.2	長、小礫	(内) 10YR7/6 明黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	1/9	ロクロ	胎土やや精良
3	12・13a	土師	小甕	底 8.0	粗砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	底部 全存	非ロクロ 底外木葉痕	底部内面炭化物
4	12・13a	土師	甕		英、小礫	(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR3/1 黒褐	普通	小片	タタキ	外面スス
5	W15	土師	長甕A	口 19.0 底 10.0 高 29.2	長、小礫 (非 常に多) 鉄滓	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 10YR6/6 明黄褐	普通	一部欠	非ロクロ 底外体部砂痕	体部内面黒斑、外面薄く スス
6	W15	土師	長甕A	口 20.1 底 10.0 高 31.6	長 小礫 (多)	(内) 10YR7/6 明黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	2/15	非ロクロ、底外砂痕	体部外面スス、体部と底 部につながる黒斑、口縁 ～体部内面一部スス。口 縁部は歪む

SI42 (本文118頁、第88図)

1	カマド	土師	甕	口 18.2 底 9.0	英、長 雲 (細) 小礫	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	(口) 2/15 (底) 5/18	非ロクロ 底外ケズリの下に砂痕	体内外一部スス。カマド の芯
2		土師	甕	底 9.4	長 小礫 (多)	(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 10YR5/2 灰黄褐	普通	4/9	非ロクロ 底外砂底	外面スス
3	床面、 SI41カ マド	土師	長甕A	口 23.6	英、長 小礫 粗砂、鉄滓	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ1類	
4	床	土師	長甕A	口 19.4	長 小礫 (多)	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/2	非ロクロ1類	口縁～体部にかけて黒斑
5		土師	長甕B		長、小礫 細砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	小片		

SI43 (本文118頁、第89図)

1	カマド	土師	長甕A	口 17.4	英、小礫 粗砂	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 5YR6/6 橙	普通	1/3	非ロクロ	
2	カマド	土師	長甕A	口 20.0	英、長 小礫 (多)	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	4/15	非ロクロ	体内外黒斑状のシミ。カ マドの芯
3	カマド	土師	長甕A	底 7.4	英、長 小礫 (多)	(内) 5YR7/8 橙 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	1/2	非ロクロ、底外ナデ	
4	カマド	土師	長甕A	底 6.6	英、雲 小礫	10YR7/4 にぶい黄橙	堅	1/4	底外木葉痕	外面一部スス

SI44 (本文122頁、第91図)

1		土師	小甕A	口 11.6	長 小礫 (多)	5YR6/6 橙	普通	1/5	非ロクロ	
2	カマド	土師	小甕A	口 13.2	長、小礫	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/3	非ロクロ	
3		土師	長甕A	口 21.0	長、小礫 粗砂	(内) 7.5YR8/6 浅黄橙 (外) 7.5YR7/6 橙	堅	2/9	非ロクロ1類	口縁～体部内面黒斑状の シミ、外面一部スス
4	カマド	土師	長甕A	口 19.4	長、小礫 粗砂	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/4	非ロクロ1類	
5		土師	長甕A	口 20.8	長 小礫 (多) 粗砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/6 橙	普通	1/4	非ロクロ1類	

SI46 (本文123頁、第93図)

1	カマド	土師	埴B	口 11.4	長、細砂	(内) 5YR5/6明赤褐・ 7.5YR2/1黒 (外) 7.5YR6/6～5YR6/6橙	堅	4/15	内面黒色処理、ヘラミ ガキ	胎土精良。二次焼成を受 ける。外面一部スス。カ マドの芯
2	カマド	土師	埴B	口 14.0	長、細砂	(内) 10YR2/1 黒 (外) 10YR5/3 にぶい黄褐	普通	1/12	内面黒色処理、ヘラミ ガキ	胎土精良
3	カマド	土師	小甕A	口 8.4	英、長 小礫 粗砂	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR5/4 にぶい黄褐	堅	1/9	非ロクロ	体部内外面スス。カマド の芯。二次焼成を受ける
4	カマド	土師	甕A	口 17.6	長、小礫	(内) 10YR7/6 明黄褐 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	3/10	非ロクロ	胎土精良
5	カマド	土師	長甕A	口 18.0 底 10.4	英、長、粗 砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 5YR7/6 橙	堅	(口) 1/6 (底) 1/2	非ロクロ 底外砂痕	

第Ⅵ章 ま と め

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
6	カマド	土師	長甕A	口20.8 底 8.8	英、長、 小礫、粗・ 細砂	(外) 10YR6/3 にぶい黄橙 (内) 10YR5/3 にぶい黄褐	普通	(口) 1/3 (底) 全存	非ロクロ1類、底外砂痕	口縁～体外スス
7	カマド	土師	甕A	口19.0	英、長 小礫 粗・細砂	10YR6/3 にぶい黄橙	普通	1/9	非ロクロ	
8	カマド	土師	甕A	底13.0	英、長 小礫 粗・細砂	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	普通	1/9	非ロクロ	

SI47 (本文128頁、第96図)

1		須恵	壺	底 8.2	B	(内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) 5Y4/1 灰	堅	1/3	底外砂底	
2		土師	埴B	口 12.8	長、小礫 細砂	7.5YR7/4 にぶい橙	堅	1/9	ロクロ	胎土精良
3		土師	埴B	口 12.4	細砂 須恵器系	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	堅	1/12	ロクロ	胎土精良
4	カマド	土師	甕A	口 15.2	長 小礫 (多)	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	普通	5/12	非ロクロ1類	内外面全体薄くスス。カマドの芯
5		土師	小甕A	口 16.0	長、小礫	7.5YR7/6 橙	堅	5/36	非ロクロ2類	胎土精良
6		土師	甕		長、小礫 粗砂	(内) 10YR7/6 明黄褐 (外) 7.5YR6/6 橙	堅	小片		
7		土師	小甕A	口 11.4 底 8.4 高 10.5	長 鉄滓 (多)	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	完形	非ロクロ1類	
8		土師	鉢	口 13.0 底 9.6 高 11.0	長、小礫 鉄滓 (多)	7.5YR7/6 橙	普通	(口) 2/3 (底) 1/4	内面ハケ状の弱いナデ、外面ほぼ無調整 底外木葉痕	
9	カマド	土師	短胴甕	口 22.2	雲 (細) 小礫 (多)	7.5YR7/6 橙	普通	1/3	非ロクロ1類	口縁内面スス。カマドの芯
10		土師	小甕A	底 9.6	英、レキ 粗砂 (多)	(内) 10YR4/2 灰黄褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	2/9	非ロクロ 底外砂底 内面黒色処理	

SI50 (本文131頁、第99図)

1	カマド	土師	長甕A	口 22.8	長、小礫 粗砂	(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR5/6 明褐	普通	1/5	非ロクロ	
---	-----	----	-----	--------	------------	--------------------------------------	----	-----	------	--

SI51 (本文131頁、第100図)

1	カマド	土師	長甕A	口 21.2	英、長 小礫、粗砂 鉄滓	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR5/4 にぶい褐	普通	1/6	非ロクロ	体外薄くスス
---	-----	----	-----	--------	--------------------	-------------------------------------	----	-----	------	--------

SI52 (本文131頁、第101図)

1		須恵	小瓶	口 12.4	B	2.5Y6/3にぶい黄	堅	1/8		胎土 (英) 含まずやや精良
2	旧カマド	土師	長甕B	口 19.8	英、長 小礫、粗砂 細砂	(内) 10YR8/4 浅黄 橙 (外) 2.5Y5/3明黄褐	普通	1/12	ロクロ	胎土 (英) 含まずやや精良
3		土師	甕A	底 8.0	長 小礫 (非常 に多) 鉄滓?	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 10YR6/6 明黄褐	普通	底部全 存	底外砂底	

SI53 (本文133頁、第102図)

1		土師	埴B	口 14.4 底 5.0 高 5.0	英、長 小礫、粗砂	(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	普通	(口) 4/9 底部全 存	ロクロ、底外回転糸切り後ナデ	口縁～体部内面炭化物
2	カマド	土師	小甕A	底 7.2	英、長 小礫 (多)	(内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	底部全 存	非ロクロ、底外木葉痕 内面黒色処理	体部～底部外薄くスス
3		土師	長甕A	口 18.4	長、小礫	(内) 7.5YR5/4 にぶい褐 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	堅	1/8	非ロクロ1類	口縁内面炭化物 体内スス

SI54 (本文136頁、第104図)

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
1	床面	須恵	広口壺	底 11.2	B	(内) 2.5Y6/3 にぶい黄 (外) 10YR4/2 灰黄褐 (断面)10YR7/4 にぶい黄橙	堅	1/2		外面一部薄く自然釉
2	42-f	土師	碗C	口 14.0 底 6.0 高 5.5	英、長 小礫、細砂 鉄滓	(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	(口) 1/6 (底) 1/2	底外回転糸切り	体内薄く付着物
3	42-e	土師	小甕A	口 16.0	英、長 小礫、粗砂、 鉄滓	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ	口縁内面薄く炭化物
4	42-f 確認面	土師	小甕B	口 13.6	長 粗・細砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙	普通	(口) 5/18	ロクロ	口縁内一部スス、体部外面スス

SI55 (本文136頁、第105図)

1	42-g	土師	長甕B	口 24.6	小礫 粗砂 (多)	7.5YR8/6 浅黄橙	普通	1/12	ロクロ	胎土精良
---	------	----	-----	--------	--------------	--------------	----	------	-----	------

SI56 (本文136頁、第105図)

2		土師	小甕A	口 14.6	長、小礫 粗・細砂	10YR7/3 にぶい黄橙	普通	1/5	非ロクロ	口縁内外面炭化物、体外スス
3	カマド	土師	小甕B	底 8.0	英 粗・細砂	5YR6/6 橙	普通	5/6	ロクロ	
4	カマド	土師	小甕A	口 12.2 底 6.6 高 13.0	長 小礫 (多)	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 5YR6/6 橙	普通	(口) 7/10 (底) 1/5	非ロクロ1類 底外砂底	体部内面、体部外面一部薄くスス。カマドの芯

SI57 (本文140頁、第106図)

1		土師	碗B	口 14.0 底 6.4 高 4.9	長 粗・細砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	普通	(口) 5/9 (底) 4/5	ロクロ、底外回転糸切り	体部外面一部薄くスス。カマドの芯
2	カマド	土師	甕	底 10.0	長 小礫 (多)	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい黄橙	普通	3/5	非ロクロ 底外不調整	体部外面黒斑、体～底部外面薄くスス。カマドの芯
3	カマド	土師	長甕A	口 24.8	長 小礫 (多) 鉄滓	(内) 10YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/8	非ロクロ1類	外面全体薄くスス。カマドの芯
4	カマド	土師	長甕A	口 26.0		10YR6/4 にぶい黄橙	普通	1/8	非ロクロ1類	体部内外面スス。カマドの芯

SI58 (本文140頁、第107図)

1	カマド	土師	皿	口 11.8 底 5.0 高 3.3	長、細砂	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 2.5YR7/8 橙	堅	1/18	ロクロ、底外回転糸切り	胎土精良
2	カマド	土師	長甕B	口 29.0	長、小礫	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	堅	2/9	ロクロ、底外回転糸切り	外面スス

SI59 (本文143頁、第108図)

1		土師	碗B	口 12.4 底 5.0	長、細砂	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR7/6 明黄褐	普通	1/3	ロクロ 底外回転糸切り	
---	--	----	----	-----------------	------	------------------------------------	----	-----	----------------	--

SI60 (本文145頁、第109図)

1		土師	碗B	口 13.6	長、小礫 細砂	10YR8/4 浅黄橙	普通	1/6	ロクロ	胎土精良。内面一部スス
2		土師	碗B	口 14.4 底 6.0 高 5.7	英、長 小礫	7.5YR8/4 浅黄橙	堅	1/3	ロクロ、底外回転糸切り	胎土精良
3		土師	碗B	口 14.6 底 6.0 高 4.9	細砂	(内) 10YR8/4 浅黄橙 (外) 7.5YR8/6 浅黄橙	普通	1/3	ロクロ、底外回転糸切り	胎土精良
4	カマド 支脚	土師	小甕A	底 8.0	長、小礫	(内) 2.5Y3/1 黒褐 (外) 2.5Y6/3 にぶい黄	堅	底部 全存	非ロクロ 底外木葉痕	内面スス
5		土師	小甕A	底 8.2	長 小礫 (多)	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 2.5Y3/2 黒褐	普通	1/3	非ロクロ 底外木葉痕	外面スス

SI64 (本文145頁、第111図)

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
1	カマド	土師	小甕A	口 15.0 底 9.6 高 13.1	長、小礫 粗砂	(内) 10YR6/6 明黄褐 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	(口) 1/18 底部は ほぼ全存	非ロクロ 底外砂底	口縁内面炭化物、体部外面黒斑、スス。カマドの芯
2	カマド	土師	長甕A	口 19.6	長、小礫 粗砂	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙	普通	5/36	非ロクロ	体部内面スス。カマドの芯

SD (本文160頁、第121図)

1	溝	土師	鍋A	口 31.0 底 7.0 高 14.3	英、長 小礫 (多) 粗砂	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/9	非ロクロ 1 類、底外砂痕	体部内面に薄く黒色物質、外面スス
2	16-P	須恵	小瓶	口 6.6	B	(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 2.5Y6/1 黄灰	堅	口縁 全存	ロクロ	

SP (本文160頁、第121図)

3	14a 柱穴	須恵	長頸瓶	口 13.4	B	5Y5/1 灰	堅	1/4		外面薄く自然釉。胎土に石英含まず
---	-----------	----	-----	--------	---	---------	---	-----	--	------------------

包含層 (本文160頁、第121・122図)

4	19・20- v w区	須恵	無台堦	口 12.4	A	2.5Y6/2 灰黄 (断面) 5YR6/6 橙	堅	1/8		内外面に火だすき
5		須恵	無台堦	口 17.2	B	(内) 2.5Y7/3 浅黄 (外) 7.5YR5/3 にぶい褐	堅	1/9		内外面に火だすき
6	不明	須恵	長頸瓶		A	(内) 5B4/1 暗青灰 (外) 5Y4/1 灰	堅	1/3		頸部外面ヘラ記号「 」
7	旧SI16	須恵	甕	底 8.6	B ?	(内) 10YR7/1 灰白 (外) 10YR6/1 褐灰	堅	1/4	底外ナデ	胎土 (英) (長) 含みやや粗い
8	東上位	須恵	甕		A	2.5Y7/1 灰白	堅			7 と同一個体
9	11/12	須恵	壺	底 11.4	A	(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 2.5Y6/1 灰黄	堅	1/4		胎土に石英を含み粗い
10		土師	無台堦 B	口 13.0 底 5.0	粗・細砂	(内) 5Y3/1 オリーブ黒 (外) 10YR8/4 浅黄橙	堅	(口) 1/18 (底) 1/2	内面ヘラミガキ、底外 回転系切り 内面黒色処理	胎土精良
11	19・20- v w区	土師	無台堦 B	底 5.0	英、長 粗砂	10YR8/4 浅黄橙	堅	底部 全存	底外回転系切り	胎土やや精良
12	6-S	土師	甕B	口 18.0	長、小礫 粗砂	(内) 7.5YR8/6 浅黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙	堅	5/36	ロクロ	胎土精良
13	6-S	土師	小甕A	口 18.0	長、小礫 粗砂	7.5YR7/6 橙	普通	1/6	非ロクロ	口縁内面黒斑状のシミ、体部外面スス
14	6-S	土師	小甕A	底 6.4	長、小礫	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR8/3 浅黄橙	堅	底部 全存	非ロクロ 底外砂底	内面黒色処理 ?
15	6-S	土師	小甕A	底 8.4	長、小礫 粗砂	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙	普通	1/4	非ロクロ	
16	6-R	土師	長甕A	底 10.2		(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	普通	2/3	底外ケズリの下に砂痕	
17	17-p	土師	長甕A	底 8.8	長、小礫	10YR7/4 にぶい黄橙	普通	1/3	底外砂底	体～底部内面黒斑、外面スス。二次焼成を受ける

確認調査 (本文163頁、第123・124図)

1	gh19	土師	小甕A	底 6.8	英、長 粗砂	(内) 10YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙	堅	5/18 底部 全存	非ロクロ 底外砂底	体部内面黒斑状のシミ、体部外面スス
2	kl13	須恵	無台堦	口 13.6 底 5.2	B	(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 2.5Y7/2 灰黄	堅	(口) 1/12 (底) 1/3	底外回転系切り	内外面に火だすき、体部外面ヘラ記号「 」
3	kl13	土師	小甕A	底 8.2	英、長 小礫 粗砂	(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR4/2 灰褐	普通	ほぼ全 存	非ロクロ 底外木葉痕後ナデ	外面スス
4	kl13	土師	小甕A	口 15.0	英、小礫 粗・細砂	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR5/2 灰黄褐	普通	1/3	非ロクロ	口縁内外面スス、体部内面黒斑状のシミ
5	kl13	土師	小甕A	口 17.2	長、小礫 粗・細砂	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR8/6 黄橙	普通	1/3	非ロクロ	口縁内面炭化物、外面全体スス

番号	地点	種別	器種	法量	胎 土	色 調	焼成	遺存	手 法	備 考
6	kl13	土師	長甕B	口 21.6	小礫粗砂	(内) 10YR5/3 におい黄橙 (外) 10YR7/4 におい黄橙	堅	2/9	ロクロ	内面薄くスス、外面一部スス
7	kl13	土師	長甕B	口 28.0	英、小礫粗砂 (多)	(内) 10YR6/4 におい黄橙 (外) 10YR7/6 明黄褐	普通	1/8	ロクロ	内面薄くスス
8	o11	須恵	壺	底 9.0	A	10Y4/1灰	堅	1/3	底外不調整	
9	o11竪穴内	土師	埴B	口 13.0 底 5.0 高 4.8	長、粗・細砂	(内) 7.5YR7/4 におい橙 (外) 7.5YR8/4 浅黄橙	普通	(口) 1/3 (底) 5/6	ロクロ、底外回転糸切り	胎土精良。内外面一部スス
10	o11	土師	小甕A	底 8.4	長、小礫粗砂	(内) 10YR6/3 におい黄橙 (外) 7.5YR5/3 におい褐	普通	1/3	非ロクロ 底外砂底	外面薄くスス。二次焼成を受ける
11	o11	土師	長甕A	口 21.0	長、小礫粗砂	(内) 10YR7/3 におい黄橙 (外) 7.5YR7/6 橙	普通	2/9	非ロクロ	内面薄くスス
12	o11	土師	甕	口 27.6	長、小礫、鉄滓	(内) 10YR6/4 におい黄橙 (外) 10YR7/4 におい黄橙	普通	2/9	非ロクロ	
13	P11	土師	埴B	口 12.8 底 5.7 高 6.0	英、長、雲 (細) 小礫、粗・細砂	(内) 10YR6/4 におい黄橙 (外) 7.5YR8/8 黄橙	普通	(口) 1/3 底部ほぼ全存	ロクロ 底外回転糸切り	
14	P11	土師	甕A	底 7.8	英、長、粗砂	(内) 10YR6/3 におい黄褐 (外) 10YR5/3 におい黄褐	普通	5/6	底外ナデ	体外スス
15	q11	須恵	甕		B	7.5Y4/1 灰 (断面) 5Y5/2 灰オリーブ	堅	(体) 破片	外面平行タタキ	二次焼成を受ける。カマド芯材か？
16	q11	土師	長甕A	口 21.0	長、小礫、粗砂	(内) 5YR6/6 橙 (外) 10YR6/6 明黄褐	普通	1/4	非ロクロ	
17	q11	土師	長甕A	底 8.4	長、小礫	(内) 10YR6/3 におい黄橙 (外) 10YR5/4 におい黄褐	普通	1/3	非ロクロ、底外木葉痕	内面薄くスス、外面黒斑
18	q11	土師	長甕A	底 8.2	英、長、小礫、粗砂	(内) 10YR6/4 におい黄橙 (外) 10YR3/1 黒褐	普通	底部一部欠	非ロクロ1類、底外砂痕	外面スス
19	s11	土師	甕	底 7.0	長、小礫、鉄滓	(内) 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR4/2 灰黄褐	堅	底部全存	非ロクロ、底外木葉痕	外面一部スス
20	U5	土師	埴	口 14.0	長、小礫	(内) 10YR4/1 褐灰 (外) 10YR6/3 におい黄橙	堅	1/30	ロクロ 内面黒色処理	
21	U5	土師	埴	口 13.2 底 5.4 高 5.9	長、粗砂	(内) 10YR2/1 黒 (外) 10YR8/6 黄灰	普通	1/4	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ 底外回転糸切り後ナデ	

第8表 鉄関連遺物観察表

挿図 番号	遺構名	構成 No	地点	種別	長さ		幅 (cm)	厚さ	重量 (g)	磁 着 度	メタル度	特 記 事 項
35図3	SI1	1		鉄製品（鍛造品） （鍔先）	7.6	5.3	1.5	90	3	錆化（△）		鉄製の鍔先の側部破片。黒錆が吹き錆化が進む。錆ぶくれが発達して15片程度に分かれている。平面系は逆L字状で、下手側の端部が折れ曲がり右方向に伸びている。上手側の端部と右手側の端部が破面となる。側部の幅が2.1cmを測る小型の鍔先で、右側部にはヒツ部分がV字状の断面形に開いている。
35図11	SI4	2		柄形鍛冶滓 （特大、含鉄）	13.8	9.5	5.2	1,317	5	L（●）		分析資料No.1。分析資料詳細観察表（図版54）参照。
37図1	SI6	3		鉄製品（鍛造品） （棒状不明）	7.2	1.9	0.9	8	3	錆化（△）		細身の棒状をした鉄製品破片。横断面形は方形で、下手側に向かい細くなって終息する。上手側の端部が破面で、側部には錆ぶくれが発達する。鉄鍔の茎部の可能性もあり。
45図9	SI13	4		鉄製品（鍛造品） （棒状不明）	9.4	2.9	1.9	83	2	錆化（△）		酸化土砂に覆われた棒状の鉄製品破片。二本が下手側で一体化しているため、外観的にはV字状となっている。個々の破片は右側が太く下手側は端部が錆ぶくれのためか広がっている。左側の破面は、やや長方形の横断面形をもつ棒状になっている。棒状の鉄製品破片が同一箇所に保管されていたために一体化した可能性もあり。
55図18	SI20	5		鉄製品（鍛造品） （刀子）	1.8	9.6	1.7	19	2	錆化（△）		右半分が錆ぶくれにより変形した刀子状の鉄製品破片。外観的には切先側と茎部側の先端部が欠けているように見える。背側と刃部側は一応区別が出来る。
55図19	SI20	6		鉄製品（鍛造品） （釘?）	2.6	0.7	0.8	3	1	錆化（△）		2片に割れている細身の釘または棒状不明品。両端部が破面になっており、横断面形はやや長方形を示す。外周部には錆ぶくれあり。
70図22	SI30	7		土師器 （鉄製品（鍛造品）付着）	4.6	6.3	0.8	23	1	錆化（△）		土師器器部の体部内面に鉄製品破片が固着した資料。鉄製品は径5mm程度の棒状で、横断面形は方形の可能性が高い。両端部が破面となる。
70図23	SI30	8		鉄製品（鍛造品） （手鎌、目釘付き）	1.9	4.9	0.7	7	1	錆化（△）		左右の側部が破面になった小型の手鎌破片。幅は1.8cm程度を測り、左側の中央部には径3mmほどの細い目釘の残欠が認められる。表面には二次的な酸化土砂が広がっている。
70図24	SI30	9		鉄製品（鍛造品） （刀子）	1.4	5.7	0.9	17	1	錆化（△）		2片に割れている刀子。両側で刃部と茎部の先端部が欠けている。刃部は上面が錆ぶくれの大きな欠けとなり、下面は厚い酸化土砂に覆われている。茎部の7割以上が錆ぶくれにより膨らんでいる。
70図25	SI30	10		砥石	17.7	8.6	4.5	1,014	1	なし		側部4面が破面となった砥石。砥面は程度の差があるが撓んでおり、短軸方向主体で、短軸方向にも認められる。裏面下半部は欠損している。石質は頁岩か。
75図7	SI33	11		鉄製品（鍛造品） （釘）	3.7	0.9	0.7	4	1	錆化（△）		釘と推定される棒状の鉄製品破片。上手側の端部が破面で、やや長方形の破面が突出する。下手側は細くなって終息する。錆ぶくれと酸化土砂あり。
75図8	SI33	12	床面	砥石	13.6	6.0	3.4	320	1	なし		側部4面が破面となった砥石。短軸方向の端部には自然面が残されている。砥面は程度の差があるが撓んでおり、砥痕は短軸方向主体で、長軸方向にも認められる。石質は軟質の砂岩か。
78図11	SI35	13		砥石	8.2	4.3	0.8	34	1	なし		下面が筋理面より脱落した自然石砥石の表面破片。小ぶりの軋石を利用したもので、上面が破面となる。砥面は平坦で、上手側と左右の肩部方向に筋状の砥痕が残されている。肩部から側部には堆積岩を示す細い筋が認められる。軟質の砂岩か。下面から左側部側は二次的な軟熱の為に吸着する。
80図11	SI36	14		柄形鍛冶滓 （大、含鉄）	6.9	4.3	5.6	285	4	M（◎）		分析資料No.2。分析資料詳細観察表（図版55）参照。
80図12	SI36	15		柄形鍛冶滓 （中、含鉄）	7.2	5.4	4.6	330	2	錆化（△）		側部5面が破面になった中型程度の柄形鍛冶滓の中核部から肩部にかけての破片。上面にはやや木炭痕が目立ち、下手側の肩部には小塊状の塊部が乗っている。下手側の肩部が生きており、側部から下面が浅い椀形となっている。表面は灰床土の圧痕主体で、右寄りの部分に瘤状の浮部が突出する。破面の気孔は発達気味で数も目立つ。含鉄部は上面中央部の表皮直下と見られ、細い放射割れが生じ始めている。ポリ袋中には他に4片の滓片が伴っているが接合せず。外観的には別個体の可能性も強い。
91図6	SI44	16		鉄製品（鍛造品） （刀子）	2.1	7.6	1.3	26	3	錆化（△）		刀子の刃部から茎部にかけての破片。刃部と茎部の先端部が欠落する。また、茎部には長さ5.6cmの範囲で木部の痕跡を残す。刃部側は黒錆が広がり、錆ぶくれにより変形が進む。関は少なくとも背側に確認される。

挿図 番号	遺構名	構成 No.	地点	種別	長さ		幅 (cm)	厚さ	重量 (g)	磁 着 度	メタル度	特 記 事 項
					長さ	幅						
96図11	SI47	17		鉄製品（鍛造品） （棒状不明）	1.4	4.9	1.3	14	2	錆化（△）		表面に錆ぶくれや酸化土砂が目立つ棒状不明品。2片に割れており、接合する可能性が強い。長軸の両端部が破面と推定され、縦断面形は方形気味か。層状の剥離が進んでおり、製品名は不明。
103図4	SI54	18	床面	鉄製品（鍛造品） （刀子）	3.0	11.5	1.4	65	3	M（◎）		大ぶりの刀子と推定される鉄製品破片。基部が別破片として残されている、関相当の部分が幅2cm以上と広く、刃部側は切先側に向かい急激に細くなる特異な形態を示す。刃部はよく使い込まれており、砥き減りも進む。関相当の部分には中間層に錆ぶくれが発達し、下面が広く脱落する。茎部分は錆ぶくれの影響のためか、緩やかな「く」の字状に折れ曲がっている。表面には酸化土砂が厚い。
109図4	SI64	19	77ト	鉄製品（鋳造品）	1.6	5.3	0.7	11	2	特L（☆）		鋳の口唇部状の形態を持つ鋳造品破片。表面の錆色自体はやや新しい可能性が強いものと見られるが、SI64住居跡のカマド出土とされているため、構成資料中に含めている。平面形は緩やかな弧状で、幅6cm程の平坦な口唇部が認められる。口縁部は丸みを持った縦断面形で、内側が窪み外側が弧状になる。農機具等の近代以降の部品破片かもしれない。
	遺構外	21		羽口（鍛冶）（先端）	3.5	1.8	2.9	14	1	なし		鍛冶羽口と推定される先端部破片。僅かに通風孔部の残欠が認められ、先端部の表面は厚さ6mm以下の黒色のガラス質滓に覆われており、残る側部は破面となる。胎土は砂質で耐火性が高そうに見える。
	遺構外	22		羽口（鍛冶）（体部）	2.7	5.0	3.4	50	1	なし		羽口のやや先端部寄りの体部破片。羽口正面から見ると左下の部分の破片で、外面には錆色のゴツゴツした付着物が残されている。内面には径2.1cm以上を測る通風孔部壁面の一部が残る。側部4面が破面。胎土は粘土質で、僅かに粉殻を混じえている。羽口の肉厚は1.3cmを測る。
	遺構外	20		鉄製品（鍛造品） （鎌）	6.3	2.3	1.9	11	2	錆化（△）		基部の先端部が欠落した細身の三角鎌。表裏面には錆ぶくれが発達し、先端部が欠けている可能性が大。茎部は細身で横断面形はやや長方形となる。鎌の刃部と基部の境にはV字状の折れが残る。
	遺構外	23		鉄製品（鍛造品） （帯金具、刀装部）	3.5	0.9	0.7	8	2	M（◎）		2片に割れている金具。径6mm程度の丸棒を環状に折り曲げたもので、内側の中空部は下手側がやや狭くなる楕円形を示す。中空部の径は高さ2.4cm×幅1.1cm前後を測る。刀装部の可能性あり。
	遺構外	24		鉄製品（鍛造品） （鉄斧）	10.0	2.9	1.9	138	4	特L（☆）		錆化が進み、袋部を中心に剥落が激しい細身の鉄斧。刃部幅は3.3cmを測り、使い込まれたためか右側の肩部が変形している。袋部は最大幅が2.3cm前後で、長さ5.5cm以上と推定される。袋部の先端は鉄斧全長の中間部分に位置する。形態やその大きさから手斧の可能性もあり。表面全体が黒錆化している。

第 9 表 鉄関連遺物分析資料一覧表

分析資料 番号	地区名	遺構名	構成 No.	遺物種類	重量 (g)	磁 着 度	メタル度	分析コメント	マ ク ロ	検 鏡	硬 度	E P M A	X 線 回 折	化 学 分 析	耐 火 度	カ ロ リ ー	放 射 化 分 析	断 面 構 造	分析位置指定	採取方法	観 察 法	集合写真	モノクロ	カラー	実測図	X線透過 前含浸
1	16-H	SI4	2	柄形鍛冶滓 (特大、含鉄)	1317	5	L（●）	滓部を中心に	—	◎	—	—	—	—	—	—	—	○	長軸端部 1/6	直線状の切断	○	○	○	○	—	○
2	18-g～ 19-c	SI36	14	柄形鍛冶滓 (大、含鉄)	285	4	M（◎）	滓部を中心に	—	◎	—	—	—	—	—	—	—	○	短軸端部 1/3	直線状の切断	○	○	○	○	—	○

第10表 石器・石製品一覧

挿図番号	遺構名	地 点	種 別	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	特 記 事 項
				(cm)			(g)		
56図15	SI21		擦石	8.5	7.0	6.3	437	安山岩	
56図17	SI31	カマド	石匙	7.1	2.9	0.7	12	硬質頁岩	
75図10	SI33		擦石	8.5	7.5	6.2	568	石英安山岩	
56図19	SI33	カマド		5.9	3.7	3.1	80	水晶	

写真図版



遺跡遠景航空写真

図版 2



調査風景 北西より



S158土層断面 北西より



扇田道下周辺空中写真

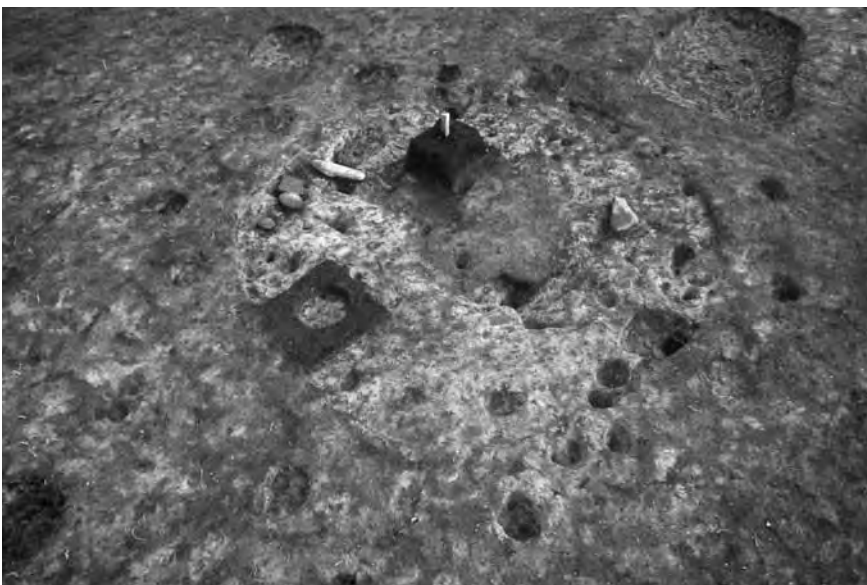
図版 4



遺跡近景



確認調査状況 北東より

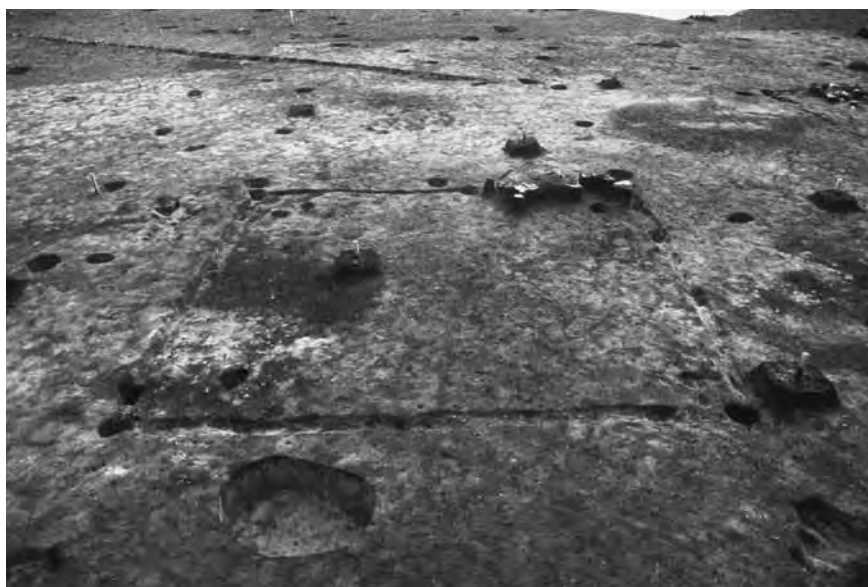


SI65完掘 北西より

SI 1 完掘 北西より



SI 2 完掘 北西より



SI 3 完掘 北西より



図版 6



SI 4 完掘 北西より



SI 6 完掘 北西より

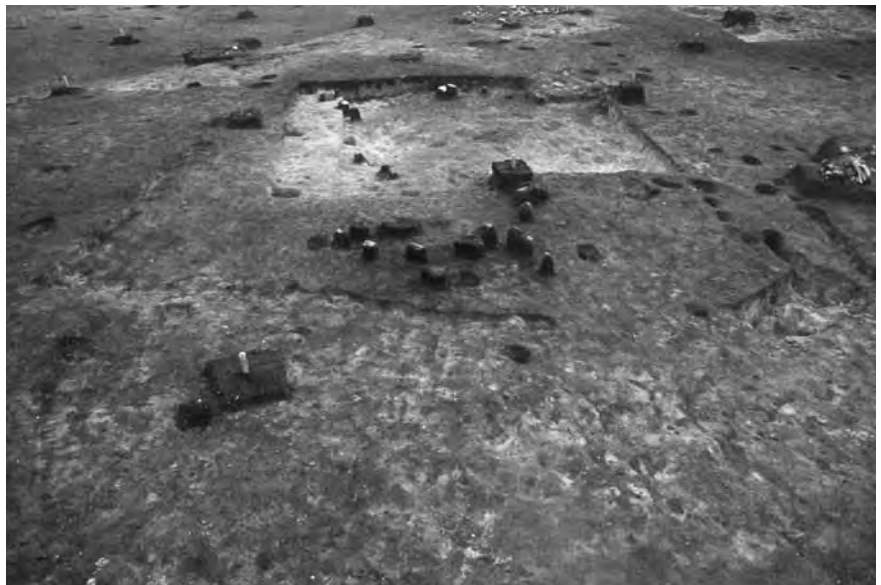


SI 7 完掘 北西より

SI 8・9 完掘 北西より



SI11・12・13完掘 北西より



SI17完掘 東より



図版 8



SI18完掘 北西より



SI19カマド 北西より



SI20完掘 北西より

SI21完掘 北西より



SI21カマド 北西より



SI22・64完掘 北より



図版10



SI24完掘 北西より



SI25土層断面 北西より



SI27完掘 北西より

SI28完掘 北西より



SI32完掘 北西より



SI33完掘 北西より



図版12



SI34炭化材検出状況 北より

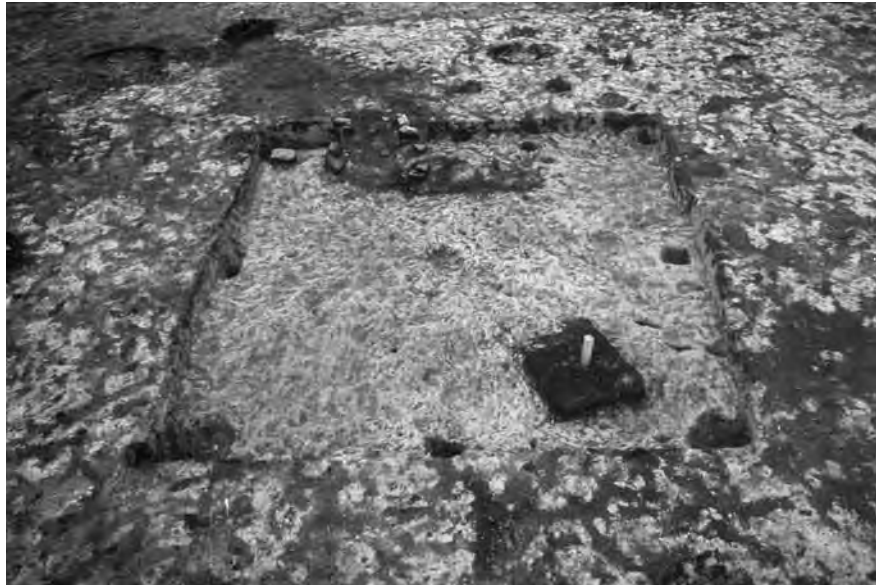


SI36完掘 北西より



SI36カマド 北西より

SI38完掘 北より



SI38カマド 北より



SI39完掘 北西より



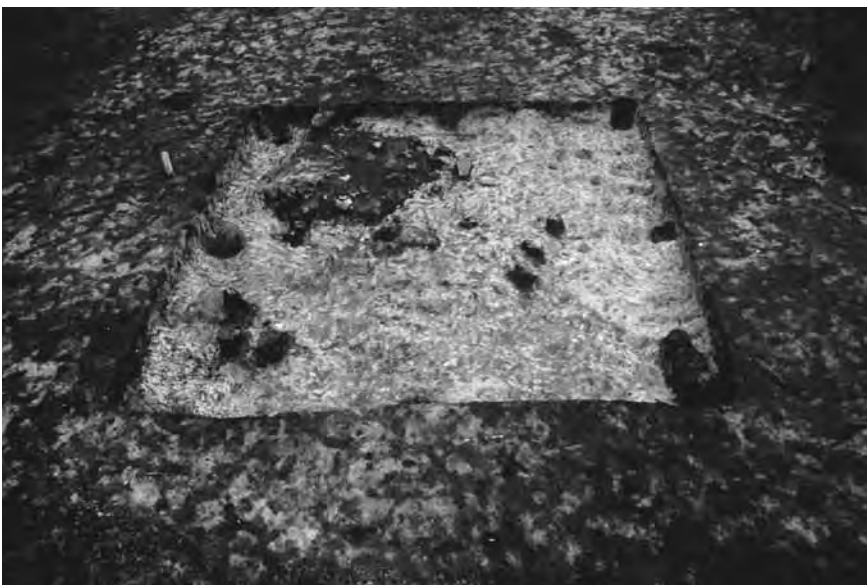
図版14



SI39カマド 北西より



SI40完掘 北西より

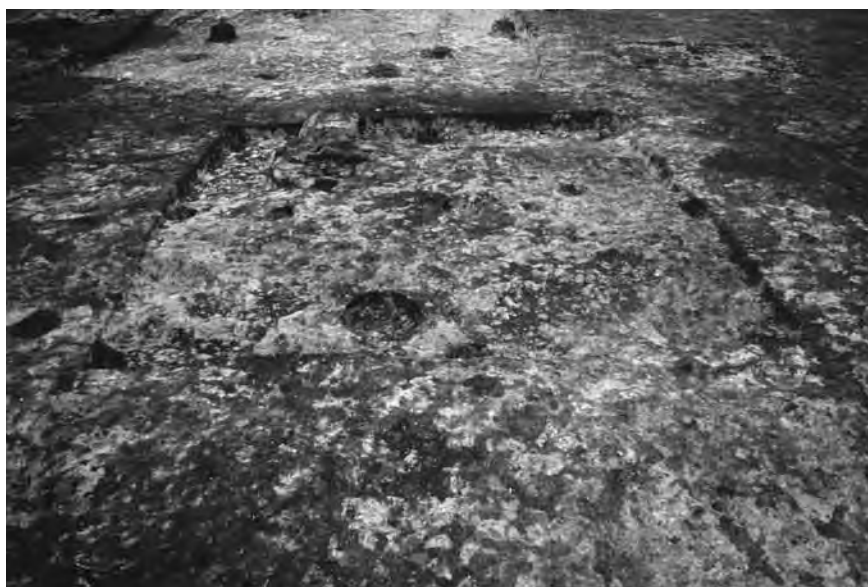


SI43完掘 北西より

SI44完掘 北より



SI46完掘 北西より



SI46カマド 北西より



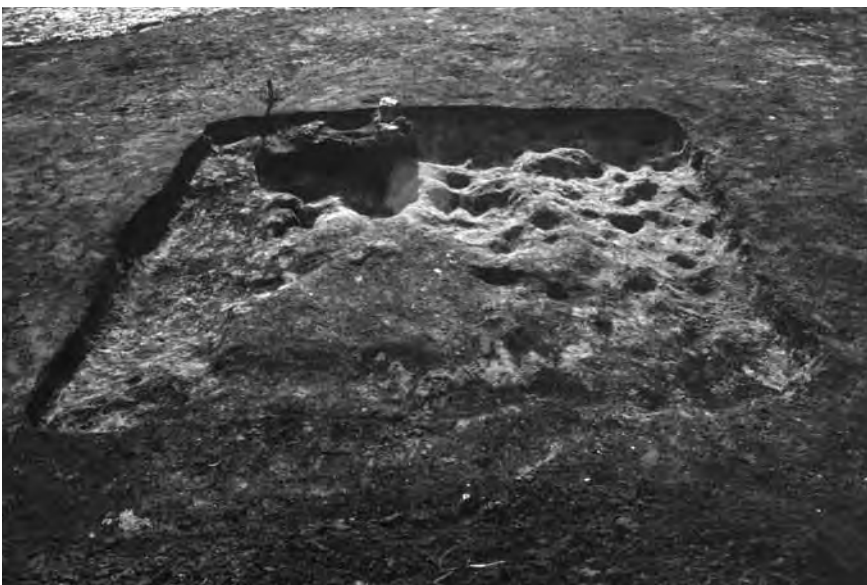
図版16



SI47完掘 北東より



SI49完掘 北より



SI50完掘 北より

SI51完掘 北西より



SI52完掘 北西より



SI52カマド 北西より



図版18



SI53完掘 北より



SI53カマド 北西より



SI54炭化材検出状況 北西より

SI55完掘 北西より



SI55カマド 北西より



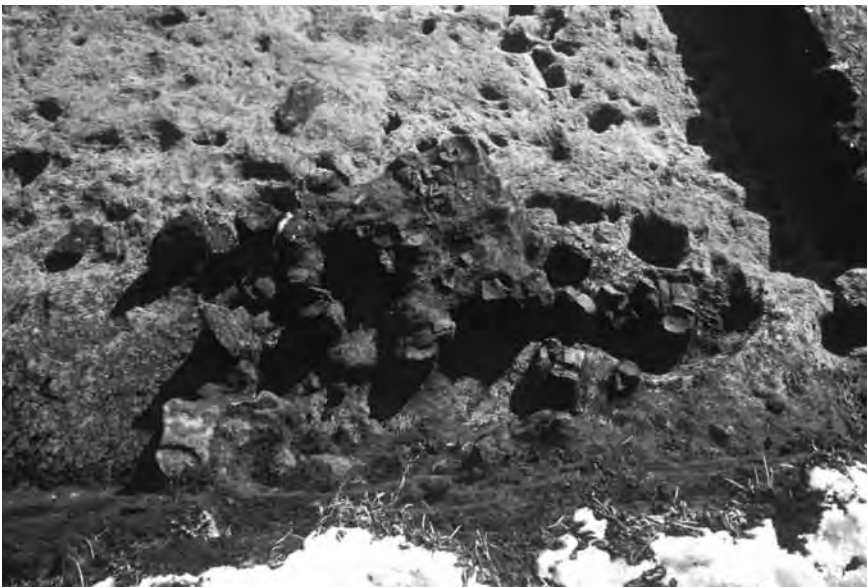
SI55カマド煙出しピット
北西より



図版20



SI55・56 東より



SI56カマド 北西より



SI57完掘 北西より

SI57カマド 北西より



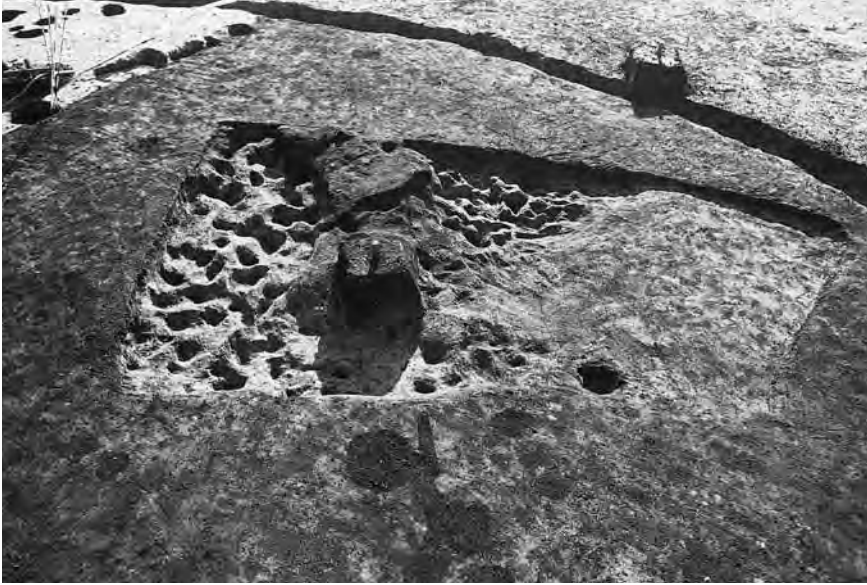
SI58土層断面 北西より



SI58完掘 北西より



図版22



SI59完掘 東より



SB 1 完掘 北より



SB 2 完掘 北東より

SB 3 完掘 北西より



SB 5 (手前)・6・7 (奥)完掘
北東より



SB 9 完掘 北西より





SB10・11完掘 東より



SK 3 土層断面 南より

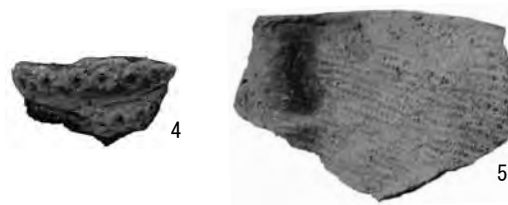


SK 3 完掘 南より

SI 65 (1~3)



遺物包含層 (4~11)



SI 1 (12~14)



第35図1

12



第35図2

13



第35図3

14

SI 2 (15~18)



第35図4

15



第35図5

16



第35図6

17



第35図7

18

SI 3 (19・20)



第35図8

19



第35図9

20



SI 4 (21~23)



第35図10

21



第35図11

22



第35図12

23

SI 6 (24)



第37図1

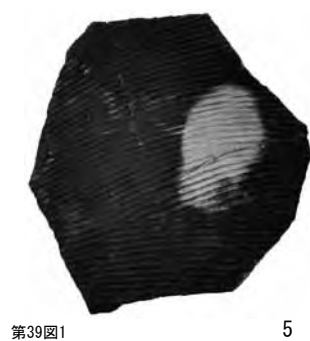
24

図版26

SI 7(1~4)



SI 8(5~8)



第39図1

5

第39図2

6

第40図5

9



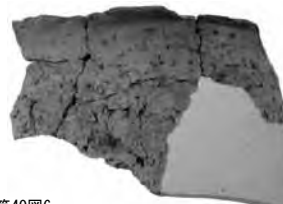
第40図3

7



第40図4

8



第40図6

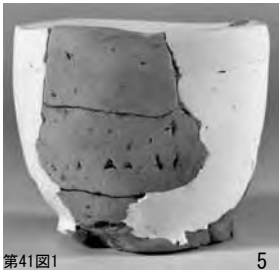
10

SI 7・8 出土遺物

SI 8 (1~4)



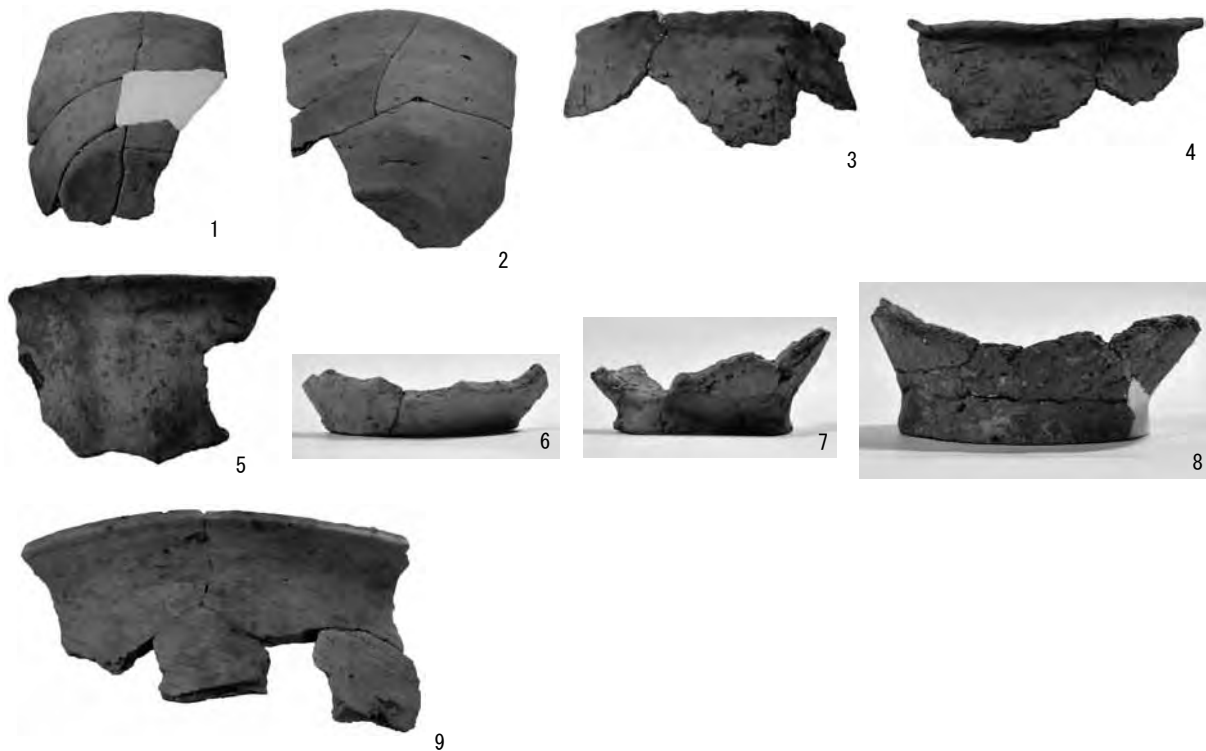
SI 9 (7~9)



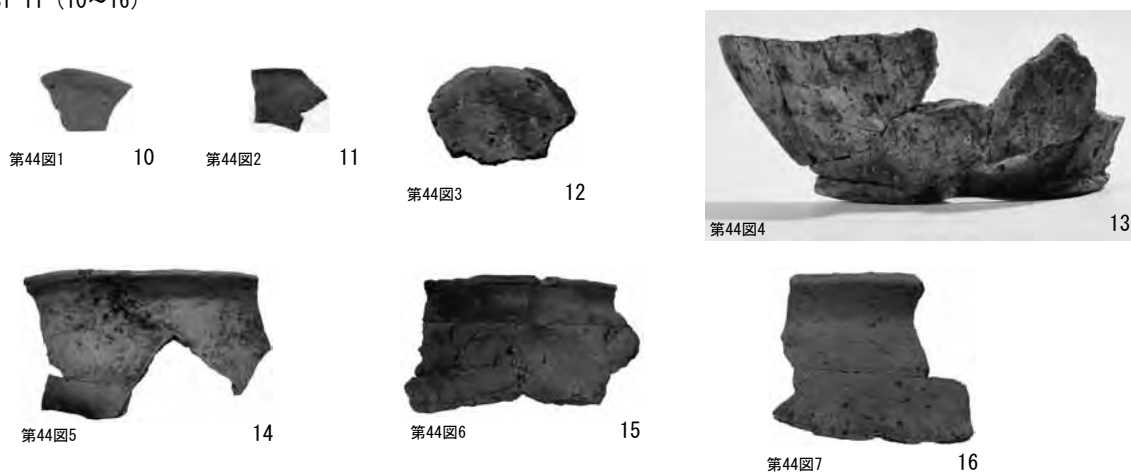
SI 8・9 出土遺物

図版28

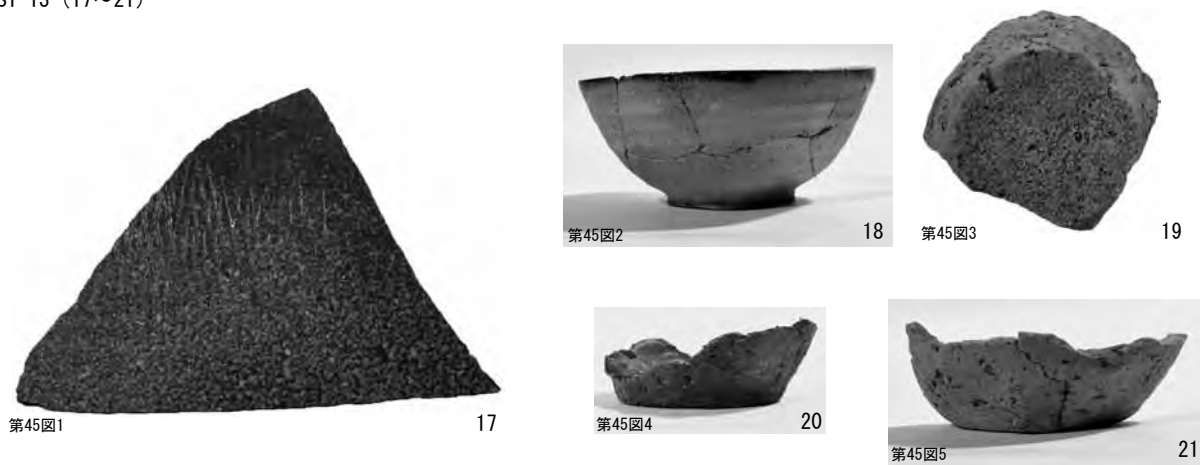
SI 10 (1~9)



SI 11 (10~16)



SI 13 (17~21)



SI10・11・13出土遺物

SI 13 (1~4)



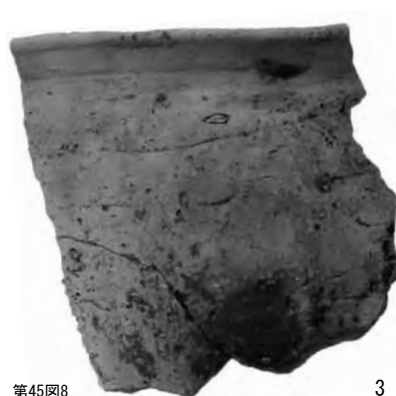
第45図6

1



第45図7

2



第45図8

3



第45図9

4

SI 14 (5~10)



第47図1

5



第47図2

6



第47図3

7



第47図5

9



第47図4

8



第47図6

10

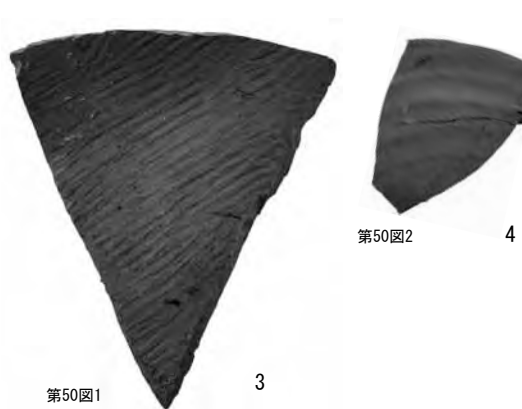


S114出土遺物

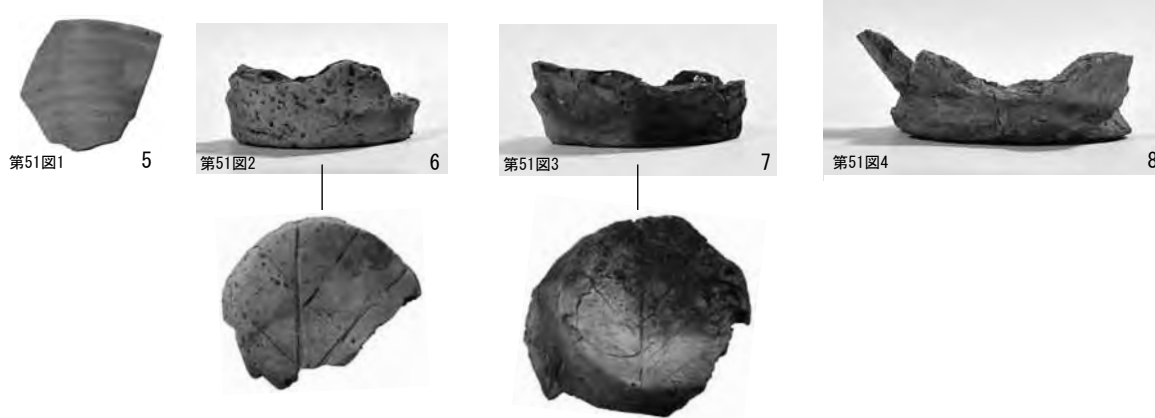
SI 15 (1・2)



SI 17 (3・4)



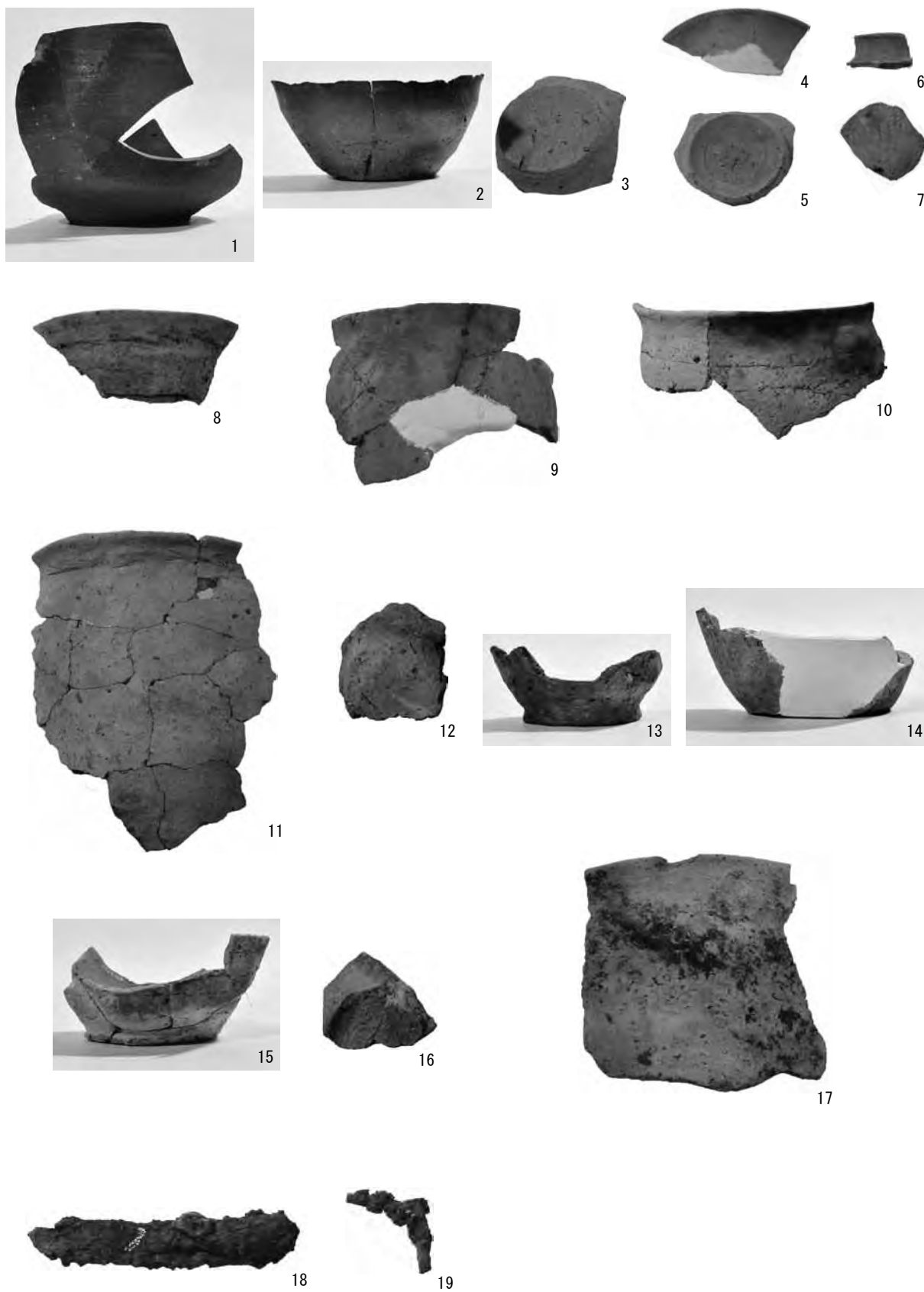
SI 18 (5~8)



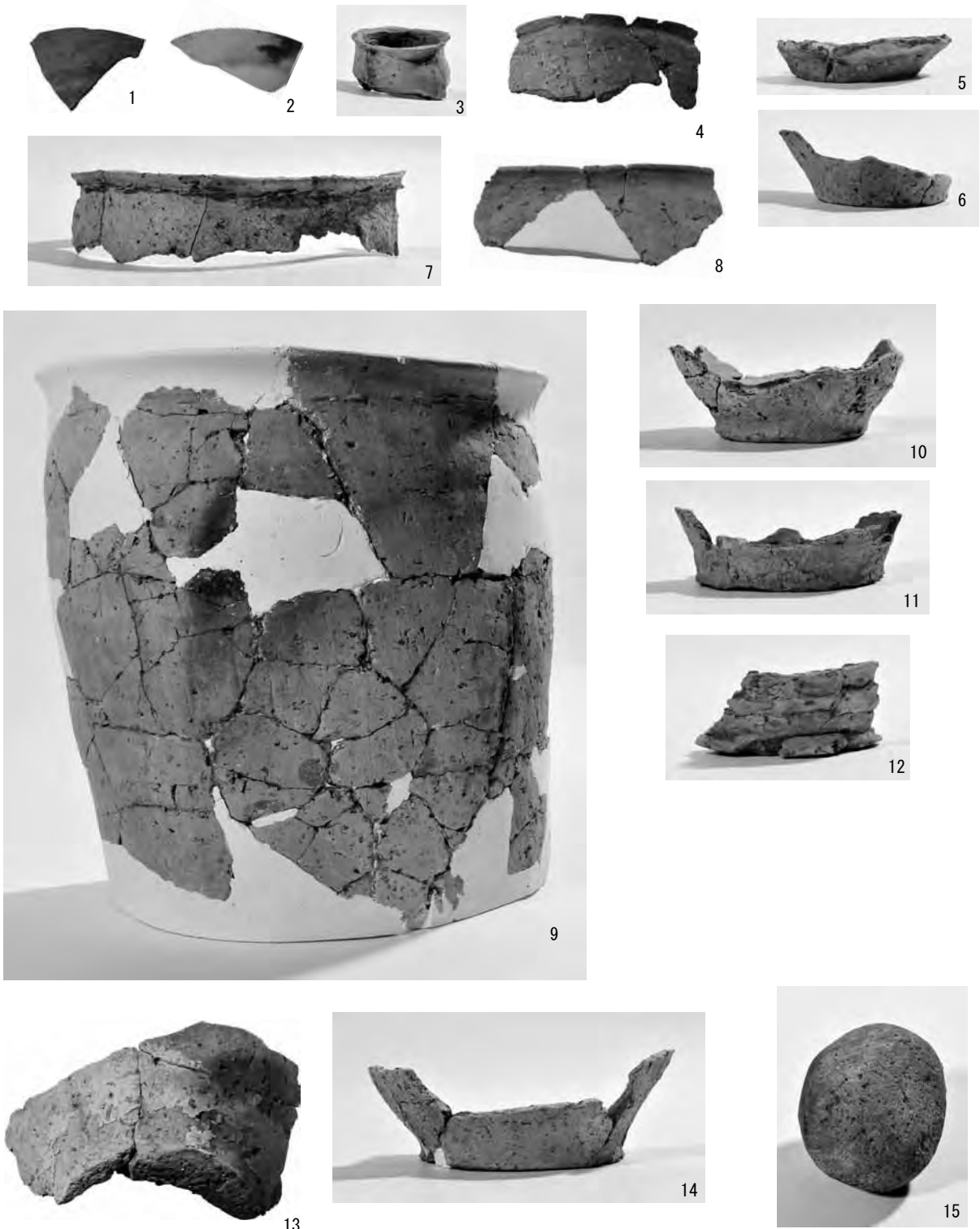
SI 19 (9~12)



SI15・17~19出土遺物



SI 21 (1~15)



SI 22 (16)



第57图1 16

SI21・22出土遺物

図版34

SI 24 (1~3)



1



2



3

SI 25 (4~10)



第61図1

4



第62図2

5



第62図3

6



第62図4

7



第62図5

8



第62図6

9



第62図7

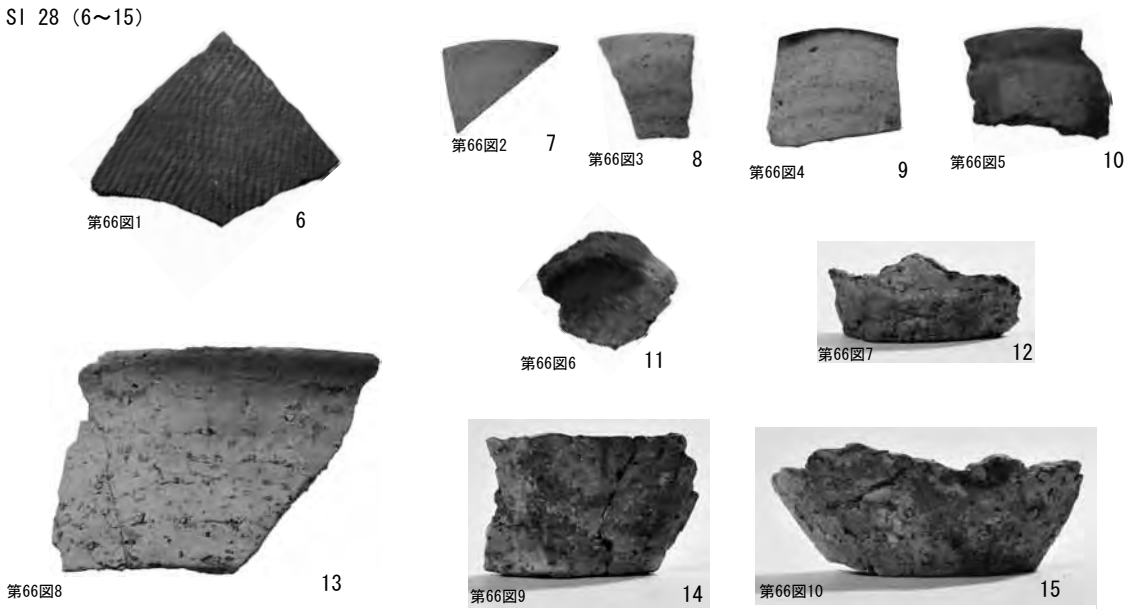
10

SI24・25出土遺物

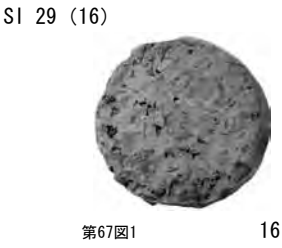
SI 27 (1~5)



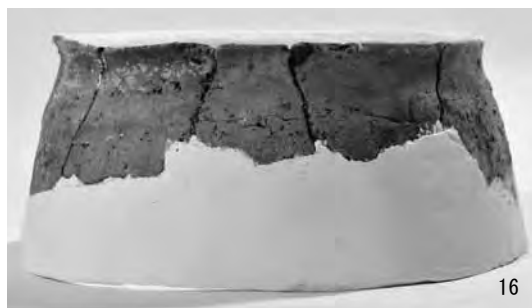
SI 28 (6~15)



SI 29 (16)



SI27~29出土遺物



SI30出土遺物 (1)



第69图17

1



第69图18

2



第69图19

3



第70图20

4



第70图21

5



第70图22

6



第70图23

7



第70图24

8

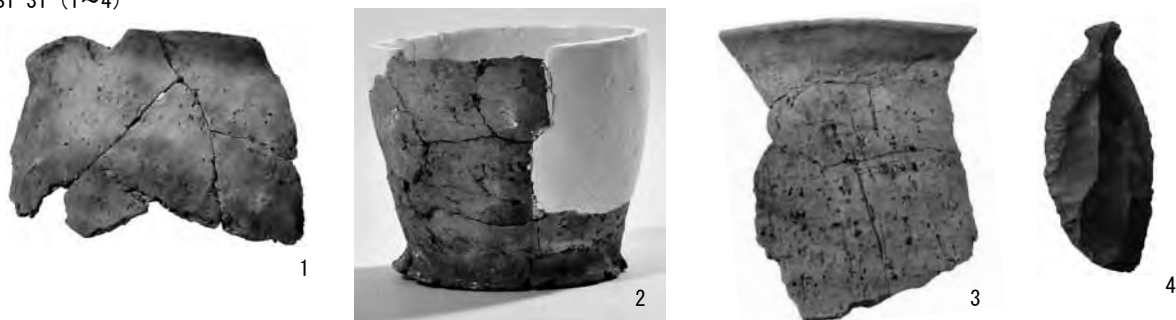


第70图25

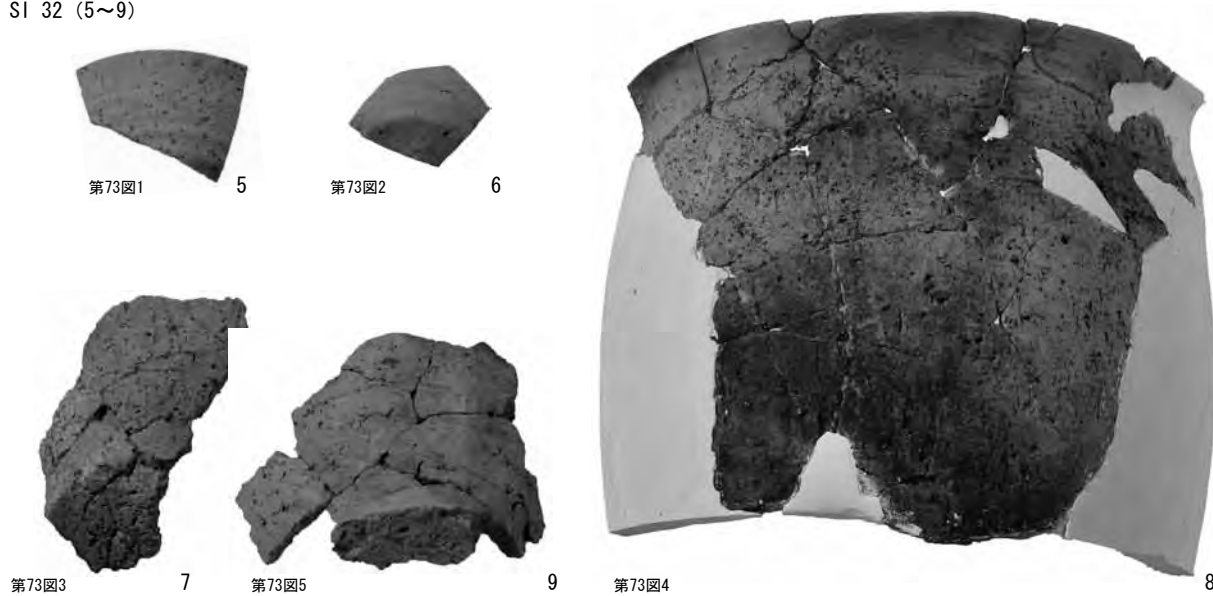
9

図版38

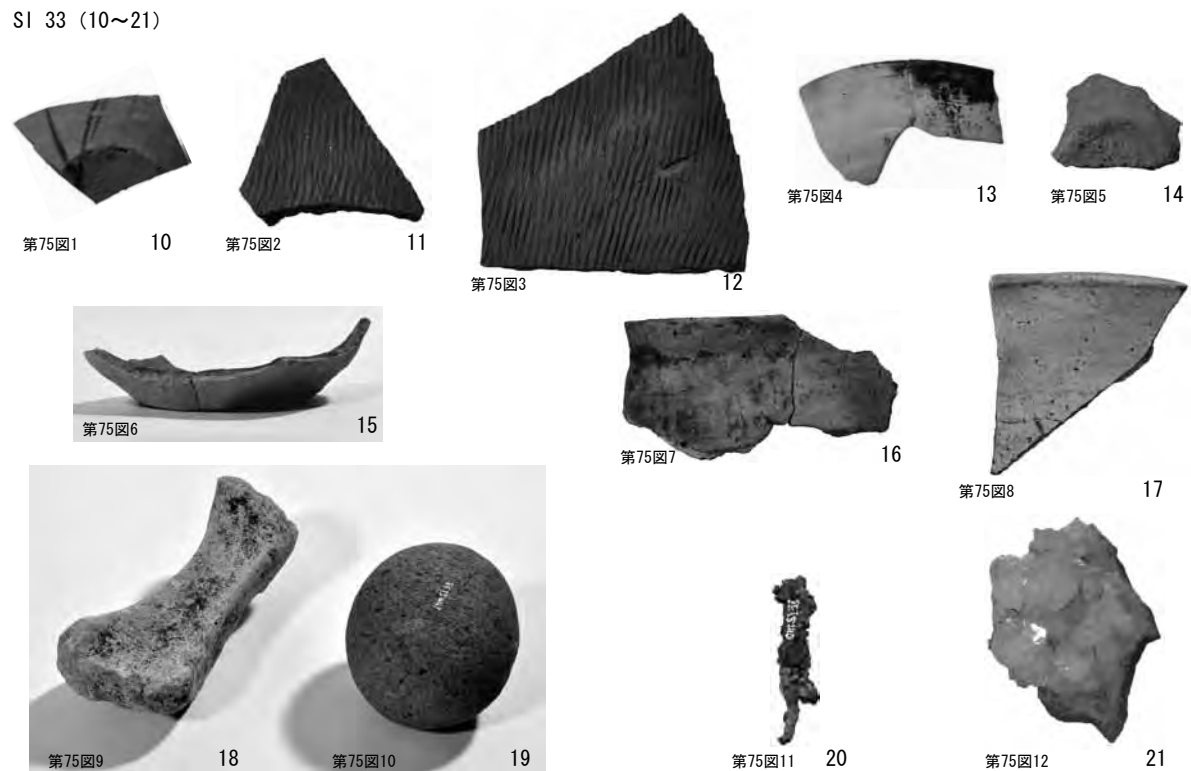
SI 31 (1~4)



SI 32 (5~9)



SI 33 (10~21)



SI31~33出土遺物

SI 34 (1~9)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

SI 35 (10~16)



10

第77図1



11

第77図2



12

第77図3



13

第77図4



14

第77図5



15

第78図6



16

第78図7

SI 34・35出土遺物 (1)

图版40



第78図8

1



第78図9

2



第78図10

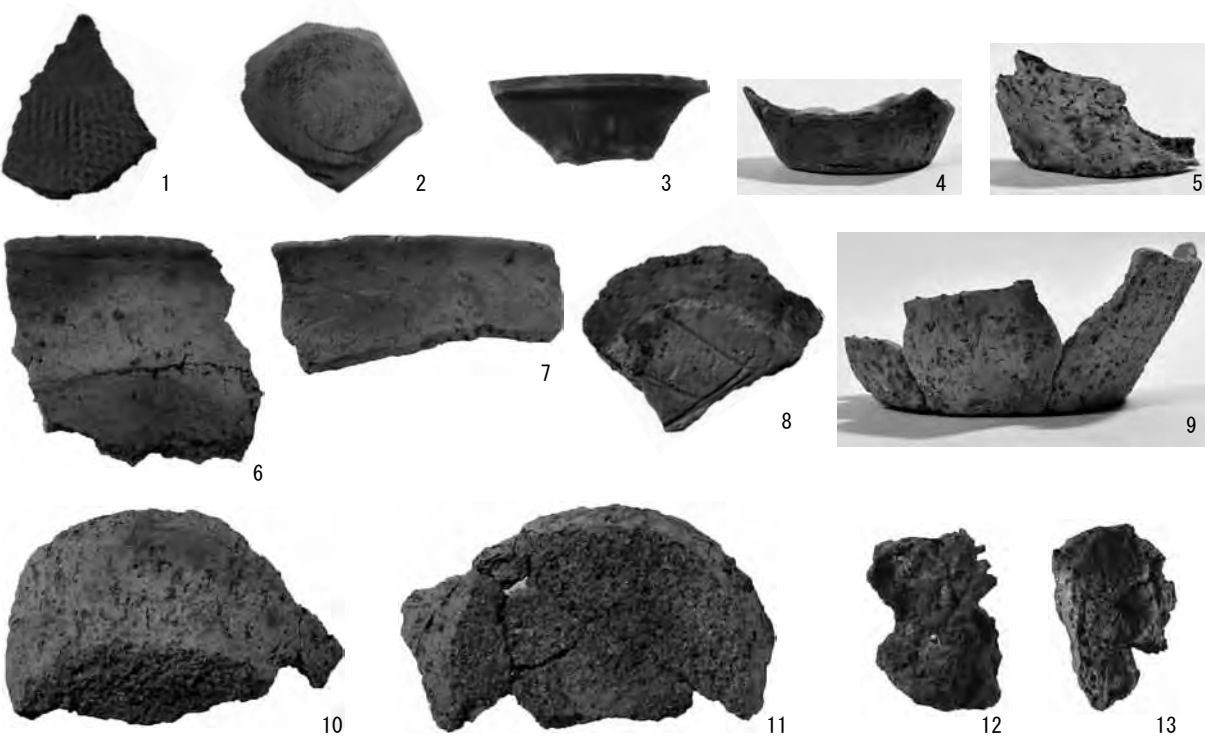
3



第78図11

4

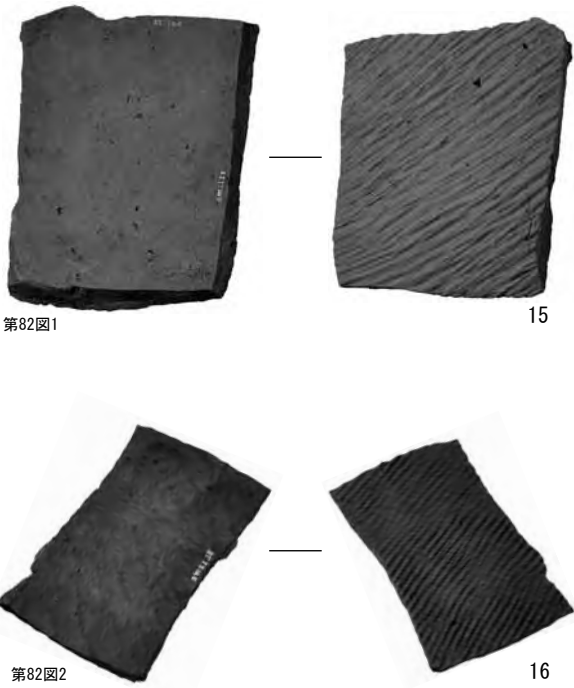
SI 36 (1~13)



SK 2 (14)



SI 38 (15~17)



第82図1

第82図2



第82図3

SI36・SK2・SI38出土遺物

図版42

SI 39 (1~5)



1



2



3



4



5

SI 40 (6~13)



第85図1

6



第86図3

8



第86図4

9



第85図2

7



第86図5

10



第86図6

11



第86図7

12



第86図8

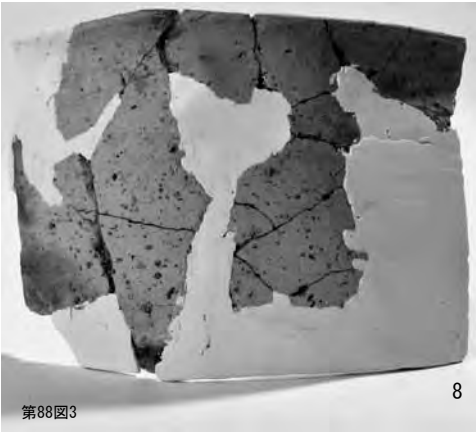
13

SI39・40出土遺物

SI 41 (1~6)



SI 42 (7~9)



第88図1

7

第88図3

8

第88図2

9

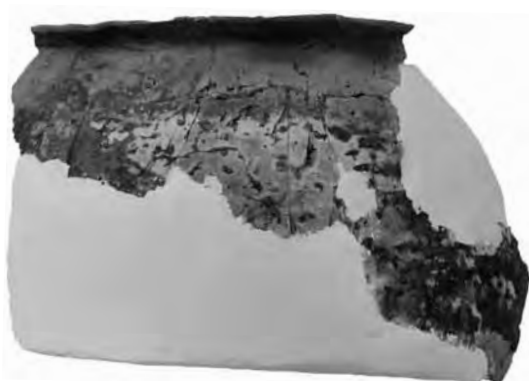
SI41・42出土遺物

図版44

SI 42 (1・2)



SI 43 (3~6)

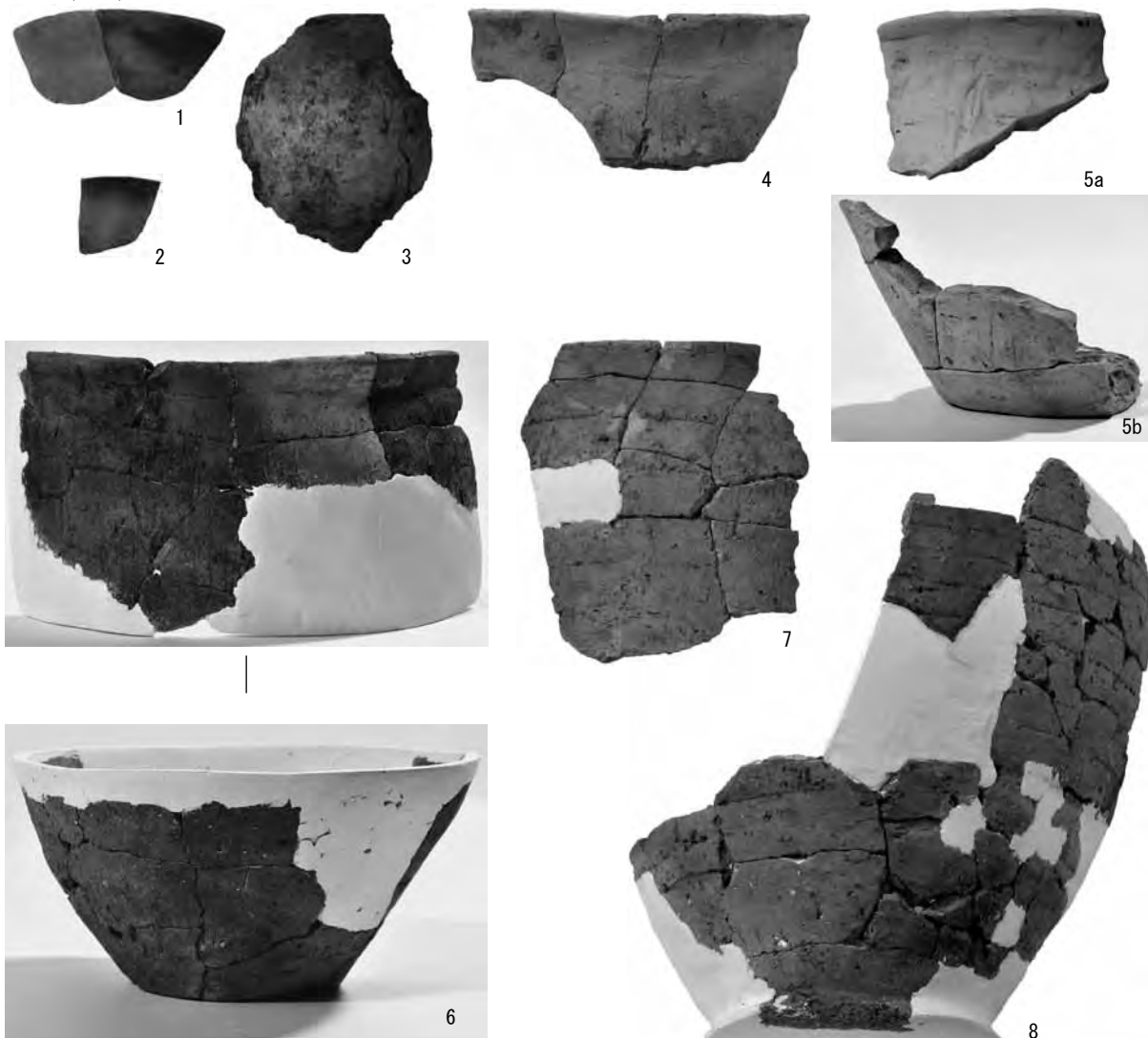


SI 44 (7~12)

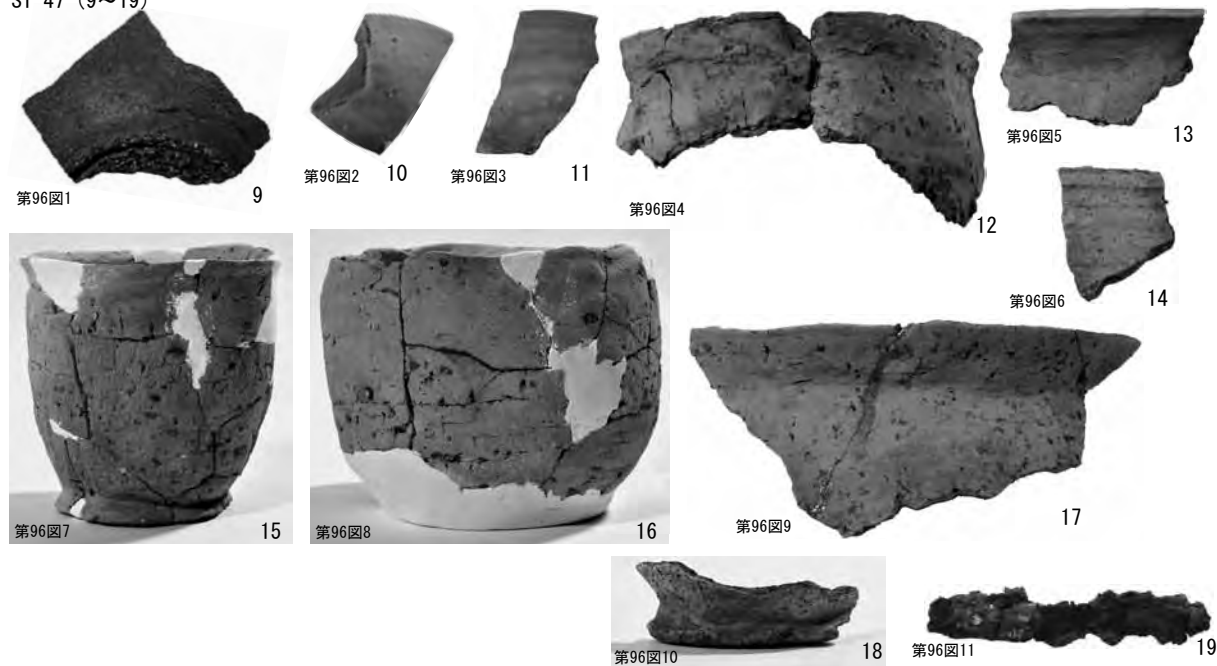


SI42~44出土遺物

SI 46 (1~8)



SI 47 (9~19)



SI46・47出土遺物

図版46

SI 50 (1)



1

SI52 (3~5)



第101図1

3

SI51 (2)



第100図1

2



第101図3

5



第101図2

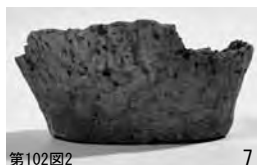
4

SI 53 (6~8)



第102図1

6



第102図2

7



第102図3

8

SI 54 (9~13)



第104図1

9



第104図2

10



第104図3

11



第104図5

13



第104図4

12

SI 55 (14)



第105図1

14

SI 56 (15~17)



第105図2

15



第105図3

16



第105図4

17

SI50~56出土遺物

SI 57(1~4)



1



2



3



4

SI 58 (5・6)



第107図1

5



第107図2

6

SI59 (7)



第108図1

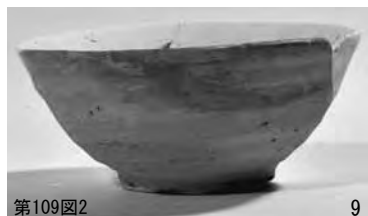
7

SI 60 (8~12)



第109図1

8



第109図2

9



第109図3

10



第109図4

11



第109図5

12

SI 64 (13~15)



第111図1

13



第111図2

14



第111図3

15

図版48

SD (1・2)



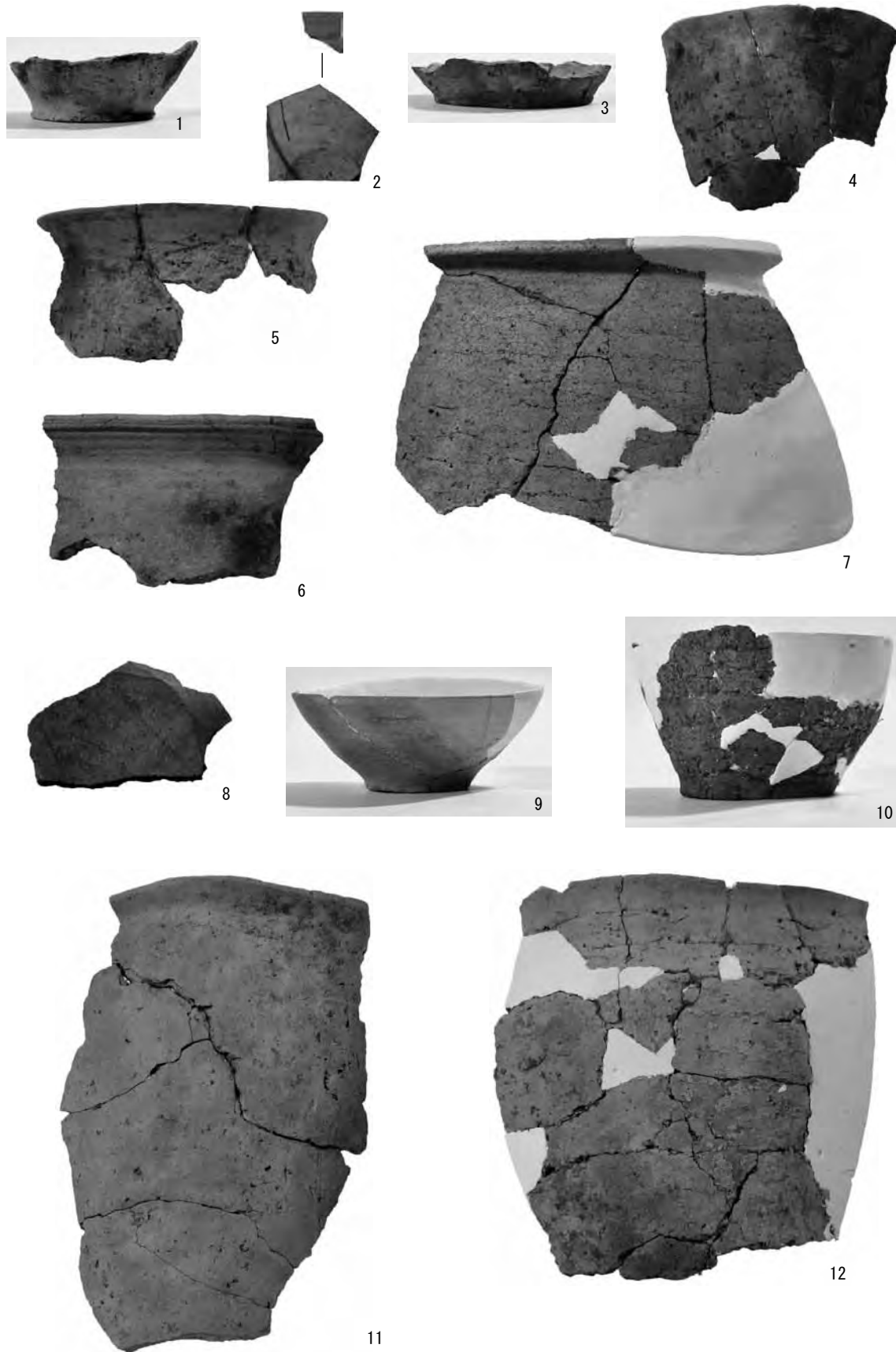
SP (3)



包含層 (4~22)



SD・包含層出土遺物



確認調査出土遺物 (1)

図版50

確認調査出土遺物（1～7）



第124図15

1



第124図16

2



第124図17

3



第124図18

4



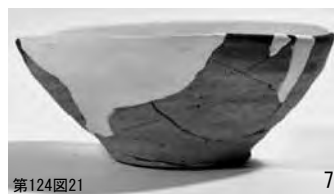
第124図19

5



第124図20

6



第124図21

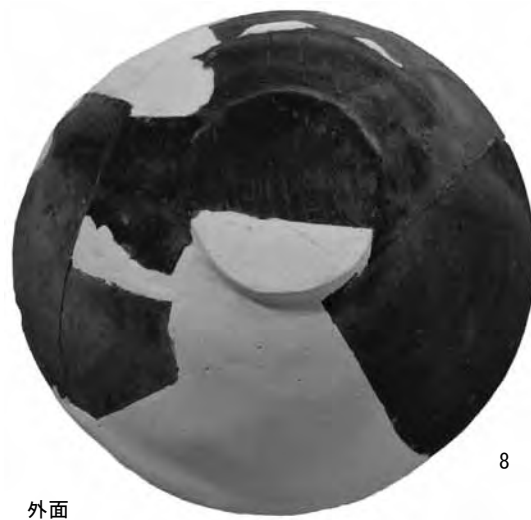
7

須恵器無台碗（胎土B群） 1 : 2

SI 35 第77図1



内面



外面

8

確認調査出土遺物（2）・平安時代土器 調整技法（須恵器無台碗）

SI 30 第68図2

1:2

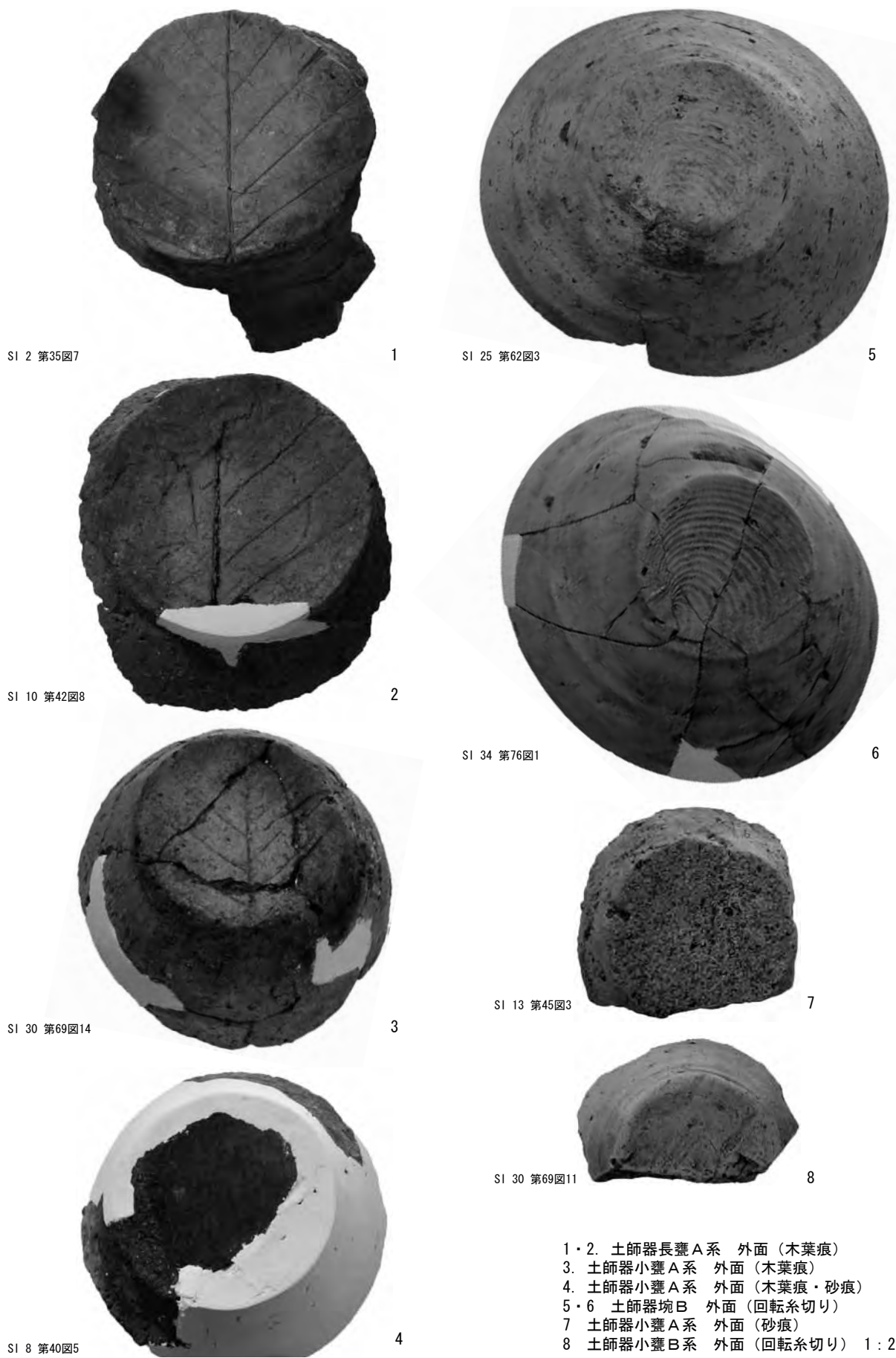
外面



底面



平安時代土器 調整技法 (須恵器壺)



平安時代土器 調整技法（土師器底部）

土師器小甕底部 1 : 2
外面（不調整）

SI 13 第45図4



1

外面（ナデ）

SI 36 第80図4



2

土師器埴B 1 : 3

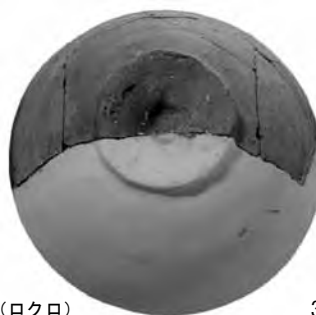
内面（黒色処理）

SI 13 第45図2



外面（ロクロ）

3



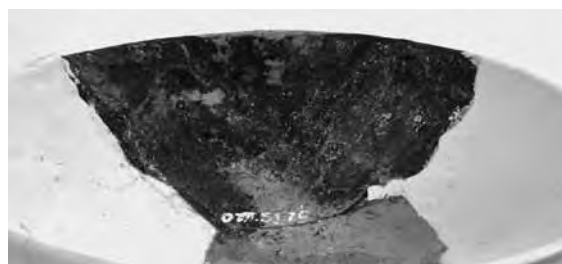
土師器長甕A系2類 1 : 3
内面（ナデ）



SI 58 第107図2

4

土師器無台埴 2 : 3
内面（灯明皿）



SI 30 第69図4

5

土師器小甕
内面（口縁炭化物）

SI 64 第111図1



6

SI 14 第47図2

7



SI 27 第64図2

8



SI 28 第66図5

9



SI 54 第104図3

10



SI 56 第105図2

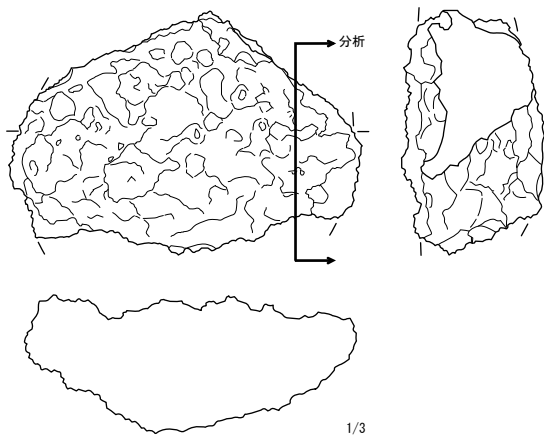
11



図版54

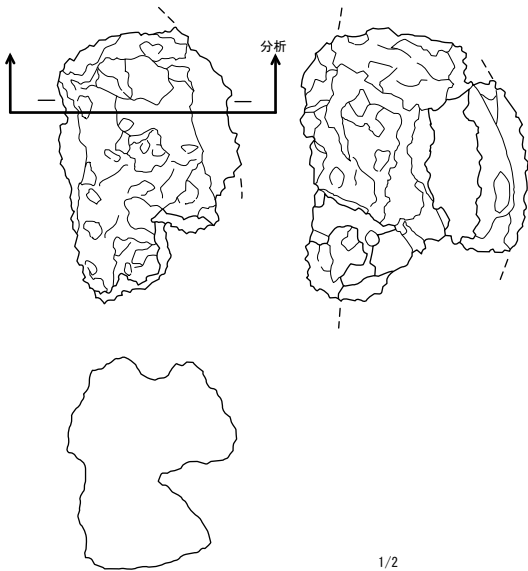
鉄関連遺物分析資料番号 1

出土状況	遺 跡 名		扇田道下遺跡		遺物No.		2			分	項 目	滓	メタル
	出 土 位 置		SI 4		時期:根拠		10 世紀前半 : 出土土器						
試料記号	検 鏡 : OOG-1	計測値	長 径 短 径 厚 さ 重 量	13.8 cm 9.5 cm 5.2 cm 1317 g	色 調	表: にぶい橙色	遺 存 度	破片	析	マクロ鏡検硬度	◎ ○		
	化学 : OOG-1					放射化 : —	地: にぶい橙色	破 面 数		3	E.P.M.A X線回折化学	○	
遺物種類 (名 称)	椀形鍛冶滓 (特大、含鉄)				磁着度	5	前 含 浸	—		耐火度			
					メタル度	L(●)	断面樹脂	○		カラー放射化X線透過		○	
観察所見	側部3面がシャープな破面になった特大の椀形鍛冶滓。上面は全体的に浅い木炭痕の残る平坦気味の面で、左側の肩部が盛り上がる。側部から下面は椀形で、表面には粉炭痕が密に残っている。破面の気孔は中層部分がやや肥大気味。含鉄部分は上面中央部の表皮直下で、手前側の破面には幅5cm程の含鉄部の影響による黒錆部分が露出する。接合はしないが、同一個体の可能性がある肩部破片を伴っている。												
分析部分	長軸端部1/6を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。												
備 考													



鉄関連遺物分析資料番号 2

出土状況	遺 跡 名	扇田道下遺跡		遺物No.		14		分	項 目	滓	メタル
	出 土 位 置	SI36		時期:根拠		10 世紀前半 : 出土土器					
試料記号	検 鏡 : OOG-2 化 学 : OOG-2 放射化 : ー	計 測 値	長 径	6.9 cm	色 調	表: 黒褐色	遺 存 度	破片	マクロ 検 鏡 硬 度 E P M A X線回折 化 学 耐 火 度 カロリー 放 射 化 X線透過	◎ ○	
	短 径		4.3 cm	地: 灰色		破 面 数	3	○			
遺物種類 (名 称)	梔形鍛冶滓 (大、含鉄)	厚 さ 重 量	5.6 cm 285 g	磁着度	4	前 含 浸	ー	析			
				メタル度	M(◎)	断面樹脂	○			○	
観察所見	大型の梔形鍛冶滓の肩部破片。上面は一部が生きており、左側部と上手側の側部がシャープな破面になっている。含鉄部の影響で右側部から下手側の側部にかけての中段部分が複雑に割れている。上面は浅い木炭痕の残る平坦気味の面で、右側部から下面にかけてはきれいな梔形を成す。表面には灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が面的に固着する。破面の気孔は肩部寄りに目立つものの、芯部では少ない。なお、滓は上半部の結晶が発達して青光りしている。含鉄部は芯部から上手側の肩部に広がっており、黒錆のにじみと放射割れが発達する。										
分析部分	短軸端部1/3を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。										
備 考											



1/2



報 告 書 抄 録

ふりがな	おうぎたみちしたいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	扇田道下遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大館市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	嶋影壮憲							
編集機関	大館郷土博物館							
所在地	〒017-0012 秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地 TEL 0186 - 48 - 2119 FAX 0186 - 48 - 2512							
発行機関	大館市教育委員会							
所在地	〒018-3595 秋田県大館市早口字上野43番地 1 TEL 0186 - 43 - 7111 FAX 0186 - 54 - 6100							
発行年月日	2013年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
おうぎたみちしたいせき 扇田道下遺跡	あきたけんおおだてしあぎおうぎたみちした 秋田県大館市字扇田道下	05204	4-65	40° 15' 46"	140° 34' 18"	19901030 ～ 19901227 19910401 ～ 19910420	8,500	記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
扇田道下遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	堅穴住居 堅穴住居、掘立柱建物 土坑、溝		縄文土器、石器 土師器、須恵器 鉄製品、鉄関連遺物 石製品		平安時代の大集落跡。 掘立柱建物を伴う堅 穴住居を多数検出。	
要約	扇田道下遺跡は秋田県の北部、大館市に所在する。遺跡は河岸段丘上、標高約68mに立地する。古代にあっては出羽国に服属するも出羽国内には含まれない。 調査は東北職業能力開発大学校の建設に伴って、実施した。範囲は校舎等建設部分の幅約80m、長さ約220mである。遺跡の範囲は調査区外にかなりひろがる。 調査の結果、縄文時代および平安時代の遺構・遺物が検出された。縄文時代の遺構・遺物はごく少なく、主体は平安時代の集落跡である。縄文時代で最も古い土器は縄文前期中葉で、土器は前期以降晩期まで断続的かつ散発的に存在する。 平安時代の遺構には堅穴住居約60軒、掘立柱建物13棟の他に、土坑・溝跡・ピットがある。集落の成立は9世紀第4四半期で、衰退は10世紀前半である。掘立柱建物跡には高床式倉庫と考えられる総柱建物が多い。遺跡の性格は遺構や出土遺物からみて、律令国家崩壊期の農耕集落と考えられるが、その成立背景には時期や立地条件からみて元慶の乱後の政治勢力との強い関係が想定される。 平安時代の出土遺物には大量の土器（土師器）のほか須恵器・鉄製品・石製品がある。鉄製品には鋤鍬先・手鎌・刀子・鉄鍬などがある。石製品はおもに砥石である。							

大館市文化財調査報告書第 8 集

扇田道下遺跡発掘調査報告書

発 行 日 平成25年3月30日
編 集 大館郷土博物館
 大館市釈迦内字獅子ヶ森 1 番地
発 行 大館市教育委員会
 大館市早口字上野43番地 1
印 刷 株式会社 成文社
 北秋田市鷹巣字上家下24番地
